
吸血魔王と赤血魔神

美平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血魔王と赤血魔神

【Zコード】

Z0191T

【作者名】

美平

【あらすじ】

殺されてしまった俺「葉月零花」（はづき ゼレカ）は自称神？からチート能力？を与えられ、異世界に転生させられた。辺り着いた場所は魔界。^{「インフルケティック}イロイロな事情が重なり、俺は『赤血魔神』として勇者とか賢者とかその他とかと闘う羽目に。しかし、（キラーン！）自称神？から与えられたチートで闘う、基本ほのぼの・コメディー・その他諸々が入り乱れるストーリー。初めての執筆なので、生暖かく読んでやって下さい。

始まつる会話（前書き）

初投稿です。

誤字・脱字・変な言い回し等ありましたら、教えて下さい。

始まりの会話

世界が見える

真っ黒な世界

黒くてドロドロしたその世界

わざとまで俺が居たあの場所

俺は世界に絶望した

何故絶望したのか、それは簡単なこと

俺の大事な人、守りたかった人、愛する人その全てを俺の目の
前で・・・

『殺された』

「！！」

不意に聞こえた声。しかし、その声は俺のよく聞く声

『何時までそこにいるつもりだ』

また聞こえた？響いた？いいか。そんな事

『お前は死んだ』

・・・知つていい。俺が臨んだ事だ

『・・・悔しく無いか？目の前で殺された事を。これ以上だれも殺させたく無いか？』

「・・・ああ。」これが死後の世界での残留思念でも、おれはそ
う願う

『なら、その願い叶えてやる』

光に包まれる俺の身体
行き着く場所は何処だろう・・・

仕事（前書き）

初めてなのでベースが掴めません。
とりあえずメインヒロインが出てきます。

仕事

——此処は魔王城。幾千、幾万の悪魔達の住む城。

此処は魔王城の正門。魔王城の城下街の防壁のようなもの。

「おい、みろよーあれ！」「あれは！」

「勇者の下僕のセイントペガシスじゃないか！」

「に、に、逃げるーー」

そう言って、一人が放った一言が混乱を招いた。しかし、

「騒ぐなって。俺だよ、俺」

そう言つてセイントペガシス 普通の馬の三倍程ある体に羽を生や
している の体が徐に動くと一人の少年が姿を表した。

「何だ、ゼレカか。」

「驚かせやがつて。」

口々にいう皆に俺は、

「おいおい、悪魔がそれでいいのか？」

などと、解りきつた答えしかかえつてこない質問をした。

「いいんだよ、俺達は。元々戦闘用悪魔じやないんだから。」

(ほら、やつぱり)

「まあいいや。それよりも「そんなことより、流石ゼレカだ。あの

セイントペガシスを一人で殺つちまうなんてな！」

「いや、だからそんな事より「そうだぜ！やつぱりお前は《赤血魔
神》だぜ！」

・・・囮られたかのように喋るな皆。まあ、そろそろ・・

「ゼレカ――――！」

ほら、来た

「ゼレカあいたかつたです~」

「オイシはこの国の姫『レスナーグ』本当はもっと長い名前なのだが、あつた時にそう呼べと命令された。これでもこの国の吸血魔王なのだ。姫なのに魔王? そんな事は気にしきやいけないぜ

「へ~わつきから何を言つてゐるの?~」

「いや、なんでもないさ。それよりも倒してきたよ、君の為に」

「ノーノいやだ~ゼレカ。私の為なんて」

といふかお前死ての依頼を俺がこなしただけなんだかな・・・

「それよりも早く帰りひま~」

「わかつたわかつた。レスナーグ」

「もう、ゼレカの意地悪」「はいはい。・・・レス」

仕事（後書き）

「どうも～作者の代弁者のティアンです。

「・・・ゼレンカです。」

「元気が無いなー、ゼレンカ」

ゼ「元気もなにもほとんどできていないだろ？」

テ「まあ・・・それは・・・僕のせいなんですけどね」

ゼ「レスの紹介もほとんどしないしな」

テ「それは次回とこいつ」と

ゼ「まあいいや・・・」のお話を読んでいたいた皆さん、ありがとうございました。感想やこのダメ作者への不満などございましたら、遠慮なく書いてやって下さご。」

城（城やの） - 時（前書き）

GWが終わってしまいましたね。

・・・これから学校が再び始まりますが、最低五十話は毎日更新したいです。

城(城やの)一時

今、俺とエレスは城に戻ってきた。本当はエレスは城で待っている筈だったのだが、さつきの台詞をみれば分かるようて待つていられなかつたらしい。

「むう。待ちくたびれたよ~」

「その訛。此處に来るまで三十回は聞いた」

「それだけ待つてたの」

「ふふっ」

俺が言うのもなんだが、エレスはとても可愛い。

水色がかつた髪が腰辺りまで伸び、紅く光る瞳が存在感をだしている。

・・・瞳が紅いのは悪魔・吸血鬼等の特徴らしい。

背は俺より頭一個分ぐら~こ小さ~こ。

「ゼレカ~。ゼレカの高さからみた世界つて、どんな感じ?..」

「ん~確か俺の身長が169?だから、エレスよりも高い田線かな

おおーっと。つい説明口調になってしまったぜ

「?あんまりわからないよ~」

「つまりこなんかんじ」

俺は後ろからエレスを抱き上げる。

「えつ？あつ、ひあ！」

「あー。こきなりでわるかつたな」

「抱き上げるなら一言こってよ」

「ふふつ。ゴメンゴメン」

そうこつて肩に座らせた。改めて抱き上げてみると、羽のようになんと軽い。

「わあーー！それがゼレカのみてる世界なんだーー！」

「喜んでいただけて光榮です。エレスナーグ様」

いつものように悪戯心がでてきたので、意地悪してみる。

「もひ、ゼレカ。エレスって呼んでつていつもいつてるでしょ。ゼレカの意地悪」

ふふつ、やつぱり予想通りの反応。

気づいているかもしねないが、エレスは俺に『エレスナーグ』と呼ばれる事を嫌つてゐる。嫌いというか、俺だけの特別な呼び方で呼んで欲しいらしい。

「やつぱり予想通りだった。」

「やつぱりつて、もひー。」

「君をみていると、悪戯心が刺激されるからね

「ゼレカー！」

「何？ ハレス」

「アリの呼んでくれる方が、やつぱり嬉しい」

なーんか言つてゐる間に玉座の間に着くハレスだ

「遅いですか、ゼレカさん」

『――』

おおひと、せひまつ。ん？ 今のは誰かつて？ 那は次回明らかに！

城(城やの)一時(後書き)

デ「いやー、ほのぼの甘甘じてますねーゼレカわん」
ゼ「今日は予告通りエレスの紹介をしてたな」

デ「裏話はこれから本編の方でばらじてこいたいと思つておつます
ゼ「……最初の会話の全貌も明らかにしないといけないしな」

デ「?最初の会話?ナンノ?ト?」

ゼ「忘れてたな」

デ「いやつ、そんなつ、忘れてたなんて。ちやんとこれから暴露されますよー」
ゼ「じうだか」

デ「そんなことより、次回はもう一人のメインヒロイントがでできま
すー!」

ゼ「お前があと一人で、メインヒロイントをだすのをやめるとは思え
ないけどな」

デ「まあそれは、作者のみぞ知るところ」とド

ゼ「結局お前だろーーそれとタイトルにもあるんだから、俺の能り
よK

デ「それでは、また次回」
ゼ「聞け————!!

城での一時（前書き）

いやー、まだ慣れないでタイトルとサブタイトルを間違えて入力して、その度にタイトル変更しています。

城での一時

「ソルーティア」

俺は目の前の女性へと言つた。『いっはソルーティア。エレスの使い魔だが、エレスを『主人』というよりも『妹』の様に扱つてゐる。当の本人も『下僕』ではなく『姉』と思つてゐる。・・・なんでこんなことを言うかと今ど、基本姉妹（兄弟もそうだか）は同じ様に扱つて欲しいのだ。つまり・・・

「ゼレカ。貴方は何度言つたら分かるの？私のことは・・・

「OK、OK。俺がわるかつたつて、ソル」

『妹』であるエレスを特別な呼び方で呼ぶ様に、自分も特別に呼んで欲しいといふこと。まあ、この時も悪戯心が芽生えたからなのであるが、前に一度からかいすぎたとこ『地獄（此処は魔界であるが）』のような目にあわされた。・・・あれは辛かつた。まさか

「ゼレカ。何を考えているのかなあー？私に教えて欲しいわー」

「いえ。なんでもないです」

心を読まれたあーーー！

毎度毎度のことながら不思議だ。心中なんて読めるものなのか？

「ソル～。どうしたの？」

「Hレス！！怪我とかしなかった？」

「うん！大丈夫だよ

「それならよかつたわ」

「…ソル、ソル。くつ、苦しい」

目の前でおきてるやり取りをみてると、本当の姉妹のようだ。ソルも髪の色が水色で、紅い瞳だから一見するとどっちがどっちか分からない。決定的な違いは、身長と髪の長さ。身長は俺よりも少し小さいぐらいで、髪は後ろで結んでいるエレスとは違いそのまま垂らしているだけである。

「それはそうとソル、何か用があつたんじゃないのか？」

「それは今のであらかたかたずきました」

エレスを弄るのが、大半かよ。

「ただ残りの用事が、『この城下街に向かって、魔物及び人間達の排除』というのを貴方に伝えることでした」

「ふーん。つて、おい！明らかそつちのほうがでかい用事だろ！」

「何を言つてるんですか！エレスを弄る方が重要ですよ！」

「わかった、わかったから。だつたらさつと片付けてくる

「ゼレカ！！また行つちゃうの…？」

「すぐ戻つてくるさ。だから大人しく待つてて

「・・・本当に、本当にすぐだよ？」

「ああ。かえつてきたら、エレスの大好きな『あれ』を飲ませてあげるが」

「本当に…だつたら尚更早くかえつてきてよ」

「もちろん。じゃあ、行つてくる」

「行つてらっしゃい」

「氣をつけて」

「ああ

そういうって俺は走り出した。

城での一時（後書き）

「とらあえずのメインヒロインはでしゃましだね」
ゼ「俺は』とらあえず』とこひ言葉が気になるんだが」

『「そんなことほこじやないです。次回はゼレカが楽しみにしていた』戦闘シーン』なんですか？」

ゼ「やうつと『セレ』をとつたな……。まあ、やつと俺の能力が明らかになるな」

『「とは言つても半分ぐらにしか力をださせないけどな」

ゼ「……もう半分もだすのか！？ やんと後々の」とかえてるよな
？』

『「多分考えてると思いますよ。『作者』が」

ゼ「だから、それはお前だ！」

『「……俺としては戦闘の後が一番書きたいんだけどな」

ゼ「何が言つたか？」

『「いえいえ。なにも」

ゼ「とりあえずは次回から戦闘が始まるので、宜しければ読んでやつてください。……やっぱほつこになる。おこ作者」

デ「それではまた次回」

ゼ「逃げやがったな！あの野郎！！」

攻攻戦（前書き）

GW疲れながら、体調を崩してしまいました。それでも更新は続けます。

『城一時の話』の前書きで「最低五十話は毎日更新したい」と書いたんですが、「最低五十話ぐらいいまでは、毎日更新したい」の間違いでました。

毎日五十話つてプロ並のペースですよね。時間があつたらやつちの方も修正します。

間違えてしまつたことをお詫び申し上げます。

攻攻戦

「…………それにしても、毎回毎回この量の魔物を仲間にしているのは一種の才能であり、俺達にとつては厄介極まりない災厄だぜ」なんてことを目の前の魔物の、そのまえにいる『人間』達に言った。ああ、早く城に戻つてエレスに『あれ』を飲ませたいなーさて。そろそろ片付けるか。

「覚悟しろー！ 悪魔め！」

おおー。威勢のいい剣使いだな。

「ちよっとー！ 油断しないでよ」

魔法使い（メイジ）にみえるが賢者だと思つ。魔法使いと賢者は放出してゐる魔力が若干違うからな。

「二人とも。目の前の敵から目を離すな」

ふーん。この魔法剣士が司令塔か。

「うむむせーなー！ そんなことは言われなくともわかってるよ

「覚悟してもらひわよ、魔王ー！」

…………Why? 今何か聞き間違えかもしけないけど、おかしな言葉が聞こえた?

「…………おー、人間ども」

ちょっと声色を低くしてみました

「何だ？魔王」

……やつぱり、俺を魔王って言つた。聞き間違えじゃなかつたな。

「クククつ。俺が魔王か。残念ながら俺は魔王じやない」

「…………」

つまるとこ、俺はRPGラスボス前の中ボスつてことだ。

だけどチートを標準装備しています。謝る気はないけど、「メンなさい

「くへ、まだこんな奴がいたなんて」「命じこは済んだか？」

そつ言つて俺は魔力を右手に集中させ、棒のよつな細長い槍を創つた。

『深淵の槍』
〔ランサー・ソロ・ダーク〕

俺はその槍を人間達の後ろにいた魔物達に投げた。

「…………」

「なつ！」

俺の投げた槍の周りにいた魔物達が一瞬で消えた。

消えたわけじゃないんだけど。

「やつ、そんな馬鹿な……」

「魔物達の数は千体はいた筈だぞー。」

説明『苦労

簡単に言つと、人間達の後ろにいた魔物達はあと四百体程になつて
いた。

消したわけじゃなく、正確には『浄化』したんだ。
これでの魔物達、はまた俺達に従つてくれるだろう。

「皆、距離をとれ。いつも通りにやればこんな…………や…………つ…………」

『ゴキツ……』

長々喋つてゐ間に一気に近づき、頭を持つて首の骨を折つた。

「アイザック……」

「よくもあいつを……」

そんなことはお構いなしに俺はアイザックと呼ばれた魔法剣士の血
を抜き、瓶に詰めた。

「何をしてる……やめろ……」

さて、血を全部抜き採つたから……

「そんなに返してほしければ、返してやる」

白く、冷たくなった身体を放り投げた。

「遅い」

投げつけた後に、自称神にえられた能力の一つ、『想像創造』をつかい一本の『刀』を創つた。

『黒刀・鎌鍵』

鎌のような形状をした刀。

その刀で魔物達を斬りつけた。「いくぞ。『命刈り（ブレスキラー）ト』！」

周りにいた魔物達は見る見る黒い液体をまき散らす。ある物は、頭をとばしても向かってくる。ある物は、肉片になるまで暴れる。

「はははっ、はははっ、ハーハーハッ！」

生きてるものを刈り取る刀

「なつ、何だコイツ！？」
「ばつ、化け物！！」

……おおーっと、危ない危ない。つい狂っちゃった。

「それじゃあそろそろ、魔王様の為に死んでもらおつか

「いっ、嫌つ——！」

「助けてくれー！」

「……見苦しい」

そう言つて、刀を振るつた
ザシュー！！

「セーってど、服が赤くなつたけど戻るか」服だけじゃなく髪も赤
いけど早くエレスに会いたいから、おとす前に先に会おうかな

浮かれた足どりで城に帰るのが自分でもわかつた。

俺が後にした場所には生き物が残ることはなかつた。

攻攻戦（後書き）

「改めて、作者の代弁者の『トイエンでーす』

「本当に改めてだな。何かあったのか？」

「いやーなんとなくもう一度いつといふと思つて」

「そうか」

「といひで、戦闘のほうはどうでした？ゼレカさん」

「あれで半分もだしきつたのか？俺はまだまだ半分もだしてなかつたけど」

「まあ、これからチート能力もばんばんだぞ」と思つのでガンバツて

「武器想像もそつだけど、魔力を……魔法なんかの技を使いたいぜ」

「さて 次回はいよいよ俺が書きたかつた話だ」

「……ちなみにきくが、どんな内容だ？」

「…………ガンバれつ、ゼレカ」

「何が！？」

（ほんつ）

「身体、大事にしろよ」ゼ「何故肩を叩いた。それに身体つて…」
「それと、後書きと本編の方を少しだけ変えました」

幸福物質（前書き）

今回は早く書きたかった話です

本当はもっとピンクムードにしたかったんですが、自分の文才のな
さが災いして温めになりました。

それでも一応ピンクです。
苦手な方は御注意ください

とつあえず今、俺は城の中に戻ってきた。

服は魔物の血が、髪は人間達の血で真っ赤になつていてる。

その格好のまま俺は玉座の間にきた。

理由は簡単。早くエレスに会いたかったからだ。

そして、俺は、扉に手をかけた。

「ただいま」

「ゼレカ～！～！」

「つと。待たせちゃったね

「もつと早く帰つてくると思つたのに～

「「ゴメン」」めん

「ゼレカ。早く～」

?俺はなんのことか分からなかつた。が、

「ああー。でも、シャワーを浴びてからね

「シャワー浴びるの?だつたら私も…」

「却下」

「即答ーー?」

「いや、普通にまずいだろ。一緒に」

「ムウ~。大丈夫だよ」

「はいはい。とりあえずシャワー浴でくるから」

「あつ、ゼレカ!!」

ガチャン

エレスが何か言い終わる前に俺は扉を閉めた。

ドアの中

「ふふふ。ゼレカ、覚悟してなさい」

ドアの外

ゾクゾク!!

今何か悪寒がした……気がする。

「…………せつせと入つてくるか」

今おもえば、この時に対処しておくべきだった

脱衣所

此処は魔界だけど、血のシャワーがでるわけでも、マグマの湯舟で
もない。

俺が創つたんだが、普通の露天風呂と大差ない。

その露天風呂がエレスやソルにも人気だつたという、ある意味衝撃
だつた事実。
なーんて思いながらコートを洗濯し、扉を開ける。

カラカラ

扉を閉めて、身体についた魔物の体液と髪についた人間の体液を洗
いながす。

鏡をみると俺の髪が黒ずんだ赤から、漆黒に戻っていた。

チャポン

「ふうー」

湯舟に入ると、つい声がでちまつ。これはこの世界にくるまで、つ
まり殺されるまえからのことである。

それにして戦闘のあの風呂は気持ちいい。

チャポン

……今の音は?もしかしなくとも……

「ゼレカ あんまり遅いから入っちゃった

……予想的中

「遅いって、入つてからまだ十分もたつてないだろ?」

「?なんで後ろ向いてるの」

「なんでもなにも、タオルまいてないだろ」

「ふふふ、何言つてるの。ちやんとまいてるよ?ゼレカのエッチ」

「…」

落ち着け。落ち着け俺。ここで洗濯をミスつたり…………って選択をミスつてるー?」

「それよりゼレカ。ここは温泉だから、ここのはうが飲みやすいよ

「ああっ、それもそつか」

振り向いて『あれ』を飲ませる準備をした。

少し鼓動が高まつたきがする。

本当にタオルをまいていた

「ゼレカ、顔が赤くなつてるよ?」

「／＼／＼何でもない」

そして、おれは……自分の指の皮膚を歯で噛み切った。その指を工
レスの口に運んだ。

「はむつ」

「……、くつ」

「チュツ、ハア、チュツ、ンツ」

血を吸われてる時は、痛みを抑える為に快楽成分の含まれた唾液をだしているらしい。

その結果が今の状況

普通の露天風呂で今みたいなカップルがいたら、まず間違いなくピンクなことをしていると思われる。

「クチュ、ズチュ、ハア」

吸血鬼にとって人間の血は最高の代物だから、血を飲んでる時はとても恍惚している表情だ。

「クチュ、……ゼレカ。もう止まつひやよ~」

「あつ、Hレス飲み過ぎだよ」

「ゼレカの血だから、ツク残したくなかったノ~」

酔つて潤んだ瞳。そしてここは露天風呂。もちろんのこと、入浴中なので（タオルはあるが）お互いなにもきていない。

……理性が音をたてて崩れるかもしれないが、

「だからって酔つまで飲まなくて……」

……それ程俺が好きならいいかな。

「俺もエレスのことが好きだよ」

「ふえー!?」

そうして、俺はエレスと唇を重ねた

「チュク、ズルツ、ン」

「ゼッゼレカ！？今、わっ、私ゼレカと……。キュルーン／＼／＼

「おおつと」

倒れる前にエレスを抱えた

抱えた？

今改めて自分のおかれた状況を確認する

……どうすることもできなくね？

仕方ない。あんまりやりたくない手段だけど……

とりあえず、自分で手ぬぐいを創つて、田隠しをした。

非常事態だから田隠しなくてもいいかと思ったが、本人の了解も得ないのでみるのはまずい。

……エレスが起きてたら俺の田隠しをとつてるだろうが、それでも了解をとらないことには自分からはしない…………と思つ。

理性が崩れなければな

その格好のままHレスの身体を拭く。

……今の自分を客観的にみると自分に、『どんなプレイだーー』と
シッコミたくなる。

自分の身体も拭き、新しい服を創造する。後は……

「おい、ソル。Hレスのことを頼みたい……」

「はいっ……わかりましたーー！」

言い終わるか、終わらないかの速さで来た。これで大丈夫だろ。

「ああ、Hレス。今の貴方はなんて可愛いらしげの一 服を着た
ら私の部屋に行つてあーんなことや、こーんなことをしましょ」

…………Jriesはこれで別の問題が発生しそうだけど、勝手に入つ
てきたりてことだ

「それとゼレカー。明日にでも戦いの報告をしてもらいたいんです
が」

「それなら今……」

「『『明日』お願いします』

「……はーー?」

なんだ！？今の！恐怖以上の何がだ。

……ごめんエレス。明日また血飲ませてあげるから。

そのまま俺は部屋に戻った

幸福物質（後書き）

「書きたかった話がやつと書けました」
「遺言は一文だけゆるしてやる」
「ちよひ、ゼレカわふ、穩便にこきましょつよ。お
一文おわつたな。『斬刀狩り』」
「おつと。危ない危ない」
「ちつ。弱点を知つてたか」
「もちろん。真上までは居合がどどかない」
「まあいいわ。それより、こんな調子でいいのか?」
「そういうふと思つてゲストをつれてきた」
「ゲスト?」
「エレスナーグさんです」
「ほんこちわ~」
「…エレス…」
「ゼレカ。あのタイミングで好きつて言つてくれるなんて……私

嬉しいです
ゼ「そつそつかーーー

H「でも、あのままもつと『樂じこ』」とができたからかったのに
「

ゼ（まはま）「それはそれで俺が困る）

デ「ふふふつ

（ゼ（ヅクつー）

デ「Hレスナーグさん。その願い叶えて差し上げましょつ

H「本編ーーー」

デ「まだつー。本編でそんなことやつてこと細つてゐのがーーー」

デ「確かに、『本編では』そんなことはまずこ

H「そやうなごですか？」

デ「だがつー！『後書きなり』句をやつても許される。何故か？それは、『俺が作者だから』だーーー」

H「すいこでーーー』『イソンさん

デ「ちよつ、待つたーーー」
デ「なんだ今更。せいぜい『遺言』とか言つたこと、後悔するがい
い

ゼ「なつ……」

デ「エレスさんは、どんな罰が……間違えた。どんなことがしたい？」

エ「私はとことんゼレカを弄びたいです、ティーンさん……」

デ「クククっ。とことん弄ぶかっ。なら『チート能力封印して、女体化』がいいかな」

ゼ「考え直せティーン、エレス！——それにいつのまにか仲良くなってるし」

デ「さて（黒笑い）次回の後書きが楽しみだなあー」

エ「私も楽しみになつてきました」

ゼ「…………俺は今すぐ『明口』を壊したいぜ。俺から全てを奪つた
アイツに」

デ「シリアルスマードになつても、無駄だぞ」

ゼ「ちひ」

デ「それでは……」

デ・エ『次回へー』

ゼ「次回よ。こないでくれ……」

泡沫会話（前書き）

今回はシリアルアスです。

そして予告通り後書きで『闇』をやつしますーー。

泡沫会話

「ふう」

俺は風呂から戻つてベットにのつた。

ベットの上からみる天井は、何かを錯覚させる。

「今日もいろいろなことがあつたな」

そうこうで、俺は目を開じた。

…………。」

ああ、…………あれか…………。
いつもの…………『夢』。

「よう、ゼレカ」

こいつが俺にチート能力を与え、黄泉がえらせた自称『神』

「おい、その呼び方をするな。俺のことば『マムート』と呼べといつたら」

……神であるかなのか、俺の心をよめるらしい。……そんな感じで
り。

「何か用があつて現れたんじゃないのか？」

「ああ、そうだ」

「だったら早く用件を言え」

「…………お前の気持ちが変わつてないか、聞きにきた」

「なんだ、そんなことか。『俺は友人と恋人を目の前で殺され、俺を殺した奴を許さない』ってことだろ」

「気持ちは変わつてないようだな。『あの時』よりも正確に受け答えができるんな」

「当たり前だ。『あの時』は事件の直後だったからな。…………今とは違つ」

「気持ちが変わつてないよつて、俺は嬉しいよつて悲しいがな

「黄泉がえらせてもらつた時は驚いたが、今となつては普通のことだ

「…………そりゃ、お前魔界にきてどのへりこ経つた?」
「確か一ヶ月くらいだ」

「…………そりゃ、魔界と下界じゃ時間の速さも違うからな。下界では四ヶ月ぐりいに相当する時間だぞ」

「やつぱりそんぐらいか」

「時間も伝えたし、お前が何か聞きたいことがなければ俺は帰るぞ？」

「聞きたいことか。なら……」

「俺の能力をもう一度確認させてくれ」

「お前の能力か。わかった。

まず一つが『身体能力向上』。これは下界の時のお前よりもいろいろな面で、身体能力が上がっている。

二つ目が『肉体変化』。これは魔力やその属性を附加する能力……と いうより改造のようなものだ。魔力は魔王や天使よりも上。属性は使い放題だ。

この一つはお前を魔界におとす前に施した能力。『魔神』となつたお前の基礎能力のようなものだな。

そして三つ目が『想像創造』。お前が『想像』したものを瞬時に『創造』する力だ。…………ただし、生き物を創造することはできない。食糧なんかは大丈夫みたいだが

みてたのかよ……

「俺は神だからな」

また心をよまれた

「ま、そんな説明でいいや」

「そうか」

「最後にもうひとつ。お前はなんで、俺を黄泉がえらせた？」

「…………それが。それは俺にもよくわからん。別に俺が殺したわけでもないし、お前を黄泉がえらせるように言われたわけでもない。ただ、昔の自分をみているようだったから、かな」

「…………わかった。それだけきければ十分だ」

「なら、俺はもう帰る」

「ああ。…………またな」

「用があつたら現れるからな」

そう言つて、マムートは消え俺の意識は闇に溶けた

泡沫会話（後書き）

「テ「やーあーやつてまつりましたーお待ちかねの後書きタイムです」

「H「うみゅー。ディンさん、私今回出番無かつたですよー。」

「デ「うめんじめんHレスさん。ここの辺でゼレカの目的と能力説明があつたほうがいいと思つて」

「H「まあ、後書きで沢山出番があるから良いですけど。次回は私の出番を増やしていくださーーー。」

「デ「もういちどんーー明日はHレスさん視点で始まりますから」

「エ「そうなんですかーわーー、明日が楽しみですー」

「デ「それよりも、予告通り。あれを始めません?」

「H「そうですよーーーそれが楽しみだったんですから」

「デ「ゼレカの奴はまだ本編と思つてゐるから、今の内に部屋に侵入してきな。ああそそそ、これも持つていつて」

「H「これは?」

「デ「通信機のような物だよ。これで合図するから」

「H「わつかりました」

「デ（ゼレカ。覚悟しろ）

ゼレカの部屋

エ「ゼレカ～」

ゼ「どうした? エレス

エ「部屋入つてもいい?」

ゼ「いいよ」

「みよ」

ベットに腰掛けるエレス

エ「ゼレカも隣に座つて

ゼ「はいはい」

ゼ（やつぱり、エレスはおすのが好きだな。自分がおしに弱いのは
気づいてないみたいだけど）

デ「エレス～。もういいよ」

ゼ「あのバカ作者の声がしたきがしたナビ」

エ「…………覚悟して下せ。ゼレカちゃん」

ゼ「わあっと。こきなり押し倒すなって。……ゼレカ『やせやん』? まさか……」

エ「もつ返づいたんですか? ……遅いですナビ」

ゼ「なんかやたら身体が軽いし、胸も少し重いような……」

「（それが女体化です）

ゼ「シリアルだからすっかり忘れてたぜ」

H「それでは早速脱いでもらいましょう」

ゼ「ちよつ、まつ……！？」

H「むう～。ゼレカちゃんの胸、ソルより小さいけどそれでも私より大きい」

ゼ「いや、俺男だから胸があつても嬉しくないし」

H「…………かぶつ」

ゼ「！－HつHレス。まつ、だつ…ダメだつ……。」

H「ジユル、…………ぬふ、はつ…………ジユル」

ゼ「なんかつ…………、いつもとはつ…………、違う…………感じ」

H「ジユル、…………ゼレカちゃん…………可愛い声です、」

ゼ「本当につ、…………Hレスは…………おすごのが…………好きだな」

H「そろそろ…………限界ですつ……！」

ゼ「！－まつ、Hレス！－」

18歳未満閲覧禁止中

デ「エレスさんが限界をむかえられた為、ゼレカの無事を祈りつつ
祈らないように終わります。後日談は次回の後書きに載せますの
で」

余話の外（前書き）

今回はエレス視点で書いてみました。

前話の現実でお困っていることですので、お間違いなく。

会話の外

私は今ゼレカの部屋にむかっていた。

昨日、ゼレカに血をのませてもらつてからの記憶が無いのはなんとか分からぬいけど。

——それに、その時のことを思いだすとすると恥ずかしいなる。

そんなことを考えてる内にゼレカの部屋についた。

ノンノン

いやおひそかクをしてみる

「…………返事が無い。ただの魔神のよつだ」

……自分でもわけがわからぬいことを言つた。

いわなきやこけない気がしたから。

扉を開ける。

ギイツ

ゼレカはベットの上にいた

「ゼレカ。もう朝だよ」

私はゼレカの上で足とか腕を踏まないよつじ、ひやもすいた。

.....上からゼレカの顔をまじまじと見つめている。漆黒のような髪が首の付け根までのびて、今はみえないけど緑と黒の瞳が妖しく魅える。

「……………」

改めてみると顔が赤くなりそう。

今へんな声でちやつた。…

そつそつだ！

「ゼーレー力！早く起きてよ！」

自分が何をしにきたのか思い出した。

「お~い? ゼレカ?」

何をしても起きない！

「……………そつか。何をしても起きないなら……………」

私は、ゼレカの口に私の口を重ねた。

「はん……ジユル……つん、」

「… グチュ ふつ

「グチュ　ふつ」

.....

キス！？わっ私が！？えつ、えーと！？

「きつキュルーン／／／」

そこで私の意識が途切れた

会話の外（後書き）

エ「何いってるの?ゼレカ。昨日はあんなに『自主規制』したのに」
ゼ「ああ。お前がいるから『後書き』つてのは分かるが」「…あれ?俺なにしてたんだっけ」「…ああ。俺なにしてたんだっけ」
デ「…ああ。思い出したよつだな」「…ああ。思い出した。とりあえず刺されとく…」「…ああ。思い出したよつだな」「…ああ。思い出した。とりあえず刺されとく…」
ゼ「ああつ?身体は元に戻つて…」「…ああつ?身体は元に戻つて…」
デ「その格好でそれをこいつ?」「…ああつ?身体は元に戻つて…」
デ「戻つてるな。身体は」「…ああつ?身体は元に戻つて…」
ゼ「!?!なんで何も着てない!?!」「…ああつ?身体は元に戻つて…」
デ「思い出してないのか」「…ああつ?身体は元に戻つて…」
エ「はあ~む。あれ?おはよつゼレカ。それとティンさんも」「…ああつ?身体は元に戻つて…」
ゼ「!?!ちよつ、Hレス!?!なんで何も着てないんだ!?!」「…ああつ?身体は元に戻つて…」

ゼ「いやつ、それはともかく…」

エ「朝から『18歳未満禁止』するの?私は準備してるけど」

ゼ「はあ…?何言って…」

エ「(キラーン) それでは…」

ひとつ

エ「…………柔らかくない」

ゼ「もつ戾つてるよ」

エ「…………え?…………それじゃあ…………／＼／＼／＼／＼／＼」

ゼ「どうした?エレス?」

エ「…………一人とも、出てて…………」

ゼ「ちよつ、何が…」

エ「こいから出てて…」

部屋の外

ゼ「イテツ!いきなり魔王の力で放り出されなくとも」

デ「俺途中から空氣だった」

ゼ「確かに。にしても、突然なんだ?」
「ともかく、俺は昨日散々果てさせたろ」

デ「うわー。こいついきなりなんてことを。マジでうわー」

ゼ「うるせえ」

デ「エレスはおすのが好きだから、おそれるのは嫌いなんだぞ」

ゼ「つまり、昨日は俺が『女』だつたから大丈夫だったのか？」

デ「当たり前だろ。男女と女子同士は違うんだぜ。……俺もお前も覚悟したほうがいいかもな」

ゼ「あつ？なんでだ」

デ「そんな気がするだけ。それよりも、次回またお会いしましょー」

ゼ「いきなりしめやがった。まあいいか。感想・誤字脱字・不満・リクエスト等がございましたら遠慮なく書いてやって下さい。それではっ」

部屋の中

エ「もうひ。ゼレカのつ、バカ」

会話の後の後（前書き）

毎日更新してますけど、なかなか話が進まない今日この頃です。

前話の後のゼレカ視点です

会話の後の後

「…………ん？」

マムートと念つて、目が覚めたみたいだ。

それにしても、やたら右腕に違和感を感じる。

右腕に目をやる。

「すう…………すう…………」

エレスがいた…………いた！？おっ落ち着け、〇——T——T——K——E俺。
あああ、やつぱり錯乱してる…………混乱？そんなことはない……！

気を落ち着ける。

「ふう」

…………やつと冷静になつた

あれこれ考へても始まらないから、エレスが起きるまで待とつ。

「…………」

エレスは俺の右腕を枕にして寝てる。

気持ち良さそう顔をしてる。

「…………」

どれくらい経つたか分からぬ。それだけ、眺めているんだが。

「……」

このまま眺めてたら……理性が破壊されそう。

よし。後十分で起きなければ……

「ん……うたづね？」

馬鹿な」と叫んでる間に起きた。

「おはよう。Hレス

「あ、おはよー」

「Hレス、君はびつして俺の部屋で寝てたんだ?」

「え? それは……
(ぱつ／＼)

「何故に顔が赤くなる?
「なつ……なんでもない!」「
「そつ、そつなんだ!」
「やうなの。あつ……それより、ソルがよんできたよ
「ソルが?……ああ。だいたいわかった。それじゃ、行いつか

「うん。」

「……」

「……？」

「……」

「ねえゼレカ、行かないの？」

「行くよ。……着替えてからね」

「じゃあ早く着替えなよ」

「…………わかつて言つてる?」

「何を?」

「着替えられないだろ、君がいたら」

「昨日、一緒にお風呂入ったのに?」

「……//それとこれとは別だろ」

「大丈夫だよ~（黒笑）」

「…………わかつた…………つていうと思つたか!—」

「—」

そういうて、エレスを部屋の外にだした。

「ちよ、ゼレカ!~? なんで!~?」

「なんでもなにも、君の前で着替えたら後ろから襲つだろー。」

「もういいでしょー。」

「ほひ、みるーすぐ着替えるから、そこで待つておー。」

「むー」

部屋の中

俺はエレスに聞こえなこよつけた。

「…………はあー。全く、無防備なんだから。俺以外にはこんなことすんなー」

会話の後の後（後書き）

デ「人は何かを捨てなくちゃ、生きられないの？」

ゼ「……なんだ、突然？」

デ「いやー、今田黙つたゲームを遊んでたらメモリーがいっぱいだつたから」

ゼ「そりや、画像やアーティオやらアップデーターとデータがあんだけありや、容量もいっぱいだろ」

デ「いつの世も、用意周到な奴が生き残るのさ」

ゼ「つまり新しいメモリーを買ってあったと」

デ「全部あてんなよーーもれなく全問正解だー」

ゼ「なんとなく分かるんだから、しおりがないだろ？」

デ「いいけど」

ゼ「だいたいなんだ？その如きへみたいなのは」

デ「即興で思いついた」

ゼ「……やうですか」

デ「そんなことより、今日下校中に雨が降つてて考えついたことが

ある

ゼ「なんだ?」

テ「マシヤツ着て雨に濡れると、すりつけて透ける」

ゼ「それが?」

テ「『後書き』か『本編』でお前とHレスにやられましたと考ふた!」

ゼ「何言つてやがるー?」

テ「あつ、Hレスと『ゼレカちゃん』でもいこよ」

ゼ「……止まれないなら、壊せばいい。それが壊れた玩具の処理方法だ」

テ「言つてわからなきゃ力づくで、つてことか」

ゼ「やつこつだ」

テ「じゃ近ご内ひじかでやろつかなー」

ゼ「壊れりつー!」

仕事報告（前書き）

たまには、パソコンで書いてみよつかと細つ今口の頃です。

仕事報告

今、玉座の間にきている。

俺が着替えるから部屋の外にだしていたエレスが魔王の力で部屋をぶち破つたり、「着替えが終わつた」と言つたら「じゃあまた脱いで」とか言われたりしたが、まあなんとか玉座の間に着いた。

……つぐづくエレスはおすのが好きだつて思った。

つと、そんなことより

「やつと来てくれましたか、ゼレカ」

「ああ悪い悪い。いろいろとあつたからな」

「それより…」

「昨日の報告だろ?」

「…話が早く助かります。では、昨日葬つたのは?」

「セイントペガサス 一匹

下界に毒された魔物 三千匹

勇者と思わしき人間 三人

……かな」

「ペガサスの方は昨夜の内に毒しましたし、人間は消滅を確認しましたが…」

「魔物は全て『浄化』した」

「そうですか……。わかりました」

「ああ、後、人間から採取した『血液』を一瓶」

「…………。それで、どうするので？」

「……ふつ！ハハハハハハつ！ソフ、ソル！今の瞳の動き方！ハハハつ！」

「／＼／＼ほん。ゼレカ、笑いすぎですよ」

「ハハハつ、わつ、わるい。……『』ほつ……。ふう、落ち着いた。
ああ。好きにしていいよ」

「そうですか。では、私が飲ませて頂きましょう」

「じゃあ報告はこのぐらいで大丈夫か？」

「大丈夫ですよ……」

「ん？今の中が気になるけど、

「なら……つほつと」

そういうて、異空間から瓶を取り出した。

「仕事。今日無かったよな？」

「では……」

「ありませんよ」

「なら、久々にエレス連れて城下街にでも行くかな」

「それでは、エレスに『何かあつたら、直ぐに私をよんでもね』とお伝え下さい」

……相変わらずエレスに対しては言葉遣いが違うな

「伝えとくさ」

「……それと。ゼレカもお気をつけて……」

「……ああ」

今、一瞬ソルの表情が変わった気がした。

そして玉座の間を後にした

玉座の間

「……たまには貴方の血を飲ませてくれてもいいじゃない

仕事報告（後書き）

ゼ「海に行きたい」

デ「…………どうした？突然」

ゼ「なんか無性に海に行きたいんだ」

デ「失恋？」

ゼ「今日もエレスといろいろじてた」

デ「嫉妬？」

ゼ「ソルには微笑まれた」

デ「ストレス？」

ゼ「髪質も変わつてない」

デ「んー……。何だろ？」

ゼ「……山の頂上でもいいかも」

デ「山ー？」

ゼ「何だろ」

デ「あー、なんとなく分かる気がする」

ゼ「分かつたか？」

「…………熱い！」

「…………あー…………」

「…………今日はいつもの調子がでないな」

「…………そうだな」

「…………それにも…………」

『…………熱いー』

下界も魔界も似た様な場所（前書き）

今朝起きたら、肩甲骨が悲鳴をあげていました。

昨日の運動が原因みたいですね。

体、鍛えようかな。

下界も魔界も似た様な場所

「エレス。今日ってなにもなかつたつけ？」

「んーと……なにもない筈だよ」

「なら、久しぶりに城下街でも行かないか？」

「それはつまり、『データ』ってこと…？」

「……そりは言つてないけど

「まあ、街の中を一緒に歩いたり、買い物をしたりするわけだからそういうこう言い方もしなくはないな」

「……ホントに…！…だったら今から着替えてくる…」

「じゃあ、用意が終わったら門のところで」

「うん…」

エレスは皿を輝かせながら走つて行つた。

俺も、着替えてこようかな

……ん？今の格好？紫の長袖に黒と赤のロング『データ』、黒を基調とした赤と青が入り混じつたボトムに黒の靴。

全身暗い色のファッショントリードを考えても『データ』には不釣り合いだ。

魔界でも暗い色が好きつて奴は思つた程いないらしいからな。

「とりあえず、部屋に行くか」

俺の部屋

クローゼットから適当に服をだしている。

……なかなかデータって感じの服が見当たらない。

今着ているのは如何にも魔王とかの服だからな。俺は魔神だけど……

とはいって、別に城下街に知らない奴が沢山いるってわけでもない。

いつも狩りが終わって帰る時に会うからな。

「おつ……あつたあつた」

なんて考えてたら下界にいた時に……つまり、俺がまだ死ぬ前にいた場所（人間界）で着ていた服があった。

赤いチェックの上着に黒い長ズボン、銀色のスニーカー、それと鎖の腕輪。

「これならいつもよりは、ましだろ」

上着の下はいつも長袖を着て、準備完了。

「さつあと門で待ってるか」

俺はそう言い、門へ向かった。

終焉の門

「……エレス、どんな服で来るかな……」

いつものエレスの服は赤と青のローブを白いキャミソールの上に着て、下は少し長めの青いミニスカート。『ローブを着ていても、スカートまで長くないローブなのは、かわいいから』だそうだ。

「……それにしても遅いな……」

…………この後俺は少しだけ、意識を闇に沈めた。

下界も魔界も似た様な場所（後書き）

「眠いです」

「起きなりだな、おー」

「最近ゼレカをいじくる気力も無いんだよな」

「それは俺ことっては良いことだ」

「明日は眠くてもゼレカをいじくつまわすので、今日はこじくる
のせやめときまーす」

「なに宣言してんだ！」

「ではこの辺りで、お休みなさい」

「おー、トイン」

「……」

「マジド寝てやがる」

城下街でのワーク（前書き）

今回はじめてよつと長めです
いろいろと疲れました。

城下街でのテート

二時間後

「…………

意識を闇から引き上げた。
寝てる間に来たかと思ったが、気配も物音も立てず来るはずが無い
からまだ悩んでいると思つ。

「…………もう少し待って来なれば、様子見に行こう」

再び意識を沈めた。

更に一時間後

「…………寝てるのか？」

流石に心配になつたから様子を見に

「おまたせ～」

「やつと來たか。

「待つた？」

『凄い待つた』

と言ひたいところだが、

「いや。俺も今来たとこ」
「……」のセリフは最早デフォルトだ。

「一」

改めて見ると……／＼／＼ヤバイ。今のレスの格好、凄くカワイイ。
ピンクのパーカーに赤いチェックのミニスカート。そしていつもは
ただ垂らしているだけの髪を右に結んでいる。

「／＼／＼

「どうしたの？あっ、もしかしていつもと同じぜんぜん違うから見とれ
てるの？」

「……否定はしない／＼／＼

「いやひゅ 早く行け！」

「ああ」

自分がどれだけ待ったかなんて、忘れた。

城下街

「久しぶりだな」

「うん！」

なんて言つたけど、俺は昨日来たばっかだ。

「何処に行く?」

「んーと……まよひな~」

「だったら、ギルドにでも顔出す?」

「ギルドになら一昨日こつたばかりだよ」

「…………ん?」

「あつー…………なんでもない…………」

「…………なら、服でも見に行へ~.」

「うんー…じゃあねーから」

『服屋』地獄の衣

「こらつしゃつー!~エレスナーヴをどゼレカをござないですか

「…」

「おう。久しづり、//ワル

「じょひくふじ

「なんだー!前もって連絡してくれればよかったです

「いや、今日たまたま仕事が無かつたから城下街に行ひつて事になつたから

「いわゆる『テート』ってわけ

「『テートですか。それで城下をぶらついているんですね』

「ハナルは、彼をつべらなーの?」

……おこおこ。

「こやあ、私にほんとそんな人できませんよ

そう言ひたるわざはよくは思はれぬじやないか。

「あー…それで用事のほうは?」

「新しい服でも見ようかと思つてな

「ゼレカさんのですか?」

「いや、Hレスの」

「わうですか。では、いかがの棚です

「エレス、どんな服が良い?」

「ローブかキャリ」

またピンポイントな注文で……。

「ローブだったらこのショットと短めので、キャリールだったらリボンが着いてるのかな」

「ん~……ロープは色がそんなにすきじゃない。あつでも、キャラ//

は色も好き」

「じゃあキャラミンールだけ買つか

「アリスの

城下街

「次はどうする?..」

「おやこのアセサリーが欲しいから装飾店に行きたい

「装飾屋か……。だつたら」

装飾屋『魅惑の小物』カラソ

店のベルが店内に響いた。

「どうもー『魅惑の……』ってエレスナーグとゼレカじやねえか

「おう、アレク」

「ここにまちせ

……アレクもミリルも基本エレスに『様』を付けて呼ばない。

理由はエレスが『様』付けて呼ばれたくないからだ。

魔王としての器が高いから、ってわけではないと本人は言つてゐるが、十分だと思つ。

「ほお、お一人さん。もしかして『テートかい』

「うん…『テートの真つ最中』

「それはそれは。好きなだけ見ていいてくれよ」

「揃いのアクセサリーか。どんなのがいいかな……」

「やつぱりおそろいの物は恋人同士は持たなきやね」

「／＼／＼恋人つて……」

「あつーーーーのイヤリング。ゼレカににあつとゆつよ」

それは『羽』がモチーフの縁のイヤリングだった。

「ん?……ああ、良いんじやないか。だったら、同じ『ザイインのペンダント』がいいと思つた」

そうこうして同じく『羽』がモチーフの縁のペンダントを差し出した。

「わあ～！…すてきーーーー、これにするーーーー！」

「決まつたみたいだな」

「ああ、イヤリングとペンダントある

「分かつた。包装するか？」

「いや」のまま着けるから「いや」

城下街

「このイヤリングは耳に穴をあけなくとも大丈夫らしい
「ふつふつ。にあつ?」

「似合つば」

「／＼／＼ありがとう。ゼレカもすてきだよ」

「これはどうも。……さて、このあとはスイーツ店にでも行くのが普通だけど……」

「どうしたの?」

「……人気の無い所に行こう」

「?いいけど」

路地裏

「何しに来たかわかる?」
「わかんないよ~」

そういうて、俺はエレスの口に自分の口を重ねた。

1
!
?

ふつ んつ クチュ ジュル

「んつ
ふああ~」

口を重ねる前に唇を少し切つておいたから、程良く血が出てる。

「クチュ...んつ...はつ」

ん? もう出なしみたしたな

「……………これがなり」

「君にとっては俺の血は最高のスイーツだろ」

「…………」一瞬黙つてくれねばこの辺

「サプライズがあつたほうが面白いからな。つと……もうこんな時
間か。じゃあそろそろ帰るか」

「……………／＼／＼ありがとう」

エレスが小さい声で何かを言つたが、聞こえなかつた
「ん？」

「なんでもない。また来ようね」

「ああ、また暇な時にでも来よつな」

そして俺達は城下街を後に、城の帰路についた。

城下街でのトーク（後書き）

「デ「どうもー」

「ゼ「復活したのか……」

「デ「復活もなにも、あんなことがあつて寝てられるかー」

「ゼ「何があつた」

「デ「P V 8000

「ユニークP V 2000 突破!!

「これが寝てられるかー」

「ゼ「そうか。それは嬉しいことだな。今まで読んで下さった皆様、本当にありがとうございました。これからも何とぞよろしくお願ひします」

「デ「それを記念して次回は特別企画をやります」と思っています」

「ゼ「特別企画?」

「デ「はい。なので次回は本編をやめて外伝になります」

「ゼ「……嫌な予感しかしないが……」

「デ「というわけで次回、お楽しみに」

外伝と「いかか企画』『黙恋語』（前書き）

「デ」今日はおひるになつました

「ゼ」收拾がつかなかつたじやねえか！」

「デ」ほのぼのあまあまうござしてます

外伝とこひか企画『黙示録』

「いやー、外伝ですね」力さん

「おじてめえ、何出できてんんだよ

「ちひちひ。今は本編が後書きの様なもんだから、俺が出でても大丈夫なのだ」

「はあーあ、でだーライン。記念つて何をするんだ?」

「……すこません。何も考えていません」

「おこ……」

「仕方ない」ので一服してお開きとこひ」と。ゼレカは何がいい?

「……レモネードで

「ひひひ。それじゃあひひ

「ふん

「ク、」

「ヤ（黒笑）

「ん? 何だー?」

ポン

「……大成功！」

「『ホッ』『ホッ』、おじ『ティ……』? なんでそんなに身長が高くなつてやがる!」

「あはははー、俺が高くなつたんじゃなくてお前が小さくなつたんだよー！」

「ああ? 俺が小さくなつた? ……マジだ

「それでは改めまして『記念』に『ゼレカを幼児化してみよ!』を始めました

「」の野郎さつきまくねえつて言つてただろー。」

「そーんな、俺が忘れてたとゆつた?」

「ちつ

「でもこの提案はある人が『ゼレカが私より頭ひとつ分くらい大きいかから、逆転したい』って言つたから決めたんだけど

「……誰かはすぐ分かった

「それじゃあ覚悟を決めたってことですね

「待つ、だれがそん

「じゃあHレスさん、後ほどいつ

「お疲れさまです、ティインわ〜」

「Hレス...こつの聞こ」

「はじめから居たけど?」

「俺の後ろに隠れてた」

「……全く気付かなかつた」

「ゼーレカ」

やつこつてHレスは俺に飛び付いた。

……後ろに『何故か』ベッドがあつた。

なのでそのままHレスに押し倒される形で、ベッドに倒れた。

「ー……おこおこ、いきなりだな」

「えへへ、だつてゼレカが『なんに小さいなんて、なんか『弄りが
い』があつそうだから……』

「……は?」

「こつも私が弄りつとすると逆に弄られるから、こつか逆転さたい
とおもつて」

「え?あの、Hレスわ〜…」

「ああ~、今のゼレカに『Hレスわ〜』なんてよばれたら弄らない
わけには…」

しまつたー逆効果か！

「まあとつあえず、弄るつかー。」

「いや、それなら元の身体に戻つてから幾らでもできぬー。」

「元に戻つたら私より大きくなるだしょ？」

「わからんー。」

「だから今じゃなきやだめなの」

(くっ、じくなつたら『力を解放』して…)

(あつちなみにゼレカ、俺まだこの部屋に居のから)
(「ティンーお前まだ居たのかー。」)

(当たり前だろ。もしお前が逃げ出せりとしたひの身体のまま女
体化させるからな)

(それなんて拷問ーーー。)

(せら覚悟決める、ハヅキ。)

(なんで名字でよんだ？) (文字だけだからわかんないだろ)

(そんな理由がよー。)

「わあーゼレカ。つと、まちがえた。ハヅキ、おとなしくしてね

「今は子供だ」

ガシツ

「……なつー?」

「今のあなたは力も子供並だから、いつやって力づくで押さえ付け
ることもできるんだよ」

今の状況

幼児化して、エレスにベッドの上で片手首を押さえ付けられてる

…………うん、これが逆だったら俺は凄く嬉しい。

「んつ」

いきなりキスされた。

確かにここまで強引じゃないが、俺もしている。

「ふはっ」

「もう息があがってるよ、ハヅキ。肺まで小さくなってるから?」

「手だつて足だつてこんなに小さこ」

「多分な……」

「こつもよつ一回つも小さえからだる」

「つまり、いつもと逆って」と

「力で押し負ける程差があつたとは……驚きだ……つー?」

「ふふふ、ホントだ。こんなとこまで小さい」

「じゃ触つてー?」

「じゃあ、背中」

「……いややっぱなくつて、いきなり服の中に手入れるから…」

「いつもみてたあなたの大きな背中」

「大きいといつても、俺と同じ身長の奴の中では俺は肩幅が狭いぞ」

「やっぱじゃなくつて、私を守ってくれる時あなたはそれだけカッコいいひとこと」

「こつもわつこつ」と言つ時は赤くなつてゐるのにな
「だつて今は私が弄つてるから」

「……くっ、忘れてると思つてのに覚えてたか」

「ふふふ、じゃまで小さくなつたかたしかめてあげる」

「こついやあ、そんなこと確かめなくて、つてまたまた

「大丈夫。怖がらなくともいいよ」

「その割には目が狂つた感じだけだ」

「ふふふ」

その後俺とエレスは時間を忘れて（忘れてかられて）《自主規制》をやって（やらされて）いた……

「俺？ずっと居たけど空氣だった」

外伝と「つかか企画』『記念誌』（後書き）

「…」「…」

「…」「…」

「…」「…」

「…」「…」

「…」「…」

「…」「…」

「…」「…」

「…」「…」

「…」「…」

「…」「…」

「…」「…」

「…」「…」

「…」「…」

零「貴様……」

エ「零花。そんなかつこひで暴れるとさうに服が透けるよ」

零「……漢字表記なのは女体化したからですね、わかります」

「わしが風呂に入つてこ。もあらんレスと一緒に」

零「まで、話合おう」

エ「早く行こいつ、零花ちゃん」

零「まつ……」

デ「がんばってねー」

休憩後の仕事（前書き）

今日某雑誌を買つたら、とても僕好みの漫画が一つあったので、「たまには買ってみるもんだなー」と思いました。

休息後の仕事

城に帰つて来た俺達は玉座の間にいる。

「おかえりーエレス！怪我しなかつた？」

「ただいまソル」

……おかしいな。俺はここまで信頼されて無いのか？

「うん！」

考えてる内に会話が凄いとこですねすんだな。

「あつそうだ、ゼレカ。机の上の報告書よんでおいてね~」

……今のエレスみたいな口調は疑いたくなるかもしれないが、間違
いなくソルである。

エレスと話してゐる時に誰かと話すと、そのままの口調で話すからな。

卷之二

「じゃ、行きましょ。」

一人はこの城にもともとあつた風呂ではなく、俺が創つた露天風呂に行つた。

「……確認しどくか」

そつこつて、机の報告書に印をやる。

「なになに……『ナブラート村の影』か……」

概要はこいつだ……ナブラート村で、度々おきる事件の元凶を退治してほしい。

ナブラート村は『』、『二ブル城』から徒歩で三日、飛んで一日の場所だ。

「……『テレポート』で行くか」

テレポートは闇と光と土と時が混ざった魔法だ。普通に習得しようとすればただの悪魔が三十年間修業して覚える魔法だ。

「さてと……場所を固定して」

そして俺は跳んだ。

ナブラート村

「よつと

ナブラート村に着いたが、別に変わったところはない。

「おい。誰かいないか

「……どなたですかな?」

「俺は城からの使い魔だ」

……一応身分は隠しておく

前にゼレカと名乗つて切り掛けられたから、その用心といつわけだ。

「おお、よく来て下わざました。失礼ですが、あなたの所属は？」

「衛生部隊第一所属アルト・シャートです」

……全て嘘

「衛生部隊の方でしたか。それならよかつた……」

「怪我人ですか？」

「いえ……それなら『喰らいやすい』からなー…」

「……『魔喰』か」

「なにー…」

「そりが……ナプライアの陰つてのはお前達か

「くつ…何者だ！」

「ただのしがない『衛生兵』だよ

「くそあー！」

「『秘剣・十刃の舞』」
クロスブレード

……さてと、まだ生き残りがいか調べるか。

まだ気付かれてないみたいだし。

「おい、城からの使いで来た者だが……」

「グアー！」

「ギヒー！」

そうこうと五匹の魔喰が出てきた。

「……面倒だな」

武器を『創造』してまつてこる。

「『電撃の槍』エレクトロニック」

向かつてきた奴に槍を向けている。
ただそれだけでいい。

「ギヒー」

向けるだけで槍が勝手に放電してくれる。

俺は黒焦げの『何か』に槍をむけて、

「お前達、こうなりたくないなれば目的を言え」

「ぐをおーー」

……ひつやう言葉が通じないみたいだ。

「『無双乱舞』派手に消し飛べ」

田の前の奴らを消し飛ばした。

.....

「いない……だれも……」

わざと大声で言った。

「てあーーー。」

誰かが斬りかかってきた。

「覚悟しろ、魔喰！」

「生き残りか？」

「そうだ。だつたらなんだ？」

「背後注意」

「え？」

俺はそいつの後ろを指す。

「ぐをおー。」

「しまつ……」

「『雷の舞』^{ライアーリング}」

「ギヒヒ」

「うん。 反応速度、 気配察知、 筋も悪くない」

「あんたは……」

「俺はゼレカ。 城の使いだ」

「城の奴か……ならよかつた」

「お前の他に生存者は？」

「……おれの知り合いが……一人」

「そいつだけか？」

「ああ」「だつたらそいつ連れてこの村から出ぬぞ」

「……助けられるよな？」

「どうした、突然」

「いや……なんでもない。 場所は愚者の祭壇だ」

「ああ、あの地下の」

愚者の祭壇

「……シユイド?」

「マコーナー!」

「よかつた……無事だつたんだ……そつちの人は？」

「ただの城の使いだ。……それより、何があつたか教えてくれないか？」

「？」

「そうだったな。俺はシェイイド、いっちはマリーナ

「……よろしく

「どうも」

「それで……村の奴が突然魔喰になつちまつたんだ。俺はマリーナを連れて逃げようとしたんだが、何分あいつらの数の多さと強さがな……、それでこの祭壇に隠れたりてことだ」

「……ちがう……よ。突然じゃ……なくて、少しづつ……入れ……代わつてた」

「無理に喋るな」

「……」めん

「……マリーナ、少し手をかしてくれないか？」

「……はい」

「……」

やつぱり、徐々に魔力が吸われてつてる。

「のままじゃまづいな……」

「……」

「おこ、ザレカ！何してんだ」

「早くこいつから出ぬや。そのままだつたらこの娘は死ぬ

「……なにいって…」

「祭壇に魔力を吸われてつてゐる。ここに長くいたから、もつ魔力が枯れ切てる」

「そつ……そんna！」

「落ち着け。まだ間に合ひ

「……何か…来る」

「…」

「ああ、漸く出やがつた。ショイド、マリーナ連れてこいつから逃げ

ろ

「分かつた。あんたは？」

「俺はこいつ倒したら行く……と言つたが、この大きさは……」

「ゴーパ、ゴーパ、ゴーパ

「なんだ！？地震？」

「ショイドー・マリーナ連れて俺に捕まれ！」

「分かった

『『トレポーター』』

ナップルート村上空

「見てみる」

「…あれは…」

「あの村全でが魔喰だつたんだ」

「やうだつたのか

「……」

「……」

「ショイド。降りたら少し遠くまで逃げる

ショイドを地上に降りした

「下から見るとさうでけえな……」

「ぐもももー…

「勝てつかな?」

俺は嬉々として武器を創造した。

休息後の仕事（後書き）

「（読書中）」

「静かだと思つたら雑誌読んでたのか」

「もう三回四回だから」

「はーよ。もういたのひきあじやねえか」

「……久しぶりに読んだら新しいのが増えてた」

「お前は単行本派だからな。たまにしか本誌買つてないから、新しい漫画だつて増えてるだろ」

「その新しい漫画で一いつ程俺好みのがあつた。……早く単行本発売されないかなー」

「さつままで『今日の後書きは補足でもしようかな』って言つてたくせに」

「あつねいだ。やうこえば今回つかつた技の紹介しなこと

「（読書中）」

「馬鹿が逃避して読書してゐみたいだから、また次回会おつ

「言い忘れたけど、本編と後書きを少し変えましたので」

常闇の炎（前書き）

多分、次の話までナブラー・ト村編をやります。

戦闘シーン、楽しいけど難しいです。

常闇の炎

改めて見るとでかいなー

あの村は直径一百メートルぐらいで、今俺の前にいる魔喰が口を開けた状態でスタンバつてたみたいだからとんでもなく大きい。

緑の皮膚、紫色のぼつぼつ、短い足で四足歩行。おまけに目がカメレオンみたい。……総合すると口が裂けている巨大カメレオンだな。

「ふつ！」

おもわず吹き出した。

H H H H H

「なせある」

剣に炎の魔力を注ぎ込む バーニングインパクト

「一撃の焰」

その剣を田玉に向かって投げつける。

ブショウ、ベチャベチャ

目玉までは届かなかつたけど、頸から左の目の人までえぐれ緑の液体が大量に流れでた。

「……キモチ悪い。一体どれくらいの奴らを喰つたら気が済むんだ？」

マリーナとシェイド以外の村の奴は喰つたみたいだから…

「あの二人。逃げられたかな？」

俺はゼレカに言われた通り逃げている。地震の後、村がカメレオンモドキの化け物になつたが、こつちに気付いた様子はない。

「…………シード…………あの人は…………」

「ゼレカはあいつを倒したら来るって」

「…………あの魔臉…………は…………弱点…………壊さないと倒せない」

「何だつてーなら早くゼレカに…」

そういうて振り向いたら、カメレオンモドキの触手が無数に迫つていた。

「斬つても斬つても死なないな」

カメレオンは右後足と左前足が無く、胴体は縁の皮膚が更に縁になり、顔は至る箇所に傷がある。

……やつたのは俺だけど

「ウラエ?ニア、グワラー!..」

「なんだ?」

紫のぼつぼつから触手が生えている。

それを後ろに……

「まさか!..」

マリーナとショイードか!

「させらかよ!テレポート!..」

一人の場所に跳んだ。

「ぐつ、ここまでか。ならマリーナだけでも、『静寂の壁』!..」

「…つうショイード無茶はつ!..」

「駄目ならお前だけでも!..」

「ショイード!..」

「……生きてる?」

「危ない危ない。まさか」つむを狙つとはな……毎つてたぜ

「ゼレカー・ジツヤッテ…」

「説明は後。今は『ライツ』…………ジツアラカ!」

剣に力を込めて触手をぶつた斬る。

「なかなか死んでくんないからなあ」

「……祭壇だ」

「何が?」

「そいつの弱点。そつきの祭壇だ」

「……成る程、やつぱりか。あそこが一番魔力の変動があったからな」

「気付いていたの?」

「マコーナー! ? 身体、大丈夫なのか?」

「えつ……うん。治つてるみたい」

「あー、さつき俺が魔力を流し込んだからな。でも俺の魔力……属性はあわせたけど、だからあんまり無茶はしないほうがいい」

「あっ、ありがとっ」

「なーに、お安い御用ですよ。それからショイド、わざわざの魔法で守つておけ」

「ああ……」

「敵がりじやない。俺から、な

「え？」

「テレポート」

ヒュン

タツ

「そーてど。祭壇だつたけな」

カメレオンの中の祭壇にテレポートした。

「んー、まとめて吹つ飛ばせばいいか。……ん？」

足を止めて『それ』を見る

「……祭壇の下……腕輪かな？」

銀色の腕輪が祭壇の下にあった。

「持つて帰つても大丈夫だろ。それに、俺の記憶違いでなければこれは……」

「ギンギンエエオオ！」

「つるさくなつたな。じゃ、片付けるか」

右掌に闇と炎の魔力を溜める。この技は俺のお気に入り技に入る程の威力だからな……。

自分の回りには光と水の壁を展開する。

「《全てを包む闇よ、炎の如く侵略し如何なる敵をも焼き尽くせ》、魔力解放32%。『常闇の炎』！！」

たまには詠唱もやつてみよつと思つて詠んでみた。

……実際、詠唱すると威力も増すしね

荒野

「あつ、おい」

「跳んじやたね」

「ああ。それよりも本当に大丈夫なのかマリーナ？」

「ええ。あの人に分けてもらつた魔力があるから、なんの不調も無くなつたわ」

「そうか、なら良かつた」

「キエエエエエオオ！」

「くつ、また触手が！」

そう思つて、壁に注いだ魔力を最大にした。

「あ？え？ わ、お？」

「なんだ？」

「なにかあつたのかな？」

カツ！ ！

次の瞬間、カメレオンモードキの体が爆発した。

祭壇

俺は『常闇の炎』を回りに散らした。

この真っ黒い炎は俺の意志を確認するまで増え、燃やしつづける。消えても消えてもすぐ増える、本当に『炎の様に侵略する闇』だ。

カツ！ ！

そして、こいつの体が爆発した。

「……やり過ぎたかな？」

あの一人まで吹っ飛んでなきゃいいけど。

「テレビポート」

シユツ

荒野

「けほつ、けほつ」

「ゴホッゴホッ」

カメレオンモドキの体が爆発したら、後には何も残っていなかつた。あの巨大な体が吹き飛んだことは一目瞭然だ。

それに、俺の『静寂の壁』まで無くなつてゐる。俺はまだこの魔法を解いていない筈だが、それすらも無い。

「……ここまでだとは

シユツ

そんなことを考えてたら、そいつが戻つて來た。

常闇の炎（後書き）

ゼ「なあHレス、何を真剣にやつてるんだ？」

H「料理」

ゼ「……何を作つてこらつしゃるので？」

H「こいつちは『地獄魚のムニエル』で、そっちのは『針山草と苦隨のソテー』。で、今作つてるのが『鬼土牛のステーキ』だよ

ゼ「…………名前がやばい」

H「え？ 魔界では結構有名な料理だけど？」

ゼ「まあやうだと思つよ。魔界だし」

H「でもゼレカが作つてくれる料理もおいしいよね」

ゼ「ん、確かに作ると皆食べててくれるな。下界の料理だけど、味覚は悪魔も人も変わらないみたいだな」

H「私もゼレカの料理すきだよ」

ゼ「それはどうもありがとう。……それよりも、さつきの『地獄魚のムニエル』が暴れ出してるぞ」

H「あれ？ おかしいな。作り方まちがえたかな？」

ゼ「作り方間違えて暴れるもんなのか」

部屋の外

「 とこつ具合にほのぼのしてましたーつで」

契約（前書き）

眠いです。

それに試験一週間前です。

……大変です。

契約

「やれやれ、おもわずはしゃぎすぎたな。まさかここいら辺一帯を焼
き廻^{アラシ}していたとはな」

『…………』

「ん? その何か言いたそうな目はなんだ」

「どんだけの魔力をつかつたんだよ! カメレオンモドキがいた場
所がえぐれてるじゃないか!」

「それは魔力を込めすぎたから。あの場所は『光の安息地^{ブレスタイプ}』を張つ
ておいたから、修復作用が発動して元通りだ。……ちなみに『光
の安息地』をつかつたから俺は無傷であり、こここの衝撃も和らいだ
ってわけ」

「……俺の『静寂の壁』は一点に集中すればたいていの魔法は搔き
消せる盾だぜ。それを和らいだ余波を防いだだけでも消えるなんて
……」

「あの、まだ貴方のお名前を聞いていなかつたのですが

「そうか、まだ名乗つてなかつたつけ。俺はゼレカ、衛生兵兼空撃
隊隊長『夢幻のゼレカ』だ」

「やはり……」

「何がやはりなんだ?」

「せ、昨日セイントペガサスを一人で倒した…」

「あー、あれがお前だったのか」

「まあな。それはそうと一いつ程確認しておきたいんだがいいか?」

「？」

「……ですむ」

「一つ田は帰る場所。ナブリート村に帰るなり修復するけど、村のやつりは全員いないだろ?」

「そのことでしたら、どの道一度『ブル城下街』に戻ると思います。魔喰が出たので、両親に伝えようと思つので」

「やうか。だったら、俺が帰る時に一緒に送つてこべから」

「ありがとうございます」

「こやここつて。一つ田はショイド。お前に兄弟つてこる?」

「ショイド……」

「…………構わないよ。ああ、こむか。でも俺は…」

「『召喚魔獣』だつていつんだろ?」

「…?」

「お前、それをどい?」

「最初に気付いたのは俺が『他に誰か生存者はいるか?』って聞いた時に、お前は悩んでいた。あれはマリーナを自分の何なのか考えていたから。一回目は、祭壇にいた時、普通の悪魔なら分かる魔力の変動が分からなかつたこと。魔獸なら自分の魔力の流れしか分からぬからな」

「……流石だぜ。それでさつきの質問の答えたが、弟がいる。あいつはまだ誰とも契約していない『白紙の召喚獣^{ハイブリースト}』だ。今は行方不明になつてゐるぞ」

「そうか。シエイド、お前の召喚色は銀色か?」

「みての通り銀色の髪、白い眼あまけに小柄と純正の銀色だよ」

「私が契約者になつたのも、私の属性が光と水だからよ」

「……やつぱりか」

「やつぱり?」

「ああ、祭壇に行つた時にマリーナから流れでてた魔力の一部がかしながら方向に流れてたからな」

「私の魔力が?」

「あの祭壇は悪魔の魔力を吸収するためにつくられた物、つまり『魔獸契約者』の力……君を封じるための物つてこと」

「話が見えねえな。それと俺の弟と何の関係が…」

「まだ分からぬ？簡単に言つと、あの祭壇は『魔獣契約者』を封じるための物なのにその魔力の一部がへんな方向に注がれりてこと」

「

「なんのため?」

「セレオでわしきカメレオンを仕留める時に見つけたこの銀色の腕輪

「! ? セレオ、それは! ?」

「私の指輪と、同じ! ?」

「多分、これはお前の弟だと思つ

「セレオか……。生きてたか……」

「! の腕輪はお前が持つていたら?」

「いや、ゼレカ。あんたが! こいつの主になつてくれ

「……いいのか?」

「あんたなら、! こいつを懸こよつにはしないだり?」

「……分かつた。じゃ、セレオと契約するか」

「……ありがと!」

シロイドガ言つた! とは氣にしないでおく。

「『我、汝の力を求む者なり。血に刻まれし盟約に従い、顯現せよ。

』

シコワシコワ

光を放ち、腕輪から何かが現れる。

「我が名は『アルフォート』。汝が……などと、今更だな。腕輪から先の顛末を観ていたので、大方の事情は掴めた」

「……フォート、もういなくなつたかと心配したぜ」「私もです、兄上。再び出会えた事を感謝します」

「……良かつた、良かつたねシェイドー」

「ああ、これで俺の役目はマコーナと一緒にいることだけだ

「我を呼び出し者よ。汝は我と契約するか?」

「当然だ」

「ならば名を

「…俺の名はゼレカ」

「あい分かった。我が主、ゼレカよ」

シュン

「腕輪に戻つたな」

「外で活動しない時は違う形になる。それが俺達だ」「なら、契約も終わつたし城下街に戻るか」

「シード、指輪に戻つて。また城下街に着いたら呼ぶから

「そりだつたな。今はゼレカの魔力だから魔力を使えないな」

「……うん」

「分かつた。……ゼレカ弟の事もマリーナの事もありがとな。感謝しても仕切れないぜ」

「俺は当然の事をしただけだ。それに今生の別れってわけでもないだろ?」

「……ああーじゃあな」

シュン

シェイドが消えた。

「じゃ、掴まつてね

「はい」

「テレビポート」

城下街に跳んだ。

契約（後書き）

デ「いろいろとあれでしたね、前回は」

ゼ「そういえばお前、前回いなかつたな」

デ「最後ちらつと出てたけど」

ゼ「そうだったか？」

デ「そんなことより！次回はゼレカが修羅場を経験します。あつ、
本編でね」

ゼ「せりひつと犯行予告流すな」

デ「ゼレカとエレスさんの出会いを今日考えていたんですが、それ
は絶好のタイミングで書きたいと思います！－」

ゼ「あー、あれね。うんうん」

デ「後は補足で『人物＆技＆場所紹介』も後書き風にやらなーことな
あ」

ゼ「どのタイミングで」

デ「考へ中です」

ゼ「ふう。明日は修羅場、か」

仕事の後の騒動・前編（前書き）

ヒヤツホ——

……すいません、何かテンション高いです。

仕事の後の騒動・前編

「じゃあな。たまには城に……って、ガードが堅いな。こっちから行くかもしねー」

「はいー・ショイドと一人で楽しみに待つてます」

城下街に着いたので、マリーナと別れて城に戻る。

マリーナの両親は一日前に違う街へ行ったから、連絡だけしてこの街へ残るらしい。

「あーーーと、レスにばれない内に帰るか

俺が城を飛び出してから、まだ一時間も経っていない
だからばれずに済むだろ。

二 ブル城・自室

『『報告書』ナブラート村の陰』は多数の魔喰とダミ魔喰カメレオンによる事件であった。生存者は一名。全ての魔喰とダミ魔喰を浄化した後、生存者を城下街に避難させた』つと、こんなもんかな

生存者をマリーナだけにしたのは、彼女の力を公にしない為。

ばれるとイロイロ面倒なことがあるからだ。

「ソルに渡してくれるか

つて、俺独り言多いなあ

玉座の間

「ソル、報告書を……ってあれ？ 居ない」

だったらエレスの部屋か？

エレスの部屋

コンコン

「エレス、居る？」

静かだ

「……まさか……」

露天風呂

「……まさか……な

ドアに手を掛けた

ガチヤ

スゲー静かだけど、服とかあるしなあ

「ン」

「二人とも居る？」

冷静に声をかけた様に見えるが、内心ドキドキもんだぜ。これが俺でなければハツ裂きクラスの罰だ

「……………エレス？ソル？」

おかしい。話声どころか、水の動く音すらしない。

「……………」

意を決して扉をひく

カラカラ

バタン

「……………予想通り」

扉を開けて瞬時に中の様子をみたが、俺が予想した半分が当たつていた。

二人が俺だと気付き震にはめられるパターン。

もう一つが……現実に起きてるパターン。

何があつたつて？……一人とものぼせてる。

何はともあれ一人を介抱しなきやな。

「クレ……」

クレアを予防としたが、止めた。

クレアは一度妄想にふけると止まらない癖がある。

……こんな状況で真面目だけど妄想癖が強い女使い魔呼んでみ？
リアルゲームオーバーになるさ。

「まいったな。この場所だと一番近くに居るのはクレアだしな……」

「…………よしぃ」

覚悟を決めて手ぬぐいを創つた。

例によつて例の如く田隠し用な。

カラカラ

魔力で探知して一人ずつ脱衣所に抱き抱えて連れてくる。

……抱き抱えてる途中、みょーに柔らかい何かに触れた気がする。

……スゲー罪悪感。一応主の為を思つてるんだけど

カラカラ

二人を脱衣所に抱き抱えてきた。

「後は……」

俺のお気に入り魔法の一つである『リメンチック瞬間装着』を発動する。

『瞬間装着』は服や鎧なんかを一瞬で着る魔法。

カシックカシック

「ふう……」

二人に服を着せたので、目隠しをとる。

運よく服を置んで置いてあつたから助かつた。

……そりゃなかつたら、服を『想像創造』で創らなきゃいけなかつたぜ。

「……俺の部屋よりも、一人の部屋の法が良いよな」

何かつて？運ぶ場所。

「よつと」

まず、ソルを背負つてからエレスを前に抱える（俗に言つてお姫様抱つっこ）。

テレポートを使わない理由？……魔力の減少。幾ら魔力が枯渇しないとも、あんだけ魔法使いや疲れるわな。

実際、テレポートは魔力を結構浪費するから。

……重さをほとんど感じない。エレスは普段から抱えたりしてるので知っているけど、ソルもほとんど重さを感じないなんて驚きだ。

そんなことを考へてゐる内に部屋に着いた。

ギイ

エレスをベットに寝かせて、ソルも寝かせた。

「のぼせたんだっけ

そつ思つて

『氷解の粒』アイスブロック
ウインディフレス
『風の抱擁』

一つの魔法を威力を最小にして使つておいた。

この程度の魔法なら今の魔力でも十分まかなえる。

「……後は田が覚めるまで待ちますかね」

仕事の後の騒動・前編（後書き）

「ヘタレ」

ゼ「ヘタレたわけじゃない、忠誠心だ」

デ「あれをヘタレと言わざ向と言ふとへ」

ゼ「忠誠心と言ふ」

デ「…………あくまでも忠誠心と言つたか。ならば貴様の主に聞いてみよ。……ところことで、Hレスさんどう思ひます?」

H「ゼレカは今ままがいいと思ひ」

デ「おつと、今回は珍しく意見があわなかつた」

H「ゼレカが積極的になつちやつと、『あのとき』みたいになるからね~」

ゼ「へへへ」

デ「…………つまつHレスさんがゼレカの」とを弄れなくなるのが嫌」と

H「うん…だつて~『あのときは』せ…」

ゼ「Hレス…その話はその辺で…」

デ「ゼレカはさく…」

ゼ「罪深き魂を浄化する闇よ。今ここに列を成し滅亡の果ての梯となれ。『闇の道』！」

デ「危ない危ない、逃げた方がいいな」

キシャー

エ「そんなに恥ずかしかったなんて……」

キシャー

デ「なんだこの蛇、追つてくるぞ！？」

ゼ「追えカペロー！」

キシャー

仕事の後の喜び（後編）（前書き）

前回と同じタイトルは違いますが、前回の続きです。

仕事の後の喜び（後編）

數十分程前

「ん……ソル、……ふあ……何して……」

「何つて、身体を隅々まで洗つてるだけよ?」

「それは……わかつて……るけど……」

「ああ、エレス、なんて可愛いの」

「ふえっ! ソル待つ……」

『禁断の花畠中』

現在

「…………」

二人とものぼせたまま起きないな

大体の予想はつくけど、何してたのかな?

「……ん、あれ? 私」

「目が覚めた? ソル」

「ああ、ゼレカ。はい、起きましたよ」

「風呂場でのぼせてたけど何があつた?」

答えは解りきつてゐるけど一応聞いておく

「エレスを可愛いがつてました」

「…………」

予想通りといふか何と申つか……

「報告書、机に置いておいたから

「報告書?……まさか、もう片付けたのですか!?」

「ああ」

「……今更ですが、仕事が早いですね」

あれ?さつきから話してゐるゼル、ソルがいつもと違つ様な

「…………ゼレカ。一応聞いておきますが、私とエレスを部屋まで運んできたのって貴方ですよね?」

あれ?やはり怒つてる様な

「やうだね?……一?ああ、やつこつ事か?」

理解した

「理解が早くて助かります。それで？」

「やばい……めっちゃオーラでてる……」

「もちろんの事ながら戻しをしてました」

「……………そうですか。まあ貴方ならそんな下劣なことはしないと、信じてますので」

「当然。一人が意識を失つてゐる間にやましい事をするなんて、そんな俺に反する事はしないわ」

「……心の底から思つてていることだ

「今日城下街で何をしたんですか？」

「ん? 珍しいな、俺に聞くなんて」

「たまには貴方から話を聞いてみたいと思つて」

「今日城下街であつたことをソルに話した

「……つて具合かな」

「…………やはり、貴方に聞くとHレスに聞いたのと同じまで違いま

すか

「？」

「いえ、Hレスに聞いた話とはまた違つたように感じられましたので」

「……確かにね。Hレスは今何を想つていたのか?、なんて考えてみたけど分からなかつたよ」

「それはそ……」

チャリン

「……?」

「『『Hレスが渡した方が喜ぶだろ?』って言つたら、『ゼレカが渡して』って言われた』

「……」

「さつき話した俺のイヤリングとHレスのペンダントと同じデザインのアミコレットだよ。さつき渡そうと思つたけど、時間がなかつたから」

「……ありがとうございます」

「ふふふ、どう致しまして」

「……」

「ふあー、……あれ? ゼレカ?」

「あつ起きた?」

「うと」

「なら、風呂に行つてくむ」

「うと」

「まだ完全に起きたわけじゃないの?」

「うーんと、まだみたい」

「Hレス、なうむつ寝ましょ?」

「うと、やうする。お休みゼレカ、お休みソル」

「お休み、Hレス」

「……じゃあ私も寝ますので」ゆうべつと

「ああ、お休み」

力チャン

……やつきのソル、とても嬉しそうだつたな

あんなに喜んでもらえるなんて、あれを選んで良かった

「……風呂に入るか

そつと風呂場に行く

仕事の後の喜び（後編）（後書き）

「あはあ……」

「ちけ、カペロから逃げ切るとはな」

「当たり前だ……俺を誰だと……想っている?」

「まあいい、今度こそ終わりに……」

「頭上注意

「は?」

バーシャン

「…………まあ……?」

「よひ、零花」

「はじめられた……」

「次回の後書きは『零花ちゃん』でスタートな

「くつ……悔しい……。」

鏡の本音（前書き）

……ああ。シリアル＆ダークになりました。

久々の真面目ルートです。

鏡の本音

「…………」

風呂から戻つて自分の部屋のベッドに身体を投げ出した。

流石に寝る時はアルフォート……銀の腕輪は外してる
腕に付けてるのに肌には触れず、宙に浮いてるが寝ずらい

「…………」

そんなことを……考へて……意識が……落ちた

『全てをマモリタイんダロ?なら力んたンなはなシだ』

『スベテ壊せばイイ』

『オマエは弱い!! ソンなんでダれかヲ守れルと思つてんのか!!』

……おい

『キニイラネエ奴、ムカつく奴、ハムカウ奴らそのスベテを無に帰すまでヤツザキにしロ!! できねえナラ俺にやらせろ!!』

…………ちつ、おい!! お前が誰だか知らねえが、俺のやり方に口だしてんじゃねえ!!

『はつ、ようやくこたえたか。オマエが何と言おうガ、いつかは壊れるサダメなんだよ!!』

…………つるせえ!! 僕の道は僕が決める! 誰にも邪魔させねえ!!

…………クククつ、ハハハ、ハッハーハはハ!!!! 良くなりカイしてんじやねえか。その通りだ!!!! だから俺が何シテも大丈夫、ダロ!!

!!

……何言つてやがる?

『その内会エるかもしないナ! それまでオアズケだ!!』

「…………今は？」

『おへ、やつと来たか』

「…………マムート」

『何してたんだ？』

「いや、俺にも分からない」

…………ホントにな

『…………まあいいか。それより、お前を呼んだのは《あれ》ができた
からだ』

……《あれ》？

『…………いいからいいから、とつあえず囁つぶれ。あつ、右囁だけでいい
ぞ』

「…………わかったよ。…………」それでいいか？

『えいっ』

！？

「ぐああああ、ああ――!――?」

なつ何だ！？田がえべり出された、痛み！

「……はあ……はあ……」

少しは、治まつた、か？

『《夢幻の眼》。いれといったからな』

「はあ……はあ……、それなら……こんな……痛みがあるって……先に
言えよ」

『てへつ そこはお前が聞かなかつたから』

……自称神め

『自称じやなくて、本物の神だぜ』

どつけでも同じだ

「……でも、ありがとな」

『……気にするな』

……

『もう用事ないだろ。なければ田覚めるけど』

『使い方は……分かるよな。おへ、もつこいぞ』

「じゃあな」

フュン

『……おいゼレカ。あんまり自分を追い込むな』

『……キヒツ』

鏡の本音（後書き）

零「はあーい、零花ですー監さん、楽しんでくださいねー零花との、お約束ですう~」

『「……』

H「ワハア～／＼／＼

『「…………ギャップの差がありすぎる。わたくしの今だもんなー」

零「つるせんべーー！」れやんなきや更に《幼児化》だつて言つたのはお前だらー！」

『「いやー、わたくしまで『スプラッタな死を望むか？』なんて言つて、槍と刀持つて追いかけられた後だもんな」

零「なんなら今からでも再開してやるつか？」

『「一重にお断りします」

H「……」

零「どうした？Hレス」

H「零花ちゃんが……私にそんな」とたれてるなんて

『「あいや、完全に自分の世界に入ってる」

零「……命の危険を感じる気がする」

H 「…………あれ？ 私に弄られてた零花ちゃんは？」

テ「うひひ」

エ「なんだ、そこにいたの」

零「Hレスに忠誠を誓ったのは『ゼレカ』であつて『零花』じゃないから、逃げるーー！」

エ「私から逃げきりれると思つてこるの？」

零「くわつ、何時になつたら元に戻るんだ！？」

特殊な日（前書き）

暑いです！！

自分の部屋で窓を閉め切つて執筆しています。

特殊な日

「……あつ？」

……右目に違和感を覚えた
触つてみる

「……血？」

多分、《夢幻の眼》のせいだろ

「……まあいいか」

右目の血を拭つて、身体を起こす

「……今日はなにがあるかな」

ガチャ

扉を開けて足早に玉座の間に向かった

玉座の間

「おはよー、ヒレス」

「おはよー、ゼレカ」

「……ソルの姿がないけど？」

「ソルならまだ寝てる」

「へえー、珍しい事もあるもんだな

「ねつ。それより、ゼ…」

キュルルル

「……」

「／＼＼」

「……そうか。そういえば今日は城の皆は里帰りだったな。一昨日
隊の奴がいってたな」

「／＼＼……そつ、それで、だから……」

「ふふつ、じやあ何か作ろうか?」

(口クン)

キッチン

「なにが食べたい?」

「ぜし力が作れる物ならなんでもいいよ」

「つつても、基本俺はなんでも作れるからな……よしつ、前作つ

た時にエレスが好きって言つてた《サンドイッチ》と《ポトフ》にする?」

「うん……」

俺は食材を『創造』して調理に取り掛かる

普通に生活してた時は自炊だったから、調理はできる方だ

最も、此処の食材は見たことがない物ばかりだから最初は戸惑つたな……

そつこいしている内に出来上がりだ

「ほい完成つと

えつ? ポトフを作るの? そんな短時間じゃできないって?

『速出』を使つたのや

この魔法は……ああまた今度説明するな

「ねえ、せつかくだからバルコニーで食べようよ~」

「そうだな。たまにはそつゆつのもいいな」

一応念の為にソルに書き置きしておこう

それから料理をバルコニーに運ぶ

バルコニー

「いい眺めだな

「たまに仕事中みてるけど、やっぱぱりきれいだねえ」

此処から見える景色は城下街とは真逆の方をむいていて、『贖罪の山』と『嘆きの川』、『沈黙の平野』の全てを一望できる

そのスケールは地上では見れないようなスケールだ

キュルルルー

「あっ『めざ』『めざ』。お腹空いたよね

「昨日の夜からなにもたべてないもん~

昨日まあのまま寝てたみたいだから、よっぽど空腹うし

『いたさきます』

一人で少し早い『販賣』を食べる

「ん~、おこしこ~」

早速エレスはサンドイッチを食べている

中身はトマト・タマゴ・ハムときゅうりにして話した

「ふふっ、なら良かった

「せっぱり、はむっ、ゼレカの料理も、こくさん、おいしいね~」

「わかつたから口の中のもん全部食べてから話しなよ

「むぐつ、いつもみんなが作ってくれるのど、ゼレカが作ってくれるのってなにが違うの？」

「んー、材料だと思う。俺はいつも想像したのを使っているから」

「たしかに、ここにはないものばかりだね」

「下界で暮らしてた時にあつた食材だしな。魔界にはなくて当然だ」

「ふうん」

あれっ、俺のカコバナよりも料理に夢中ですか
「はいゼレカ、あ～んしてっ」

……突然のむちやぶりですね

「自分で食つから…」

シュー――――――

「…………」

スプーンが消し飛んだ！！

「うひめ～ん、むりやりにでも食べさせたかったから～」

ちょっとでも動いてたら俺が消し飛んだな

「それならそ～と早く言えば良かつたのに」

俺は躊躇なく差し出されたスプーンを口にくわえた

「ふふふ、恋人どうしみたい」

「それは光栄な事ですよ」

……少しばかり魔が差したのでからかってみる

「む～、また意地悪なこといってえ」

「「めん」「めん」

「じゃあ罰として、はいっ」

スプーンを差し出された

俺はそれを受け取り、さつさわれたことをHレスにした

「はいっ、あーん」

「はむっ」

……それから食べ終わるまで交代でそれをし続けた

特殊な口（後書き）

デ「よかつたなゼレカ」

ゼ「漸く元の身体に戻れたからな」

デ「いや、やつちもあるけどもうひとつの方」

ゼ「もうひとつ?..」

デ「ホントはエレスの罰が『口移しで』ってことにする予定だった
んだけどな」

ゼ「何故変えた!」

デ「次の話と内容微妙にかぶるかなって思つたから
ゼ「じゃあ次回はそういう話なんだな!..?」

デ「そうじよひと思ひ」

ゼ「やうやう」となつて今回、これで終わるゼー!」

デ「ちよつ、待つて!..」

うな彼女とのな俺（前書き）

S サディストの略
M マジヒストの略
N ノーマルの略

だから何だつてことありますよね……

うな彼女とのな俺

「あ、俺は今とんでもない状況にあるんだぜ

どんな状況かつて？

自室のベッドで横になつて、エレスが俺の上に座つてゐつて感じだ

えつ？

…………おおいアルフォート。きじょーいなんて言つんぢやない
ないよ

考えなによつてたんだから

そもそも何でこんな状況になつたかつてこいつ……

あひつけつま

「ゼレカ、弄られて」

「わお、大胆発言」

「最近弄られてくれてないじやん」

「確かにな。こつちに来た当初は…………毎日弄られてたな」

「でも最近は、逆に私が意地悪されてる~」

「はははっ、いやだなあ。意地悪なんてしてないよー」

「だから、ねつ？」

「まあ、そのうちな」

「…………『我が身に刻まれし魔王の力。我が呼びかけに応え、その力解放せよ。』魔王化！」

ヒュン！－！

「…………えつ？」

「はい、捕獲完了」

「捕まっちゃたー」

「何処がいい？」

「自室」

「…………まるっきり抵抗しないね」

「もう二つならぬたら抜け出すのは俺でも至難の技だからね」

てくてく

ガチャ

ぼすん

ドサツ

今

つてわけだ

「久しぶりにゼレカを弄れる〜」

「久しぶりの光景だな」

「ゼレカ、どんな気分?」

「なんか微妙に動悸がしてる」

あれ?俺つてM?

クチュ

エレスが口を重ねてきた

もちろん抵抗はできない、といつよりしない

ひつしになつているエレスの顔を見るのが好きだから

「クチュ……ハアツ……ジユル……ん!?!?」

舌を入れた

抵抗……ではないけど、彼女の仕草をみてたら無意識にしてた

「ヒカル……ジユル……クチャ……」

「ハツ……ひやつ……んん……」

……やばい、歯止めがきかなくなってる

そして徐に拘束を解いて、エレスと俺の位置を変えた

「ひやあ……」

「じめんHレス。そろそろ限界かも」

「…………む～。やつぱつ」になつた

「はははっ。俺、うなのかな？」

Mだと思つてたけど

「むじゅ～、それだと私とおなじ」

「多分大丈夫。自分ではNだと自負してるから」

「私のこんな姿見て楽しんでるのぶつうなわけないでしょー。」

「ああHレス、楽にして」

「／＼＼＼、気持ち良くなつてよ」

『自主規制』に発展中～

うな彼女とのな俺（後書き）

「最初に補足、今回の話は前回の話の次の日です」
エ「最初はうまくいくとおもったのに～」

「魔王化」までしたのに残念でしたね

エ「ティンさん…どうにかしてゼレカをいため……」「ホン、いじめられませんか？」

デ「押し倒すとこまでは良かつたけど、そのあとがなあ……よし、なら力を抑える薬品でも作るか」

エ「ホントですか！ ゼひお願ひしますー！」

デ「おまかせ下さー」

エ「ふふっ、これでゼレカを……ふふふ」

ゼレカの部屋
ゾワッ

ゼ「なつ何だ！？ 今の一！」

抑えない衝動・小さな優しさ（前書き）

今日は疲れました。

なので話を考える暇がなかつたので突然思いついた話です。

……そろそろ重要な話を書こうかな。

抑えない衝動・小さな優しさ

「覚悟しろー魔王」

「今日がお前の命日だ！」

「倒させてもらうつー！」

「…………はあーあ、面倒だ」

今俺は勇者達に囮まれている

街の皆に被害が及ばないよう、街から数十？離れた場所に、まあ自分から跳んだわけだ

……俺の見立てでは、おそらく勇者が三人いる

その勇者一人に三人程の仲間がいるから合計十二人だ
どうした、怖じけづいたか！

「今更後悔しても遅い！」
「滅びるがいい！」

…………最初に言つておくが、俺は魔王じゃないぜ
事実だ。俺は『魔神』ではあるが、『魔王』じゃない
魔王は……というよりも、魔王姫はエレスだ

「なに！？」

「魔王じゃないだと？」

「こいつじゃなかつたのか！」

「うん、そろそろここの話し方がうざつたくなつてきた

「……貴様等、死にたくなければ下界に帰つて一度魔界に来るな。」

「誰が帰るもんく…」

「忠告はしたからな？」

右手に剣を、左手に銃を創造した

剣は両刃、銃はマグナムを想像

パン！

「なつ！」

銃の引き金を引いた

……目の前が赤くそまる

「わあー！？」

今ので一人

「後、十一人」

剣を近くの奴の右足目掛けで滑らせる

スパンツ

「え？」

そいつの右足が落ちる

赤い飛沫と白い石の様な何かが見えた

「はあーー！」

ザクツ

後ろから向かってきた奴の首に剣の先端を向けておいた

パン

先程の右足のない奴に向けて引き金を引く

「後、九人」

「くそつ、魔王は女だつて聞いてたから倒したら俺の……」

チツ

後ろでウザつた事を呟いたゲスの左手を切り落とす

「あつ……ああ！」

次に左足を、右手、右足、喉、頭、腹……原型を留めなくなるまで
グチャグチャに切り刻んだ

「イラツクんだよ」

溜まつたイラツキを晴らすべく、剣と銃をしまつ

「魔力よ。『深淵の槍』」
アビスソロランス

闇と風の魔力を帶びた槍をだした

魔力を武器の形にしただけの技だ

それを……回転させて……跳んだ

「ぎゃあーー！」

「ぐわあー！」

「……」

不思議な気分だ

目の前には血の雨、肉塊、白骨が飛び散つてゐ

のに、どうして俺は……

『つらつているんだ口づ』

何だ？自分じゃない自分に支配されるこの感覚は

「さつー!？」

気がついたら周りは赤い水溜まり

勇者一行もいない

「…………やりすぎたな」

「はあ…………はあ……」

田線の下から呼吸が聞こえる

「……」

「ひつー?」

さつきの勇者の仲間かな?

そういえば金髪の女の子がいたな……

「じつした?」

少しだけ威厳のある声をだす

「(がたがたがた)」

怖がらせ過ぎたな……

全く、さつきはさづかしてたぜ

「いや、やここまで怖がらなくとも……」

いつもの話し方に戻した

「はあ……ん……」

あつやりや、ホントにやつ過ぎたか

「じつやうお前が最後の一人みたいだな。なに、今更じつもしねえ
よ。帰るなら帰つてもいいや」

「わた……しは、貴方に……負けた。どうせれども……構わない」

度胸はないけど、流儀はあるな

「なら下界に戻れ」

「それはできない！アレク達が戻らないで私だけなんて！」

……今少しだけびびつた

まさかここまで芯があるなんて……

「……ならば、俺に逆らわないというわけだな？」「

「それが私の流儀だから」

「わかったよ。……だったら俺が無理矢理でも下界に帰してやる

「だから……」

「まあ待て。俺の遊びに付き合つてもうりつてからだ」「遊び？」

下界・パレスト王国

「勇者達はどうしてるだろうな？」

「王よ、勇者達を信じてしましょう」

「……その問い合わせだが、俺が答へてやる」

「！？」

空間が歪む

「ふはははー久しぶりだな、パレスト王」

「ぜ、ゼレカー！」

「相変わらず勇者制度があるなんてな」

「き、貴様！何しに来た」

「このイケニヒとしては役立たずの少女を歸しに来た」

「す、ステイ！」

「……」

「こじつこは傷を癒してもうったからな。その礼にこじつて來たわけだ」

「他の者達はー。」

「俺が喰らつてやつた

「……」

「それと一つ言つておいてやる、ゲス王。その少女に手を出したら、俺がこの国をぶつこわすからな」

「なに……」

「たとえその少女が奴隸だとしても、だ」

「わ、わかった」

「じゃあな、ステイ」

「……じゃあ

ぼそつ

(アレク、な。蘇らせておいたから。多分城の外にいる)

「ーー」

「さうばだ、人間の小娘よ」

「ゼレカ……ありがとうーー！」

ブウン

空間を歪ませて魔界に戻った

抑えない衝動・小さな優しさ（後書き）

「完成……」

「できたんですか……」

「思いの外早くできたよ

「わあ～うれしいです……」

「効果時間は一時間だから、飲ませたら一時間は好き勝手し放題ですよ」

「一時間か～、それだけあれば……」

「無味無臭無香料とこ～、どう飲ませてもばれないスグレモノ」

「じゃあ紅茶にいれてもばれないの？」

「もちろん」

「な～り、ゼレカが帰つてきたりわざなくお茶にしゃべつてのまえよつ」

「いれならゼレカでも動けまい」

「ティーンさん、ありがと～りますー。」

「いやいや、それよつもがんばってね

「はい！」

密談（前書き）

前話のゼレカとステイの会話です。

三十話まで更新できたら、タイトル変えるかもです。

「改めて名乗つておくが、俺はゼレカ」

「わ、私はステイ」

「君の服装やさつきの奴の紋様をみるかぎり、君はパレスト王国の人間だろ?」

「……ええ、噂には聞いてたけど、貴方が『幻惑の大魔』なの?」

「へえ、そつちじやそう呼ばれてるのか。確かに一度パレストへ単独で攻め行つたこともあつたな。その時に誰かが『幻惑の大魔』なんて言つてたっけ」

「前つて、『降伏戦争』!?」

「いや、名前までは知らないど」

「城に攻めてきた悪魔に負けた戦いのこと。……確か数は一人」

「多分、それ俺」

「……何で…」

「あれはパレスト王が先に仕掛けてきた戦争だ。俺達は何もしてないぜ?」

「でも! 悪魔が大量に攻めてきた! 人も沢山亡くなつた!」

「今俺と戦った時に、勇者は何人いた?」

「……アレク含めて三人」

「その三人は全員パレストの勇者?」

「そんなわけ……あつ」

「理解してくれたみたいだな。悪魔が攻めてきても、それは別世界の魔界」

「私達が違う人間界から来たように」

「だから、俺達は何もしてない」

「そんな……じゃあ、アレクは……」

「……アレクって、さつきの白髪の勇者?」

「うん……」

「俺がグチャグチャにした奴も君達のパーティー?」

「そうだよ」

「……じゃあ最後に一つだけ」

「?」

「君は奴隸でしょ」

「!?」

「その反応、やつぱりか……」

「どうして……それを？」

「……ここからはきな臭い話になるけど、パレスト王国の勇者制度は魔界の王……つまり、魔王のイケニエの為の制度なんだ」

「嘘ー？」

「残念ながら現実。だいたいのイケニエは男女一人ずつ。あとは見張りが一人の三人のパーティってわけ。だいたい、魔王を倒すのに三人なんてふざけた話だ」

「……」

「毎回そのイケニエは、地位的に邪魔な奴、死んでも困らない奴、命令をきかない奴なんて具合に選ばれる」

「……」

「だから勇者制度がある国……勇者に関する法律が徹底してる国は、イケニエの為の勇者が存在するんだ」

「……じゃあ、アレクは地位的に邪魔だつたつてこと……」

「そのアレクつて、奴隸廃止とか言つてた？」

「うん、『奴隸制度は廃止しなければならない！』って言つてた」

「パレスト王は奴隸がいなくなるのを恐れてたから、邪魔だと判断したんだろ」

「……そんな……アレクは、私の為に……」

「……」

「アレク……私……うわあーん……」

30分後

「……落ち着いた?」

「……うん、じめんなさい」

「謝る必要なんてないよ。…………」しつこいのは慣れてるから

「……」

「よしつ、そろそろ下界に行くか」

「……私……」

「大丈夫、あの王は俺をなにより恐れてるから。少し脅かせば絶対に安全になるよ」

「……ゼレカ」

「……うん」

「……うん」

蘇らせておいてやるか、あいつ

ふふつ、俺は魔神が似合つてないな

密談（後書き）

「今日はエレスさんもゼレカもないから、新しいゲストをお呼びします。では初めに、ソルーティアさん！」

「よろしくお願ひします」

「そしてゼレカの契約魔獣、アルフォートー」

「よろしく頼む」

「貴方がティンさんでしたか。エレスからたまに聞いてます」

「主が溜息混じりに、おぬしの名を呟いてたぞ」

「とにかくとは、だいたいは俺のことを見つけてることで良いみたいだな」

「あのーティンさん。ここはどういった場所で？」

「後書きですね。普段とはまた違った場所ですので、自由にじっくりぞ」

「ティン殿、一つ言いたことがあるのだが」

「はい？」

「我还是まだ本編では一回しか登場してないぞ」

「ですが私は面識ありますよね？」

ア「うむ。ソルーティア殿とは、主が我を召喚した時にな

デ「ああ、そうか。その話は書いてなかつたから、今のまじや一
人は会つてないことになるのか。でも会つたことがあるから本編で
もそんな感じで」

ソ「私からも一つ言わせていただきたいのですが

デ「ビ'ウ'ビ'ウ'

ソ「私もメインヒロインの一人なのに、出番が少ないってどう
事ですか！」

デ「ああ……、確かに基本ゼレカはエレスとラブつてることが多い
な」

ソ「フラグ立てても回収しきれないかもしぬないじゃないですか

デ「まあ、いざとなつたら『後書き』がありますからそれで解決し
ていきましょう」

ソ「それなら構いませんけど……」

デ「では文字数も稼げたことだし、また次話でー。」

まの～まの～な午後（前書き）

中間テスト中なので、あまり長くはできませんが更新します。

まへまへな午後

「はー、疲れた」

「あ、ゼレカ。もう終わったの?..」

「うさ。久しづつに下界まで行つてきただけでね

「下界って、何の?..」

「パレスト王国」

「パレスト? 聞いたことないなあ

「俺も一回しか行つてないよ

「ふ~ん」

「……それよつもレス。あと他のへりこむつもつ..」

「あつ、もつもつやつた?..?」

「気付くのも、いきなり田舎にいたりされたら嫌でも
気付くだろ」

「話してゐるすきにすれば、ばれないかな~って

「……いや、田舎はすぐわかるよ

「まへまへともここここ

「うそ、どうひとせ思ひただけ。……頭に柔らかい感触があるのは何で？」

「とつてみれば解るよ」

「…………」

田元に手をのばす

シユル

「あつ」

「えへへへ、気分はどう?」

「——成る程、そういうことか」

俺の目の前にエレスの顔がある

柔らかいと思つたのは膝枕されてもうかつた

「とても氣分が良いく。このまま寝てもいいなーってぐうこだ

「ふふふ、いいよ。休んでも」

「なり、お葉巻に甘えて少しだけ寝かせてもらおうかな

「ゆくつでここよ、ゼレカ」

「 そりは……言つても…
そのまま意識が薄れていつた

まの～まの～な午後（後書き）

「…………」

「起きる」

パコッ

「！何だ何だ、事件か！？」

「…………」

「なんだゼレカか。脅かしやがつて

ゼ「どんだけ寝てんだよ。昨日はソルとアルフォートと別れてから
ずっとだろ

デ「昨日縛られてた奴よりはまだと思つぞ」

「もう一度寝てろ」

パコッ

「イタツ！」

物忘れの日（前書き）

まだ中間テスト中です。

物語れの日

「はまはつ、ちよつ、ひょく、くすぐつたにってー！」

「ゴロゴロ

「まなまつ、まなま、そんじやれるなよ
「ぬま」

「ゴロゴロ

「……主よ。何故このよつた事をしていのだ？」

「…………うん、俺も何してんだか分からない」

アルフォートを召喚してじやれてた

「何となくアルフォートを召喚してみようと思つて」「それは構わないが、急ぎの用事では無いのだな？」

「ああ、何となく喚んだだけ」

「ならやつへりすればいいのではないか？」

「……それもそうだな。じゃあエレスのところに行こうかな

「確か『主の主』、だな」

「うん、お前から見たらそうだな

アルフォートの表現が面白かった

……堅苦しい喋り方なのに、天然なのが何なのかギャグセンスがあるな

そんなこと考えてるとアルフォートがないことに気が付いた

「アルフォート？」

「呼んだか、主」

「ああー、上か」

歩いてたから後ろにいると思つてたんだけどな

「後ろにいると思つたから呼んだだけだ」

「やうか

カツカツ

玉座の間……じゃなく、エレスとソルの部屋に着た

□ □……

「ゼレカ～！」

「おつと」

ノックする前に扉が空いた

「俺だと分かったのは？」

「わかるよ～、ゼレカだもん」

「……」

「あつ」

「ん？ ああ、こいつは俺が契約した契約魔獣のアルフォート」「初めて御目にかかる、主の主よ。我的名はアルフォート、以後御見知りおきを」

「私はエレスナーグ。よろしく〜」

「せういえばエレスにはまだ会わせて無かつたね」

「私にはつて、ソルにはあわせたの？」

「報告がてら紹介したからな」

「…………ソルの反応どうだった？」

「？ 別に普通だつたけど」

「ソルってああ見えてかわいいもの好きだから……」

「ふむ、それでソルーティア殿が我に触るとしてたのか」

「そうだった？」

「うむ」

「…………全く気付かなかつた」

「ねえゼレカ、空撃隊の皆がさがしてたよ」

「……せつこえればそうだった気が……」

「だから先程『急ぎの用事は』と聞いたのだ

「お一一一・アルフォートー・わかつてたんなら言えよー。」

「ふふふ、主の記憶力を試したのだ」

「いや、それは言えよー・じゃあエレス、会議が終わったらな

「……会議？ああつー・そつだ、城の会議忘れてた！」

「人のこと言え無いけど、忘れるなよ」

「じつ、じゃあ後でねー。」

「ああー。」

空撃隊の隊舎にて（急いで）行く

物忘れの田（後書き）

デ「嫌…………」

ゼ「どうした？突然」

デ「予約注文したら、田にちが『6円6日』で金額が『666円』
だつたんだよ！」

ゼ「わおー、不吉」

デ「しかも今日はよく物落とすし、シャー芯折りまくるし、傘折れ
るし散々だぜー！」

ゼ「……お疲れです」

デ「リアルで『いつこう事があるとまことねー』

ゼ「はははーー田頃の行いだら」

デ「やだなあー」

報告&発行紹介（前書き）

やあー、一気に内容が思い付いたので一気に書きます。

報告&団体紹介

「はあ……はあ……はあ……」

今俺は全力で走ってる

「はあ……たつぐ、何で空襲部隊命令がこんなに遠いんだよー。」

玉座の間から隊舎まで遠いつたらあつやしない

「だあー、つとー。」

ガチャ デンジ！

「セーフーじゃないよな？」

「ゼレカー遅い！」

「いや、遅に忘れてた」

「忘れてた？だから集合十分前には来ていろって言ったでしょー。」

「そんな怒るなって、メフィスト

「……それにしたつて遅かつぞ、隊長」

「おつ、ベルゼブ。待たせたな」

「……全く、あなたはこつもそつだ」

「やつこいつなつて……つて、アストナトは？」

『…………』

「？」

「ドーナー。」

「グヘッ。」

「全く、遅いですよゼンカセス」

「……アストナト、何で上からおちてきた？」

「細かい事は気にしねやこけないんですよー」

「とつあべず降つる」

「うのまでもここんじやないんですか？」

「うのまめじや、なんも出来なこだわ」

「ハルー。」

「ふう、嘘…………あれ? いつも一番早く来ての箸の奴がいないな

「え?」

「やつこえげいないですね」

「…………俺の後ろのソファーを見てみな」

ヒョイ

「アラクネ、ゼレカ来たよ」

「すう、すう」

「アーラークーネ」

「すう、すう」

「…………起きないと思つた」

「アラクネさん、三十分遅れの定例会ははじめますよ
「ぐつ」

アスタートめ、何気に痛い一言を

「…………アラクネ、隊長が三十分遅れで來たぞ」

「はう

ベルゼブ、便乗するな

「アラクネ、早く起きないと一時間遅れになるよ」

「ぐはつ」

メフィスト……

「真に申し訳ござりませんでした」

「あい、あい」

「……起きないな

「しゃーあなー、ゼレカが起こしてあげ。もうひとこつもみたい」

「」

「マジドー」

「遅れたんですから、そのぐらこはアラクネさんしないと」

「……隊長」

「くへ、分かったよ！ やればいいんだな、やれば！」

『うさうさ』

「……」

俺はアラクネが寝ているソファーアル元で

そしてアラクネの耳元で

「アラクネ。いつまで寝てるんだ？ 僕が来たのに
そう呟いた、瞬間

「うん……ゼレカ？ 来たの？」

………… 田観めるの早くないですか？

「やつぱりゼレカね」

「流石ですゼレカさん」

「………… タラシ」

「今聞き捨てならない言葉が聞こえた気がしたんだが？」

「ふあー、定例会始めるの？」

「………… まあ今はいいか。じゃあ皆揃つたことだし、定例会始めるか」

それぞれ自分の席に着く

俺はボードの前

メフィストはアスターの隣で扉の前

アスターはベルゼブの正面で棚の前

ベルゼブはアラクネの隣でソファーの前

アラクネはメフィストの正面でベッドの前

がそれぞれの席だ

「いやあー、黒い扉に緑と黄色のソファーなんていかにもつて感じ
だな」

「何言つてゐるのゼレカ？」

「久しぶりに来たからな」

「久しぶりって言つても四日前に私に会いに来たよね？」

「おい、アラクネ。それはお前の夢だ」

「そりだつけ? いや、でも……」

「アラクネが自分の世界に入つたけど話しを始めるか」

「……話し、か」

「こつもと何にも変わりませんね」

「『定例会』だから変わらなくてもいいだろ」

「んー、おかしいな。ゼレカが私に……」

「アラクネ、そろそろ話しに参加しようつな」

「? まあいいわ、今私の目の前にいるんだもん」

「はあ……全く、アラクネといいクレアといい、どつしてこの『妄想癖』が強いんだろうな」

「それはそつとして、何すんの?」

「ああ、んー……じゃあ最近何してた?」

「私は自分の魔界に行つたりしてたわ」

「私はお昼寝してました～」

「……俺はギルドの仕事をやつてた」

「……一応言つておくが、皆『魔王』だ

「自分の魔界……メフィストは別として、の仕事しろよ」

「レイレイに任せたから大丈夫～」

「……同じく」

「全く、兄妹揃つて怠けやがって」

「ベルお兄ちゃんが敵さん全滅させてたから平気だよ～」

「……ふつ、若氣の至りだ」

「はいはいそうだつたな」

「ゼレカ、私は人助けしてた」

「人助け? ちなみにどんなことを?」

「下界に行つて悪さしてる雑魚悪魔を倒してた」

「へえー、珍しいな」

「ゼレカが、『悪さしてる奴らは暇だったら倒しておいて』って言つたから」

……雑魚つて、アラクネに頼んだのは魔人じやなかつたか？

「ああー、そんなことも言つてたな」

「といひであんたは何してたの？」

「俺は……こりこりやつてたな」

「いひいひへつて？」

「勇者全滅させたり、洗脳魔物を浄化させたり、ナブラートまで行つたり大変だつたぜ」

「流石ゼレカさん」

「あつ……そだ。契約したから紹介しとくな」

「……契約までしたのか」

「ナブラートの時にな、『契約者の…』」

「詠唱しなくとも喰べるよね？」

「…………できるけど、できるけどわー」

「どうしたの、ゼレカ？」

「…………なんでもない。いどよ、アルフォートー。」

「…………さつきから居たぞ、主」

……忘れてた

まだ還してなかつたんだ

「へえー」

「わあーー。」

「……」

「銀色の魔獸」

「『』いつが俺が契約した契約魔獸のアルフォート」

「お見知りおきを」

「皆、とつあえず自己紹介してやつてくれ」

「私はメフィスト。魔界『ゲノムルーツ』の魔王よ。ゼレカに助けてもらつてから、『』にいるの」

うんうん、必要なこと全部言つてくれたな

「私はアスタノト。『リリー・ネメス』の魔王姫。よろしくね~」

「……ベルゼブだ。別に覚えなくともいい」

おい、兄貴！アスタノトはちゃんと血【】紹介したのに、なんでお前は手短かだ！

「ベル兄ちゃんはメフィストと付き合つてゐるんだよ」

「……アスター、それは言わなくてもいい

「あら、別に隠す事も無いでしょ？」

「メフィスト……少しば恥じらいをだな……」

はつはつは、ざまあ！

「私はアラクネ。人間と魔王のハーフよ。一応は『ケルムノイド』の魔王だけど……ゼレカについてきたの」

「基本、俺がどういってるけど、俺じゃなくとも大丈夫だからな」

「でもー、今はゼレカがいいの」

「『今は』、な。俺はエレスに仕えてる『魔王の騎士』なんだから付き合つたりなんなりできないぞ？」

「大丈夫 それまでにどうにかするから」

「どうにかつて……」

「……だから、お前は……」

「ベルゼブ、意識しそぎ」

「メフィスト、もつと言つてやれ～」

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「……豈あるべく、諷がしい部隊とはいつとなんだな。主よ。」

報告&発言紹介（後書き）

（会議中）

H 「じゃあ今から会議をはじめる。」

ソ「では今日はフルHさんの意見を査しよつと思ひますので、フルHさんどうづ？」

F 「はつはい！えーっと、最近の報告のかにん、じゃなくつて確認ですが今のところ表だつた異常報告はありませんので、大丈夫だとおもつ思います。」

E 「かみかみだねフルH」

F 「すつすみません」

ソ「確かに、報告としては何かあつたといつ報告はありませんね。」

それでは…」

E 「会議おわり。みんなできゅうかこしよう

『はいっ。』

ソ「本日も平和な会議ですね」

悪戯夢 終焉の始まり（前書き）

今回の話は「これから」のシコアスシーンに深く関わってきます。

悪戯夢 終焉の始まり

「おはよー、零花」

「おー、ひー。今日何かあつたつけ?」

「忘れたの?一時限田科学のテストだよ」

「げつ、やべえ。何もやつてない」

「そんなこと言つて零花はいつも画得点じやん」

「は勉強してゐるわつに点数低こよな」

「むへ、そんなことないよー。」

「じゃあ今日のテストで、点数が高い方が低い方の言つことを一つだけきくつていこうのは?」

「やつぱり血信あるじやん」

「全く勉強していないからハンデにはなるだろ」

「ふつふつふ、予想通り! から今日の範囲は教えてもらつてたのだ!」

「ええー、からー?.....やっぱこな.....」

「今日のテストが楽しみだわ」

「おーす、零花。」

「かよ。おどかすな」

「おはよ、」

「ん~?『おどかすな』?何があつたのか由状じろ
「別になんもないって。ただ かと思つたから」

「と何かあつたの?」

「との話を聞かれたかと思つて」

「ほほう~。聞かれたらいまざい話なのかね?」

「なんなんじゃねえよ。……つて、後5分じゃねえか!」

「マジか!」

「走るぞ 、 、 、 !」

「ちよつ、待つてよ零花」

「零花、 に頼まれた物持つてきたか?」「ああ、『ブレイン
グラブフォーハバー』なんてマニアックなゲームやりたがるなんて、
も変わつてるよな」

「それを持つてるお前もどうかと思つだ」

「二人とも、足、早いよー」

「お~と、わるこわるこ。」

「

も見た日はスポーツ得意そつなんだけどな

「そんなこと言つたつて」

チャンチャン チャンチャン テテロテーローリ

「うん?」

ピッ

「零花ではありますんよ」

「いや、零花の携帯に掛けて零花の声で違つって言われても

「それで 何の用だ」

「今家に居るんだけど、今日何かあつたつけ?」

「呑氣だなーおーー後一分で始まるぞ」

「はえ? 後十五分はあるけど?」

「え? あつ、ホントだ。腕時計くれつてた」

「まあいいんじやない? 早く着くぶんには」

「確かに。今日は科学の.....つて、お前はバリバリの理系だから

大丈夫か

「あーそういえばあるつて言つてたな」

「ほんじじゃあ」

「待つた! あれは持つてきたらうな?」

「ああ

「じゃあーな

「

ピッ

「おい、零花！何スピード落としてんだ」

「ああ、腕時計がくるつてた」

「えー？なんだ～！」

「うつかり者め

「はははー。まあやつへつに行ひうせ」

「走らせとこてよべいづせ」

「はあ、はあ」

「大丈夫か？」

「ちょっと、休ま、せて」

「……ホント体力無いな」

「陸上のHースの　と比べたら仕方ないだろ」

「その俺に着いてくるお前も相当だけどな」

「ふつ、一人とも早いよ～」

「落ち着いた？」

「うそ、ほとんどは、落ち着いた」

「じゃあ行きますか

『アトニ田ダゼ』

「.....」

夢か.....

「随分懐かしい夢だな」

.....確かにアスタノトが『魔王化』してメフィストと一緒にベルゼブ

を追いかけてたのを收拾したんだったな

「.....風呂」

そうだった、それで疲れて風呂入ってなかつた

「よつと」

着替えを持って風呂場に行く

悪戯夢 終焉の始まり（後書き）

『「……ヤツホーー!』

ゼ「どうした馬鹿作者?』

『「はつはつはー久しぶりの登場だぜー!』

ゼ「……やうじえばやうだつたな』

『「そろそろ全体的な話を進めようかなー』

ゼ「あのシーンをやるのか』

『「心機一転、タイトルも変えよつと思つんだ』

ゼ「話を進める時に変えればいいだろ』

『「じゃあ『吸血魔王と赤血魔神』にかえる』

ゼ「…………といふわけで、『吸血魔王【どうあれチートド。】』で検索してでなければ『吸血魔王と赤血魔神』になつてゐかもしけませんので、『』ア承下セ』

『「でもまだ変えませんよー』

悪戯夢 決別・目的（前書き）

何か無駄に続いてますが、この話が連続するわけではありませんよ。

悪戯夢 決別・目的

ポチャ

「……」

……なんだあんな夢を見たんだろ

……もうとっくに決別したつもりだったのに

「……まだ俺は『葉月零花』のままでいたいのか、『ゼレカ・ハジキ』の願望なのか」

どちらにしろ俺の目的に変わりはない

……そう、変わらない

「……ふつ、ヒテー顔」
鏡を覗き込み呟いた

……そろそろ出るかな

ザバン

カラカラ

扉を閉めた

風呂場

『…………ソリヤモウだ。オマハの口の映し出しだん

だからナーハー』

血壓

「……」

眠い

けれど、少しだけ寝るのを躊躇つ

「…………から……だは……しょひじ……やだ

…………ソリヤ

『久しぶりだな、ゼレカ』

「マムート。まさかお前が……」

『言いたいことは分かつてゐる。だが、あれはお前が勝手に見た夢だ』

「…………そつか」

『今のお前の目的はなんだ』

「エレスを、この世界を守ることだ」

『やはり、変わらないな。あの魔王の為ならなんでもする、か』

「当然だ」

『……なら。昔の……葉月零花の目的は?』

「……」

その問い掛けに、俺は少し戸惑った

『どうした? 忘れたか』

「……俺を、俺の友人を、俺の大切な人を殺した『大天使』を抹殺することだ」

『……願いや目的なんて、良くも悪くも変わらないんだな』

「そのために転生したんだからな」

『今の自分の選択に後悔はないな?』

「ああ!」

『オーケー。それが聞ければ十分だ』

「ふん、何を今更」

『そりだつたな』

「当たり前だ」

『……ゼレカ、自分に負けるなよ』

「……？」

『いや、なんでもない』

「変な神だぜ」

『おひ、それと名前で呼ぼうな』

「へいへい。じやあ起きたな

ふゅん

『なんだよ、忠告のツモリか?』

『……』

『忘れたノカ?オレがダレかって』

『……追って詰めてじつあるつもりだ』

『決まつてんだろーよ。オレが身体をシハイするたメだ!…』

『……』

そんな会話があつたなんて、俺は知る由も無かつた

悪戯夢 決別・目的（後書き）

デ「テンデロテンデロー」

ゼ「ヒツヒツ頭がいかれたか」

デ「おいゼレカ。聞いて驚け、喜べ。なんと…PV32000、コ
二一ク5000突破だぜ！」

ゼ「…もう少しさんなにか」

デ「昨日解析したらそうだつたぜ」

ゼ「そいつはめでたいな」

デ「これもこんな駄文を読んで下せりている皆様のおかげです」

ゼ「これからも日々書かせますので」

ゼ・デ『よろしくお願ひしまーす！』

デ「つてなわけで記念番外編を書いてみたいのですが、今週体育祭
なので来週ぐらいに書く予定です」

ゼ「番外編……まさか！」

デ「女体化、幼児化なんでもこいですね」

ゼ「早まるなティン」

デ「まあどうするかは気分次第ですので。人物紹介とか、能力説明
とかにするかもだからね」

ゼ「俺はそつちを祈つてゐるぜ」

テ「読んで下さつてゐる皆様方、本当にありがとうございます。この
からの励みになります」

恵みの桜（福井城）

こつせよつは遅くなつてしまつました。

恵みの雨

「あつ、あつ、ぜしゃか。ちよつとつさあつてほしいう場所があるの。ソルには見つからずに」

「ソルに見つからずといふことは……ギルド？」

「…………いよね？」

「もううん。君が望むなら何処へでもお付き合いますよ」

遊びに行くのかな？

確かにソルにばれるとあれだけど……

「えへへ、アリガト」

「ふふつ、いえいえ」

……確かに今日は雨降るつて言つてなかつた？」

城下街

「ああー、それで今日は空の魔力がたかいんだ」

空にも魔力がある

雨が降るって事はそれだけ大気中の魔力が高まる

「……雲行きがあれだな」

「はやく行こうよ」

そしてギルド田端して足を早める

ギルド・魔魔達の眼デモンズアイ

ギィイ

扉を開ける音が鈍い

「よつゝんわ、魔魔達の眼へ。四四ふづぐりこねエレスナーグ

「メトリア、報告書でもうる?..」

「はい、これでしょ?..」

「よつと、じやあたしかに受けとつたからね

「確かに渡しました」

同盟国軍空・特別管理所

エレスが自分の用事を済ませてる間に俺も用事をしてくる

「ん?..」

「……隊長か」

「奇遇だな、ベルゼブ。ＳＵランクの依頼つてきてるか？」

「……今はきてないみたいだ」

「わつか。ならこいや」

「……ＳＵランクは魔王クラス（俺達）の依頼だ。なのに魔王でも大魔王でもないあんたがなんで達成できるんだ？」

「気になるか？」

「……当然だろ。聖馬の時も、『あの時』も、普通の魔王じゃひとつにもならないことだぞ」

「……それは俺が『魔神』だからだ」

「……何？」

「だから、俺は『魔神』なんだよ」

「……そうか」

「びっくりしたか？」

「……ふん、あんたら天使や神つても驚きはしないよ」

「あらり、薄いリアクション」

「……それよりも姫さんの用事は終わったみたいだぜ?」

「ん、そうか。じゃあな」

「……ああ」

カウンター・入り口

「あつ、ゼレカ。何処行つてたの?」

「ちよつと自分の用事をね。それより用事は終わった?」

「報告書ももらつたし、みんなにも会えたから終わったよ」

「じゃあ帰らつか」

扉を開ける

ザアー

「……降つてきたな」

小降り……とは言えない量が降つている

「どうしたの?」こんなに降つてゐるのに

「魔界と下界はやつぱり違うと思つてな」

「やういえばゼレカがいた世界は雨にうたれないんだつけ?」

「たまにせぬもいつのつたれた事もあるけど、毎回毎回せうたれ
ないな」

「魔力が通つてないからしかたないよ」

「わうだな」

魔界の雨は魔力の塊だから大事な魔力の供給源になる

魔力が身体に満ちてくる

「それでは参りましょう。姫様」

「エスコートしてくださるなら」エレスの手を取り導くように歩き
だす

「ふふっ、ホントのお姫様みたい」

「何言つてゐんだ。正真正銘の姫じやないか」

「『魔王姫』だけじね」

「変わらないや」

話してると雨が身体に当たる

「魔力が満ちてくる」

「ゼレカの魔力は膨大だからね」

「魔力が膨大だと完全回復するまで時間がかかるんだよなあー」

「魔力の上限がおおきければおおきい程、つかえる魔法もあつかいやすくなるんだよ」

「それは知らなかつたな。俺の場合はイメージさえ出来れば扱い易いも何もないけど」

「それはゼレカだけだよ～」

「ははは、そう……いえ……ば……」

不意にエレスに向ける
「どしたの？」

「／＼／エレス、服」

目を逸らしながら言ひ

「服つて……」

「……」

「……」

今日のエレスの服は純白のローブと青のミニスカート
「あつ／＼／

顔を真っ赤にしている

「やつはいえば何で今田は腰がこつもと違つただらつたな…………って聞
ひましたらね」

「ん／＼……それは今日はソルの誕生日だから」

「ああ。ソルに見つからずってそういう意味だつたんだ」

自分の黒いコートを脱ぎながら言つ

「つと。着てなよ」

「アリガト／＼＼＼＼＼

俺のコートは防水性だから雨を弾く……魔力は弾かずにだけど

「だからパーティーみたいな格好してるんだ」

「今日の夜にはじめるから、ゼレカも出席してあげてね」

「もちろん」歩きながら、まだまだこの世界のことが分かつてなかつたと思つてみる

恵みの雨（後書き）

「ゼレカ。今思つたんだが、名前のある主要人物の男の割合が少
なくないか？」

「そうか？」

「お前だろ、ショイドだろ、アルフォートだろ、ベルゼブと四人
(?)だけしかいないじゃないか」

「……お前の趣味だろ？」

「もううんだとも」

「……」

肩揉み（前書き）

ほのほのとあまあまな話が書きたかったんですね。

肩揉み

「はつ……ん……ゼレカッ！」

「……」

「ああつ……あつ……」

「……」

「んあつ……ひつ……」

「おいエレス。誤解を招かれよつな声をだすな

「だつて……氣持ち……いいん……だもん」

「全く、休憩しないで事務仕事やるからこいつなるんだよ

誤解されないみつて言つておくが、俺は肩を揉んでるだけだからな

「ゼレカッて、肩揉むのじょづだね」

「ん、そつか？」

「いままでしてもらつた中でいちばん氣持ちいいよ
人間生活してる時に少しだけ習つたことがあるからかな

「それは良かった」

「今度はまつり下のまつをおねがい」

「トツーと、肩じゃなくて背中だな」

手を動かす

「あー……気持ちいい」

「これにこつたら今度からは休憩挟めよ」

「大丈夫、そしたらゼレカがマッサージしてくれるから」

「ふふっ、はいはい」

……今改めて思つたけど、この状況下手に誤解した奴が見たらやばくない？

「もうちょっと右」

「はこよ」

まあ、それはそれでいいけどさ

ハアーあ、今日も一日平和だなあ

肩揉み（後書き）

H「ティーンちゃん！聞いてください。」

デ「何をですか？」

H「最近、ゼレカが『零花』になつてくれないんで～～

デ「安心して下さい。例の番外編でやりますか？」

H「もう内密がまつてたんですか？」

デ「ゼレカに『零花』の格好で一日過ぐすつていう感じでほぼ決定しましたから。リクトストがない限りはこれでいいと想います」
H「一日ですか……それだけあれば、何でもできるわがします」

デ「まあリクトストがあつても、いつかはやさうと思つてたからやりますけど」

H「それなら、『あの時』の薬もよしごにしてくださいね」

デ「あの『マヒ薬』を？」

H「あの時はホントにゼレカが動けなかつたんですよ～」

デ「内容はヤバイから載せてないけど、やつとつ『あれ』でしたからね。なら用意しておきますね」

H「楽しみですね～」

デ「本当に、楽しい事にならうだ

出金レーベラクネー（前書き）

少しずつストーリーとして進めて行こうが、ほのぼのしたのが懶んでいます。

出会い～アラクネ～

「人間風情が図にのらないで」

「その人間に負ける気持ちはどうだ？」

「くつ」

……悔しいけれど二つのゆう通り

……もう負けを認めようか

「……みんな、ごめん……」

「お祈りは済んだようだな。ならーーー。」

目の前の人間が剣を掲げた

「終わりだ！！」

ガキン

「…………？」

おかしい

もう剣を振り下ろしている筈なのに

目を開けてみる

「…………！？」

……剣が折れていた

なんで？

「なつ！？」

「困るんだよなあ。勝手に魔界荒らされやが」

黒いロングコートが、風に揺られていた

「だつ、誰だ！？」

「誰でもいいだろ。今引き下がるつていうなら見逃してやつてもいいぞ」

「誰が逃げるか！俺は最強の勇者だぞ！」

「……最強になんの意味があるんだうつな」

私の前に現れたひとは小さく呟いた

「喰らえ！『天上展開斬』！」

「！？」

私が喰らったのと同じ技！

「逃げた方がいいわ！」

田の前のひとに書つ

「終わりだ！」

「ああー。」

あの斬撃は周りの地表を変えてしまった程の威力があるのー。

「……」

ピシイ

「ーーー。」

「はあつーーー。」

そのひとま、たつた一本の指ではとんで、止めた

「…………はあー、こんなもんが最強か？」

「ばかな…………」

『炎帝よ、嵐の如く燃え盛り傲慢なる者を焼き滅べせ。皇炎の風』ウイーンペニアル
ワインハイド

「ーーー。」

ボコオ ボコオボコオ

「何だー？何が起きてるー。」

「う、うわあーーー。」

「炎帝の怒りに触れたんだる。この辺りは火山活動が活発だからね」

シユウ一

「……」

何が起きてたのか、魔王の私にも分からなかつた

「立てる?」

「えー?あつ、はい」

差し延べられた手を掴む

「貴方は?」

「俺?俺は『ニンブルケティック』から来たゼレカ。一応は陛下の命で来た」

「エレスナーグが。助かつたわー」

「ということは、貴女がアラクネさんですね?」

「そう」

「陛下から助けに行くように言われましたので」

「今回ばかりはエレスナーグに助けられたのね。ありがとうございます」

「お礼でしたら、陛下に」

「エレスナーグの命令でも、私を助けてくれたのは貴方だもん。お礼を言わせてほしいは

「ありがとうございます」
チャン チヤチャチャチャンチャン

「あつ、と。失礼」

ピッ

「Hレス？」Jつちは終わったよ。……次？……うん、分かった

ピッ

「陛下から次の場所に行くよ」と言われましたので、失礼します

「あつ、ちょつ……」

テローン

空間が歪んで、さつきのひと……ゼレカはいなくなつてた

「……ふふつ、念話ぐらいで本性がでるなんて。……また会えるかなあ？」

消えていつた空間を眺めながら、私は言った

出会い～アラクネ～（後書き）

デ「重大発表」

ゼ「なんだよ」

デ「そろそろ後書きのネタが無いから、新しい企画を考えついたのだ！」

ゼ「どんな内容だ？」

デ「それは！」

ア「主よ、そろそろ主の所に行く時間だ」

ゼ「あー、そうか。悪いな後で聞くわ」

デ「それは……人物紹介だ！って、誰もいない」

いつもと違つ方向性です。

「ゼレカさん、いらっしゃいます?」

「こむけど」

「……お、脅かさないで下さるよ」

「あー、わるい」

ソルが俺の部屋を訪ねてたから、つい(ソレ)脅かし……後ろから声を掛けたくなったんだ

うん、何のフオローにもなってないな

「まあそれはそうと、この間の《ヒンブル》との同盟は結べました
?」

「ヒンブル……あー、ちょっと壁殴つたらすぐ同意してくれた
魔界の」

「……そのような結び方をしたので?」

「冗談だよ。《ヘルヴォート》って軍を蹴散らしたら、是非同盟を結ばしてくれって」

「……やせつヘルヴォートが……」

「ん?」

「いえ、何でもないです……」

「何でもなにひとつ言つたり深くは詮索しないよ」

「ありがとうございます」

「それよりも、そんな堅苦しく話せなくともここのは」。かひ結構長く……はないが。とにかく、もひと『恋愛』に話せば?」

「私はこれで慣れてしまつてるので」

「とかいこいつ、Hレスにはめちやめちや碎けて話しつるよな」

「Hレスとは前の代……」両親の頃から一緒にいるから、あの話しことに落ち着いているんですね」

「……あれは最早『落ち着いた』なんて生易しいもんじやなこと思ひがひな」

「とにかく、違和感を覚えてしまつんですよ」

「じゃあ、違和感がなくなるまで話せば?」

「……それは……つかつ……」

「ほひ試しに俺を呼び捨てで」

「こえいこですか」

「即答ー?試しにこいつて言つてゐるのに即答ですかー」

「こっ、嫌なものは嫌なんです／＼／＼

「あはははー、ソルが照れてるところ初めて見た」

「ゼリ、ゼリカ……やつぱり……恥ずかしい……です／＼／＼

言葉が紡がれる度に小さくなってる

「言えたみたいだね」

ソルの頭を撫でる

「うーん、子供じゃないんですよー／＼／＼／＼

「つひも俺よりは（人間界単位で）年下なんだから。嫌ならやめるけど？」

「……もう少しっこままがいいです」

ふふつ、素直だけど素直じゃないんだから

「ゼリカ～、ソル～。仕事があわらないよ～」

……事務仕事が終わらなくて困っているエレスを忘れてた、俺とソルであった

補佐と世話係の一コマ（後書き）

デ「それでは、宣言通り人物紹介です！」

ゼレカ・ハヅキ

魔神。黒髪。

左目が緑、右目が黒。

全ての属性の魔力を扱え、魔力の上限が膨大である。称号は『魔王補佐』『破壊の大魔』『空撃部隊隊長』等がある。

身長は168?ぐらい。

葉月零花

高校一年生。

髪の色や性格、声はゼレカと同じ（というよりもゼレカ本人）

ただし、目の色は両方とも黒。

魔神になる前のゼレカ。

ゼ「ん？ 初めは俺か」

エ「一人だけど二人紹介してるね」

デ「同一人物ですからね」

エ「でも、これでぜんぶではないですよね？」

デ「もちろん。ゼレカやエレスさん、ソルは何回か紹介しますから

ゼ「……あれか」

デ「次回は誰かなー?」

番外編『PV35000 ハーク5000 記念』
■花の一日 前(前書き)

やっと落ち着いたので書きました。

零「はあー」

ん?何でため息から始まつたかつて?

……仕方ないさ

起きたら身体が女の子になつてゐるんだもの

零「……」

幸い、子供になつてゐるわけじゃないからまだ良かつたけど

零「鏡の位置が少しだけ高いな」

とりあえず服を着替えて洗面台にいる

零「よつと、これでこつもと回じくらこだ

手頃な台を見つけてその上に乗る

零「……これからどうあるかなあ

エレスの所に行つたらゲームオーバーフラグだし、かといって部屋に閉じこもるのもいかがなものか

零「そうだー空撃隊舎に行ひー」

メ「空撃隊舎に何か用、お嬢ちゃん？」

零「……って、メフィストか。脅かすなよ」

メ「何で私の名前を知ってるの？」

零「それは、隊長だからさ」

何時ものノリで言つてみた

メ「隊長……隊長……もしかしてゼレカ！？」

零「そうだよ」

メ「えつ、でも……」

零「ちよつとした事情があつて身体が女の子になつてるんだ」

メ「へえー」

零「やーと、隊舎に行こうかな」

メ「……」

零「静かだけビ、ビウシふーき」

メ「ふつ、あはははーーー」

メフィストに向つてをつままれている

零「なつ、なにふるんあえふいふと（なつ、何すんだメフィスト）」「

メ「だつ、だつて面白いんだもん」

零「はなひえ（はなせ）」

メ「ふふふ、仕方ない」

パツン

零「全く」

メ「あー、おもしろかった」

零「隊舎に行くぞ」

メ「私も行く」

隊舎

零「わーわー」

ベ「…………誰だ？」

零「おーいーーー！」

ア「ゼレカさん、どうしたてちつちやくなつたんですか？」

零「気付いてくれてありがとうアスター」

メ「ベルゼブ以外は気付いてるけど」

ベ「…………眞面目に分からなかつた」

零「「ほんたわけは説明すると長くなるからカットで」

ア「……今、身体はどつなかるんですね?」

零「ギクッ」

メ「何時もど違つよね」

零「余計な事は…」

ア「えいつ」

おもいつきつ抱き着いてきた

ア「やつぱつ、女の子になつてゐるんですね」

ベ「…………」

零「ばれてるー」

メ「一目で分かると思つたけど」

ア「ふわー」

ベ「……起きたか」

零「……何か来る度にアラクネは寝てるな」

ア「あれ?ゼレカが少し小むこ?」

ア「女の子になつたんです」

零「アスターントそれは…」

ア「そーなんだ?」

零「あー良かつた、寝ぼけてる」

メ「そういうえばゼレカ。軍協会議つて何時だつけ?」

零「あれ? 明日か今日だよね?」

ア「今日じやなかつた?」

零「やつべ。じやあな『テレポート』」

零「あれ、会議は？」

ソ「会議は明日ですよ。日付が変更になつたとお伝えした筈ですが」

零「……」

回想

ゼ「じゃ、会議が終わったからいいぜ」

ソ「ゼレカさん、次の会議は八日後になりましたから

ゼ「八日後な、オーケー分かった」

回想終了

零「ああーそういうえばそつだつたな。会議がないならゆっくりできるし」

エ「ゼレカ、暇だったら後で部屋行つてもいい？」

零「構わないよ」

エ「書類だけ書いたら行くからね

零「あいよ、じゃ部屋で待つてるな」

自室

零「はあー、最近物忘れといつかど忘れといつか忘れぬ」とが多い
「ぜ」

トントン

零「どうぞ」

ガチャ

エ「まつた〜?」

零「全然」

エ「ゼレカに聞きたい」とがつて

零「聞きた〜」と〜

エ「あんまり大きな声ではいえから」

零「ん」

俺は自分の隣を指す

エレスが座ってるイスからベッドはそんなに遠くないけど、内緒話

ならこっちの方が近いからだ

H「よこしょっと、それで話しつてこうのは

そこまで聞いたらわけもわからず俺の口を塞がれた

塞いでいるのはエレスの口

エ「はつ……ん……ジユル」

零「ふつ……ヌル……ゴクン」

ん? ゴクン?

明らかに何かを飲んだ気がする

零「ん……Hレス、何飲ませ……?」

ガクン

そのままベッドに力なく倒れる

エ「ふふふ、作戦せこひ」

零「まさか……これって

エ「前に零花が飲んで動けなかつた薬だよ」

零「じゃあ俺をざレカつて呼んだのも…」

エ「モチロンわざと。ソルにも口止めしてあつたし」

零「はははー。ところでのあとは如何お過ごしで?」

エ「ふふつ」

零「ですよね」

……覚悟を決めろといつわけですか

零「どんな姿でも忙しく騒がしい一日だったなあ

デ「終わりましたー！」

ゼ「……殴らせろ」

デ「まあまあ落ち着いて」

ゼ「一発でいいから殴らせろ」

デ「身体だつて元に戻してやつたんだからいいだろ」

ゼ「……戻さなかつたら、俺の最強魔法で消し炭にしてやつたぞ」

デ「わあー、戻しておいてよかつたです。それはさておき、連載してから無事一ヶ月を迎えることができました」

ゼ「こんな駄目野郎につきあつて頂いて感謝です」

デ「口が悪くなつてきたなおい」

ゼ「どうだつていいだろ。それより聞こいつと思つたんだが、何である薬をエレスが持つてたんだ？」

デ「俺があげた」

ゼ「……『邪なる福音』」

デ「詠唱中失礼しますが、宣伝しちゃいます。次回も番外編です」

ゼ「……交わりし……」って、何時になつたら本編進むんだよ

「また企画物……ゼレカ、これは俺の中で会心の出来だと想つ
ぜ」「期待しないで待つてるぞ」

番外編『連載一ヶ月記念』いつもの違う魔王姫（前書き）

昨日は何故か接続出来なかつたです

番外編『連載一ヶ月記念』いつもと違つ魔王姫

「うん、まあ出来たる」

俺は今自室でチョコレートを作つてゐ

もともと一人暮らししだつたから毎日自炊してたし、菓子作りを趣味にしてたぐらいだから今でも時々作つてゐ

「後は保存して……ん? 保存?」

保存……ほぞん……ホゾン……あつ!

「やつべ、冷蔵庫の中に氷入れんの忘れてた」

鞄の中の氷を持つてキッチンに向かう

「ゼレカ、何かおもしろいことない?」

ゼレカの部屋にきてみたけどゼレカは居なかつた

「むう~、ん? 甘いかおり」

机の上にチョコがならべてあつた

「ゼレカが作ったのかな?」

甘いがおつに綺麗なかたち

「……食べてみてもだいじょうぶかな」

一番ちりこれこのを取つて食べてみた

「はむり……おこしーー。」

わい一 つだか……

「ぱく……」

「ふう、あつぶねえーー。」

あの氷は溶けるひとんでもなこいとこなぬからな

ガチャ

「ん、エレス。来てたんだ」

ビクッ

「ひーーあ…あの……」

「じひしたの?」

「な…なんでも……ないです」

……明らかに何時もと様子が違う

「あ……あの、ゼ…ゼレカさん」

1
ん?
」

『新編和漢書』

- ?

「もしかして血が飲みたいの？」

「ひつー、」『あんなセー！無理な事言つて……』

「……エレス、チヨコ食べたでしょ」

「うん……なれど。おこしめただつたんで……」

「いや食べたのはいいんだけど、ブランデーが入ってるのがあったから」

「ブランマー……だから酔つてるんですね」

「酔つてるって……もしかしなくても性格変わってる？」

知らなかつた。酔うと性格変わるんだ

「あ……あの……」

「ああ、血が飲みたいんだっけ」

俺は人差し指の先を噛んで血をだした

「はい」

「失礼します……」

Hレスは少し怯えながら俺の親指と手の甲を持つて優しく舐めてる

……いつもは人差し指をそのままくわえて吸うように飲んでるのに

「はあ……ん……」

皿を開じてビクビクしながら少しずつ舐めてる

……ヤベエ。めっちゃ可愛い

めちゃめちゃにしたくなるくらいヤバイ

「はあ……クチコ……と……止まつましたよ」

「終わった?」

「はい……ありがとうございます……」

……ああ。終わっちゃったのか

「Hレスが酔うと性格が変わるなんて知らなかつた」
「酔うと何故か回りが怖くなる気がして……」

「ふーん」

そのままHレスにキスした
いつも「トライーPではなくフレンチで

「あ…ああああの、ゼ…ゼゼゼカセ…－－／＼なこじ…」

「こつもの」とじやん。今更だよ」

「ですか？」

キスだけで顔真っ赤にしてる

そのまままくづくベシズ」押し倒す

「ひあっ…わ……私、そのままゼレンカさんご食べられひやうんです
か？／＼／＼」

うの血が騒いだのが限界寸前だ

「今の君とでもやられるけど、震えてるからそんなことしないよ

「「J…「Jめぐなさ」」

「謝る必要なんてないさ。それよりも、一昨日の夜は俺に痺れ薬を
飲ませて俺の上で激しく動いてたのに、今の状況が怖いなんてね」
「／＼／あれは……こつもの」とですか、今とは違うんですけど」

「やうなの？」

「わうなんですかー。」

俺もエレスの横に倒れる

「ビクンー。」

「いのまままざつと西たら、慣れるかな?」

「か…顔が近い…です」

「震えてる君も可愛いよ

「／＼そ…それじゃあ、抱き着いてもいいですか?」

「顔が見れなくなっちゃうけど、いいよ」

「それでは……」

俺の胸に顔を埋めた

「いのまま寝けやいなよ」

「へ…変な事とかしないで下さこね」

「安心して寝ていいよ」

「スウ…スウ…」

酔つたせいなのか、言い終わるか終わらないかで寝息をたてていた

「ありや、あんなに警戒してたのにあつそり寝たって事は性格変わつても俺を信頼してくれたんだ」

……ありがと

そして俺も意識を手放した

「ふつああー、あれ？ 私……」

「ん、起きた？」

「おはよひゼレカ。それより何でゼレカの部屋で寝てたの？」

「覚えてないんだ」

「え？」

「昨日の君、とても可愛かったよ」

「ん~覚えてない」

「いいや、覚えてなくとも」

「貴方がそういうなら……ねえ、今日はお料理おしあいでよ

「いいよ。じゃあ着替えるからキッチンで待つてて」

「わかった」

外にでていったエレスを見て、昨日のエレスを想い出す

「どうでしたかゼレカ？」

ゼ「うん最高。あんなエレス見たの初めて」

デ「次からは本編に戻ります」

ゼ「戦闘シーンもバリバリありますよ」

デ「それではこの辺りで。……疲れた」

連合会議（前書き）

構想を練るのが楽しいです

連合会議

「では、魔界連合会議を始める」

「今回の議題は……」

ああー急い。今はエレスの付き添いで連合会議に来てる

空撃部隊の皆も魔王か付き添いかで全員揃ってる

一応空撃部隊といつても、単なる飛行隊ではない。時空間にまで衝撃が届くことからこの名前がついたらしい。とりあえず説明してみました

「…………とまあこれを如何に処理するか?」

「私達が片付けてもいいですよ」

「…………その程度なら自分達でも処理できるだろ」

「わあ、兄妹なのに言つてることが真逆。流石としか言えないゼベル
ゼブ

「……」

ほり議長も黙つちつたよ

「……異論が無ければ決まりだ」「さて、大魔王よ。お前には『紅

月の荒野』を調べてきてもいい?』

「……『紅月の荒野』?聞いたこともねえ場所だな」

「本来なら魔王しか入れない場所なのだが、何者かが侵入した形跡があるのだ」

「貴殿にはその調査を頼みたい」

「……アスター、どうする?」

「私はいいよ~」

「行つてくれるのか。それでは……」

しかし、うちの『二ンブルケティック』をはじめ合計十ヶ界の魔王が手をくむなんてな

……その内三つはうちと友好関係にあるけど

「誰が処理してくれるかね?」

『……』

ボソッ

(エレス、今何決めてんの?)

(『地獄海岸』の魔物の退治だよ)

(『地獄海岸』っていうと……ああ、『フルーリードロ』のか)

『フルーリエドロ』は議長……マクステリアの世界だつたな

「議長、自分で行つたらいいじゃないですか」

「なつーー？」

「あんただつて魔王なんだからそのくらいはできる筈だ」

「……同感だな」

「あの程度の魔物ならあんただけでも十分ですよ」

「…………そなのか？」

「おやじくは」

まがりなりにも魔王なら大丈夫かな

「ならそれはおいといて……」

『……』

『ーーー』

ガタッ

「ん、どうした？」

「俺いくよ」

「そう? 結構な数いるよゼレカ」

「アラクネ、俺が負けると思つか」

「ううん、『あの時』みたくかつしょくへ倒すと思つか
『じゅ皆Hレスのこと頼んだよ』

「氣をつけてねゼレカ」

「行つてきますHレス」

剣を一本創造して跳んだ

連合会議（後書き）

「それでは今回は人物紹介一人目エレスさんです。」

エレスナーグ・デルト・ネメス・ニンブルケティック
白の強い水色の髪に紅い瞳の魔王兼魔王姫。
とある事情があり兼任している。

争い事が嫌いで、城や城下街の住人達の評判も良い理想の魔王。
ゼレカとソルからはエレスと呼ばれる。

エ「まだあまり力を使つていませんが、魔王です」

ゼ「その実力は魔王の中でも上位ランクに入る程だからな」

デ「補足ありがとうございます。補足ついでに前回の補足をしておくと、エレスさんが『血を飲んで酔つ』のと『酒で酔つ』のは別の酔いですか
らお間違いなく」

激突（前書き）

久しぶりの本編です

激突

「おー、随分な数だな」

テレポートで跳んだ先は会議場所から少し離れた荒野だった

「数は……一万……いや、一万二千か」

大した強さじゃないが一つだけ気になることがある

…………普通じや有り得ない魔物達の『統率』だ

「グルルつ！」

「グワア……！」

「キヒッ！」

俺という邪魔者を察知したみたいだな

「それじやあいきますか」

一対の剣を構えて突っ込む
ザクツ

グシャ

ベチャツ

右の剣は闇を、左は雷の魔力を込めて振るう

「ガアツ！！」

「キシヤア！」

「ちつ」

斬つても斬つてもきりがない

「怠惰の光よ、雨となり風となり抗うものたちに注がれる。
人形、孤独の時計、交わりて先を見よ！『墮落の雨』
ザアー

身体を蝕む雨を降らせた

「ガガア？」

「クエ！？」

魔力の弱い奴はこれで動けない。強くても身体能力が低下している
「これでっ！」

さつきより動きの悪くなつた魔物達を浄化していく

「あと三千……！」

黒い液体が飛び散る中で確かに『見えた』

左目が『それ』を捉えた

ガキイン

「ふん、全く無礼な挨拶だな」

「アシユラー！てめえ！」

『それ』は俺が見たことのある、首元まで伸びた金色の髪に全てを見透かす様な黄色の目、身体を覆っている白い服に……背中から生えた『白い翼』……

「まあそれはいいとして、ゼレカよ。そんな姿じゃ私は倒せないぞ」

「黙れ！テメエにとやかく言われる必要はねえ……！」

「ふつふつふ、今のお前は良くて魔王だ。そんな力で大天使であるこの私に勝てるわけが無かる！」

「……一つ聞く。『あのやうひ』は何処だ」

「あの方の居場所？ああ、何処だろうな」

「答えないならお前に用は無い。消え失せろ」

瞬間に『墮落の雨』が降り注ぐ場所から魔力を取り出した

「汚れし魂、その罪を償つ術^{すべ}行使したまえ。知るべき理は我の言葉。『冥界の振り籠』ハデストケージ！――」

有りつけの魔力を注ぎ込んだ上級魔法を放つた

パリーン

「ここの程度か。ガツカリだよ」

「ふつ、かかつたな」

「？」

「弾け飛べーー！『暗黒の樂園』アルチエゴテン」

さつきの取り出した魔力を全部注ぎ込んだ俺の禁術だ
雑魚魔物でも九千体分の魔物の魔力を集めたんだ

「…………消えたか？」

「あつぶない危ない。ホントに消し炭になるかと思った」

「…………馬鹿なーー！」

無傷だとー？

「ふつふつふ、残念だつたね」

「…………くつ」

「だから言つただろ。『あの姿』になれと

「いりぬせえーー！」

「…………興ざめだよ。ここの程度の器なんてね」

「…………」

パチンつ

「帰る」

魔物達の統率を解いてアシユラは消えた

「…………」

『あの姿』か……

「…………」

そして会議場所に跳んだ

激突（後書き）

デ「今日は誰も居ないので何もする」とがありません」

ア「我だけ居るぞ」

デ「うわっ、ビックリした！」

ア「主と主の主は会議、ソルーティア殿は城の警備にあたつてるのでな」

デ「説明ありがとうございます。だったらアルフォートの紹介する？」

ア「今は誰も居ないからつまらないぞ」

デ「なら……寝るか

ア「そうするか」

怒りを表に（前書き）

スランプ注意報がなりっぱなしになりました。

……細かい部分が浮かびません。

怒りを表に

「ただい……ま？」

戻つてきたら凄いことになつていた

エレスが魔王化してマクステリアに剣を向けていた

よくみればマクステリアの足もどが溶けたり焦げたりしている

「…………何があつたんだ？」

「…………イロイロな」

アラクネとメフィストも魔王化していた

大体の想像はつく

「…………エレス、止めなよ」

「ゼレカ！？戻つてたの？」

「今な。場所も場所なんだから剣をしまいなよ」

「…………うん」

スチャ

「とりあえず魔物は処理しといたから」

『…………』

眞口を覗きこしたままだ

「…………どのぐらいだつた?」

「一万一千体」『一一.』

うちの同盟の奴以外は皆驚き、同盟の奴は毅然とした態度をとつて
いた

「そうだ、悪いなベルゼブ。行つた場所多分『紅月の荒野』だと思
う」

「……別に構わない」

「ちよつとからんでた事情が事情だつたんでな。それと……」

「…………いい加減にしろ『夢幻』よ……」

議長……マクステリアが怒つた

「――悪魔がそんな態度をとつていてと思つてゐるのか――」

怒りの中に恐怖が混じつてゐる

……Hレスに剣を向けられたのがそんなに怖かつたのか、それとも
俺にびびつたか

「全く、お前達より前世代の……」

メフィストもアラクネもベルゼブもアスターもエレスも怒りを表に一斉に『魔王化』ないし『大魔王化』をした

「魔王のほうがよつぼぢ…」

そこまで言いかけてマクステリアは言葉を紡げなくなる

皆も一步動かず啞然としていた

パラパラ

「おい、それ以上ふざけた事吐かしゃがつたら消し飛ばすぞ」

俺の魔力を流して回りの空間を支配した

「お前には関係ねえだろ。あんまし調子乗ると連合破棄して跡形もなく潰すからな」

更に濃い……視覚化できる程の魔力が空間を覆つ

「今からだつてやれるんだからな。テメエの命は俺の手の上だ」

今俺を見ていると、俺の後ろに大量の蛇やら鬼やらの幻影が見えるはずだ

「…………返事はどうした」

「…………はつ、はい！！」

この世の物とは思えない恐怖を味わつただろうつな

「…………ふん

魔力をといた

「じゅあ帰るつよ皿」

「…………え、うつうん」

飛行艇に向かう

帰路の廊下

ちよつと魔力使いすぎたからテレポートは使えない

『…………』

「ん？皿どうしたの」

「…………あなたがあそこまで本気で怒るなんてな

「いやあ、あれは怒つても文句ないだろ？皿の事情を知らないつべせに知つたようなこと言つたから」

「…………確かにな」

「ゼレカさん怖かつたですよ」

アスターがマジで震えてる

「ははは、「メン」「メン。ホントは眞には見えないよつ」と
思つたんだけ、つい力が入りすぎた」

「ホントにやべくとしたわ

「やうだつた？ てゆーか眞本氣でビビつ騒がれ

「……あれは俺でも恐怖を抱いた」

「大魔王なんだから怖くないはずだよ」

「心が折れるかと思つた」

「メフィスト、『ゴメンね』

「直視してたら危なかつたかも」

「じゃあ今頃あいつはまづいかもね」

「……ゼレカ、ありがと」

エレスから感謝の言葉が紡がれた

「あの時の私達の怒りをゼレカが晴らしてくれたから……だからあ
りがと」

「いやいや、それは俺の台詞。俺がいない間になんか言われたから
剣を向けてたんでしょう？ メフィストもアラクネも力使つたみたいだ
し。ありがと」

「ゼレカ……」「あら、気付いてたの？」

「ばれないとつたのに」

「アスターとベルゼブも他の奴を抑えてくれてありがとう」

「……」

「よかったです。何時ものゼレカさんに戻ってくれて」「はは、俺はもう戻したつもりだったんだがな」

……Hレスにはアシュラに会つた事は言わなかつた

余計な心配をさせない為に
そして……『あの事』も

怒りを表に（後書き）

ゼレカが魔物退治に行つた後

「魔物？そんな魔力は感じなかつたけど」

「それよりもニンブルケティックの魔王よ。そなたはあんな『ただの魔物』をそんなに信じているのか？魔力が他の魔物より強いだけではないか」

ゼレカを悪く言われて『魔王化』しようと思つた

「じゃあ、その『ただの魔物』よりも弱い貴方は一体何なのかしらね」

「魔力だけで全て決まるなら、貴方は魔王にはなつていないとします」

アラクネもメフィストも私と同じ気持ちみたい

「ふう、あまり議長をいじめるのはよくないと想つよ」

「全くだ。お前らは戦争の申し出に着たのか？」

「……」

『ビクツ……』

ベルゼブが他の魔王を睨みつける

アスターも魔力を抑えてる

「止めないか。……それで、どうなのだ？」

「……私は彼を信頼してるだけ。力なんてかんけいないです」

自分の思つてる事を話す

れつきの間にふたりは魔王化してた

「それは『禁術』を使つたかいがあつたな。ただのいけ……」

「一。」

そこまで言われて無意識の内に剣を抜いていた

「……なつ」

魔王化もしてただ一言

「ゼレカは……ゼレカは、『イケーハ』なんかじゃない……」

悪戯夢 望郷（前書き）

体内時計が狂つたのか、昼夜逆転しています

悪戯夢 望郷

「零花、何点だった?」

「お前は?」

「ふふん、梨絵に教えてもらつた成果がでて八十点ー。」

「俺九十五」

「負けた~」

「もう、…………。私が教えたのに負けてビリあるの」

「じめーん梨絵。負けちゃった」

「零花、どうだった?ちなみに俺は七十だ」

「英司、お前 にも負けてるぞ」

「…………にもー?」

「田標は零花だったでしょ?」

「英司には勝てたー!」

「むぐつ」

「梨絵はどうだったんだ?」

「貴方と五点差」

「 ようあるて満点だる 」

「 わうとも言つわね 」

ガラガラ

「 おはよつゝぎこまーす 」

……おいおい、もう授業終わつたぞ

そいつは鞄も置かずに俺のところに来た

「 零つ花一 例の物は? 」

「 ……多矩夜^{たくや}、せめて鞄置いてから来いよ 」

「 細かい事を気にしてちゃ人生つまんないぜ 」

「 ……はーはー 」

「 それよーりも、持つてきただろうな? 」

「 ほらよ 」

「 ふおつほー ありが… 」

「 その前に、報告してからな 」

「 わかった、すぐ行つてくれるー。 」

多矩夜は全力で教室をでていく

「 はあ、クラス中の注目の的じゃねえ 」

「まあまあ。いーだらけのぐらー」

「俺はお前みたいに脳みそまで筋肉じゃねえの」

「誰が筋肉だ！見た目じゃもやしみたいだろ」

「自分で言つて恥ずかしくないの？」

「梨絵、多短夜は自虐趣味なんだからあんまり虚めてやるなよ」

「あー、そうね」

「おこー！天才！」ハラハラめー、 も何とか言つてくれよ

「えーといいがあれでこれが……」

「真面目な娘は見直しちゃるー。」

「ふふっ、ほほほー、やれやれ、毎日が楽しいや

『……………残りフツカ』

「…………またあの夢」

田を覚ますと見慣れない天井だった

「あれ？」『は……』

「田、覚めた？」

「メフィストか。俺どりしたんだつけ
「覚えてないの？」

「…………時空船に乗つたとこまでは覚えてる」

「その後すぐ倒れて驚いたよ」

「まあ、あんだけ魔力使えば倒れもするだろ」

「全く無茶ばかりして……」

「心配かけたな。今はどの辺？」

「深航路に差し掛かつたあたり」

「…………最航路までに魔力を回復しておくか」

「それはベルゼブがやつてくれるって。そのかわり、『…………ゆつく
り寝てる』だつて」

「ふふ、わかった。じゃあお言葉に甘えて寝かせてもらつか……」

言い終わるか終わらないかで意識がとんだ

ゼ「今日は『トイン』が居ないから適当に進める事にする」

H「『トイン』さん居ないんだね」

ゼ「なんか急用があるからさしつけで行かせて」

H「じゃあ何する?」

ゼ「んー、吸血魔王について説明するか」

『吸血魔王』

吸血鬼の上位種。

黒血を吸って生きながらえるが、赤血を吸う事によって黒血を吸う必要がなくなり魔力を回復させる事もできる。魔王化、吸血等ができる。

ゼ「軽く説明するといふんを感じかな」

H「まだほそくする必要があるから完全な説明じゃなことよ」

眼鏡（前書き）

『眼鏡』と書いて『めがね』と読む不思議

「…………あれ？ 寝てた」

「んーと、書類があまりにもあつたから処理しようと思つて……
「ああ、そつか。書類片付けてたんだっけ」

「ゼレカ～、寝てたでしょ？」

「寝てたみたい」

眼鏡をかけて書類に目を通す

「まだまだ終わらないよ～。このままいつまでもいいだって」

「会議行つたりさぼつたり逃げたりしてたからしちゃうがないよ

「最初以外はみみが痛いです」

「会議はしようがないとしてもサボりはなあ……」

「さぼつたわけじゃないんだけどね」

「よつと、残り半分」

「もう半分…? はやくない?」

「書類なんて内容を隅々まで目を通してサインすれば終わりなんだ
から簡単ですよ」

言いながらサインしていく

「それが面倒なの

「たしかにこれだけ数があると面倒だけだ

「だ～か～ら、そろそろきゅうぱいこじょいよ」

「まあ、俺は少し寝てたけど働きっぱなしだからね。じゃあ休憩にしますか」

「はあー。やつときゅうけいだよ」

「……………」の量なり今田中には片付けられるね

エレスがこっちを振り向く

「ゼレ……カ?なあにそれ?」

赤紫のフレームの眼鏡の事らしい

「ん?これは眼鏡。下界にいた時に使つてた物だよ」

基本悪魔は皆視力がいいから、こいつのは使わないらしい

「度もゆるこのを使つてるから誰がかけてもあつと思つよ」

「へえ～……」

おおつじ。お姫様は眼鏡に興味深々のようだ

「かけてみる?」

「いいの?」

「 もひるさん

俺が見たいっていつのもあるし

力チャ

「 どう?似合つかな

「 ……」

眼鏡をかけて上田遣い。その可愛さ殺人級である

「 とも良く似合つてるよ。いつもとは違う可愛さがある」

「 も、そつかな／＼／＼

「 よければあげるよ

「 え? でも……」

「 造ればあるし、君が持ってる方が似合つからね」

「 ありがと、ゼレカ」

「 いえいえ、それよりも残りを片付けよつよ

「 もうきゅうつけい終わり?」

「 終わったら肩揉んであげるから」

「……それだつたらいいかも」

眼鏡の威力半端ないですよ

眼鏡（後書き）

デ「ふふふ、私は帰ってきた！」

ゼ「随分と早い帰りだったな。予定では後もつ丸一日かかる予定だつたろ？」

デ「一日中安静にしてたら思いの他早く回復したらしく」

ゼ「全く、そんなになるまで我慢してんじゃねえよ」

デ「我慢というか気づかなかつただけだけどな」

ゼ「はあ、作者が帰つて來たので更新できるようになりました。今後ともよろしくお願ひします」

デ「次回分はソルの紹介をします」

諸々（前書き）

ジメジメ空気が辛いです

諸々

「……」

鏡の自分を凝視している

「やつぱつオッドアイは目立つな

左目が縁つてこうのが気になる

マムートから貰つた『夢幻の眼』だけど、一回……だけ使つたな

とにかく、今度使ってみよ」

「ゼレカさん? こませんか?」

「後ろにいるよ」

「…………もう驚きませんよ」

「なんだ。もう慣れたか?」

「いえ、それよりも時空船が損傷していたので修理をお願いしたい
んですけど」

「…………ああー、うん。じゃ直しつくわ
多分、深航路の時に傷ついたんだるうな

時空航路の深航路には『パニックリスト』が住んでるから仕方な

いつちや仕方ないんだけど

「そうだ。言い忘れてたけど城の警備お疲れ様」「いえいえ、警備
といつてもアルフォートさんと城の中に居ただけでしたから
「それでも安心して連合会議に行けたのはソルとアルフォートのお
かげだよ」

「信頼されますね」

振り向いて格納庫の方に歩きながら答える

「もちろん。貴女が信頼してくれているように」

格納庫
「結構浅いな」

率直な感想がそれだった

今までパニックリストを片付けてたのは俺だったから、ベルゼブ
が倒せるか心配だった

別にベルゼブが弱いってわけじゃないが、……あの巨大なタコみた
いなのは初めて相手にすると結構手こずるからな

「……そこ……後は……つと」

修理を終わらせて戻る

「あつゼレカさん」

「暇になつたから適当な依頼を請けにきた」

「ランクはいくつですか?」

「もちろん最高ランクで」

「んー、現在の最高ランクですとい級の『マグマアーラ』の排除』だけですよ」

「マグマアーラか。熱いのはやなんだけ困つてゐなら手なすけてくるか」

「また魔物を連れてくるんですか?」

「街外れの牧場……『フロワーハウス』で育てるから大丈夫でしょ」

「たしかに依頼の内容は排除ですから連れてきても大丈夫ですけれど……」

「じゃ、これで決める」

「受理完了しますね」

諸々（後書き）

デ「予告通りソルさんの紹介です」

ソルーティア

髪と瞳の色はエレスと同じ。

エレスの世話係。

普通の悪魔より魔力が大きく、扱える属性が多い。
エレスの親の代から遣えているが歳はゼレカより下。

ソ「久しぶりに出番があった気がします」

ゼ「確かに。最後に出たのって番外編の前だよね」

デ「話の向きがどっちにいこうか迷っていたのでなかなか出させてあげられませんでした」

ソ「今度からはもっと出番を増やしてほしいですね」

デ「多分次回はアルフォートを紹介します」

火山探索（前書き）

そういうえばタイトル変えました

火山探索

「…………あつし」

マグマドリフを探しに火山の中に入ったまではよかつたけど、ものすごく熱い

暑いを通り越して熱い

呼吸するだけで痛いし

「だあーもつ、歩くだけで汗がでるー。#とせんに集中もできやしない
……なんて言つてゐる子だ後の『氣配』に気づかない俺じやなこと
ザ」

「そつそとマグマドリフを倒せなやせんこけないの」「
『氣配』がどさどさ飛び込んでくる

後ろを振り返りながら戻つてみる

「…………何の用だ?」

「前にもマグマドリフの件の話だ。俺さびしこともあの竜の鱗
が欲しいんだ

それも同じような状況で

ん?どこかで聞いた覚えがある声だな

「……………シハイド?」

「ゼレカ！なんだお前か」「それまゝひちの台詞だ。どうしてマグマアリゴの鱗をとつにきたんだ？」

「いや、その、こつもマースには世話をなつてこなかつたアレギン
でもしてやりたいなーって思つたからねーーー

「世話になつてゐるからぢやなくて好きだからつて言つたまえよ」「そ、そそそそんなんわ、わけわけないだろ」

「バレバレの動搖どうもです」

「そ、それよりお前は何しに来たんだ？」

「暇だから何か狩ろうと思つて」

「…………マグマアドリアコリで、ギルドジエラランクの魔物だろ?」

「俺ランクとか関係ないもん」

「…………… そうですか」

「つーかドラコいなくね？マグマの中覗いたけどいなかつたし」

「マグマの中にはいないぞ。奴らは溶岩に擬態して逃げ場をなくし

「道理でさっきから足場が動いてるおもったてから獲物を喰らう習性があるからな」

「…………え？」

「いや、だから足場が……逃げ場を絶つてから獲物を喰らひつけ」

「ああ」

「ふーん」

『…………』

足元に指を指す

「ん？」

「うん」

それにショイドが頷いた

「あれ？こんな大きかつたつけ」

「デカイのはこのぐらいこの大きさだ」

「…………とつあえず鱗採つとけば？」

「やうだな」

ショイドが鱗を探つてる最中も暴れる気配がなやむつだしな

「…………よし、つと」

「採れたのか？」

「ああ、これだけあれば指輪が造れる」

「婚約指輪？」

「違ひつづけの…」

「結婚したっていいんじやね？互いに好きなんだから」

「…？」

もつま葉がでてないな

そんなに恥ずかしいのか？

火山探索（後書き）

ゼ「それでは予告通りアルフォートの紹介です」

ア「何をしているのだ主？」

ゼ「ディンの奴に『たまにはゼレカが進行役やつてよ』って言われたから仕方なく進行役やってるんだよ」

ア「我的紹介だつたな」

ゼ「無視するな無視を」

アルフォート

決まつた姿をしてないが、いつもはひとがたで銀色の服に銀色の髪、

銀色の瞳と肌以外は銀一色である。

ゼレカと契約するまではナブラート村の祭壇に埋もれてた。
シェイドとは兄弟。

炎竜の幼体（前書き）

前書きに何を書こうかなー

炎竜の幼体

……おかしい

「これだけ騒いで暴れているのに、全くと黙つていいほど補喰する意
思がみられない

「どうしたゼレカ？」

「やつと言葉が出たか。喋れるようになるまで待ってたんだからな
お前が変な」と叫びながら……」

「やつと言葉は聞こえないふりをするとこで、眞面目に敵意を見
せてこない

「……？」

『』

「やつぱつやうか」

「何だつて？」

「簡単に言つと『私達は今逃げている最中ですが、成体はともかく
幼体はとてもひとりでは逃げられません。保護してもらいたいので
す』と言われた」

「あの短い言葉の中にそこまでの意味があるとはな。自分に驚かな
いって驚いてただろ？」「

「まあ一番驚いてたのは、『私の言葉が分かるんですか！？』だつたけど」

「ああ、そっちか」

「……？」

『…』

？

『…』

？

「どうだった？」

「今は『マグマードラ』の大移動期だから、次にここに戻つて来るまで保護してあげるって言つといた」

「それで？」

「『ありがとうございます！』私達は悪魔から危険視されますが、迷惑はかかるないですか？」って言われて俺は魔神だと返答したら

…

「ストップ！！簡単に魔神だとばらすな」

「大丈夫だよ。ともかく、『それでしたらお願ひします』と言われたらマグマードラの幼体を引き取る事にしたから」

「どうで育てるのか見当はついてるのか？」

「フラー・ハウス」

「フラー・ハウス……大丈夫なのか？あそこはアランクないしランクの魔物達が住家にしている所だぞ。よくお前も魔王もどうとかしようと思わないな」

「それは俺が管理つか、俺が創った場所だから何の心配もない」
「……うん、もうお前が神だつて言われても疑えない」

「魔がつくけど神ではあるからな」

なーんて話してる間にマグマドラゴン連れられて『巣』のような場所にたどり着いた

『

』

『ピィィイイ』

』

そこには炎が小さく形どった竜がいた

「……こつが……」

『『炎竜の幼体』……マグマドラゴンの中でも一際潜在能力の高い幼体か』

『……夢幻の遣魔よ。汝に任せらるべ』

『……』

「何だ、俺の言葉が分かつのか」

『汝達の言葉は遙か昔に覚えていたのでな』

「遙か昔……か。お前は一体どのくらい生きてるんだ?」

『確かに……何千年单位だったな』

「何千年で……」

「まあ、それよりも」

幼体に近づく

『ペペイ』

「確かに保護したからな」

『ありがとう……』

炎竜の幼体（後書き）

デ「いやー昨日は助かったよゼレカ」

ゼ「全く、俺に押し付けやがって」

エ「そのわりにはやる気があつたよね」

ゼ「頼まれた事は全力で取り組むのが俺の信条だからな、と言つて
みる」

デ「照れなくていいぞ」

ゼ「照れてない」

夢の中？（前書き）

久しぶりのラブチュッチュ話です

いやー、甘いです

夢の中？

「いつの間にか夜になっちゃったな」

フラワー・ハウスの世話係であるバルチスに『マグマードラゴン』の幼体を預かったから』って言つて置いてきた

だから安心して城に戻れるってわけだ

……まあ『ちょっとゼレカさん！これ以上僕の仕事を危険にしないで下さいよ！』という声がした気がするけど、気にしたらまけだよね

城・露天風呂

「ふうー」

ああ、気持ちいい

汗はかくは体は痛い（熱氣で）はで大変だったあ

「……シェイドの奴、喜んで貰えたのかな？」

あれからふたりで街まで戻つて、あいつはマリーヌの所に、俺は報告に別れたからどうなつたのか知りたいな

「いやー、若いいつていいね」

とは言ひても俺もまだ高校生だけぢ

「…………

ハツ！寝かけてた！

心中ではイロイロ思つてゐるけど『せしむ』ではないから、『ゼレカ
さんてあまり葉つませんな』と言われることがある。心では葉り
まくんですけど

「そろそろでるか

ぱちゅ
や

ガラガラ

自室へ続く廊下

やはりこの時間じや警備隊ぐらうしかいないよな

当然つちや当然だけぢ

とゆーか、警備隊の隊員て何時休んでるんだろうか?
ガチャ

電氣もつはずにベッドこいつ

流石に疲れた

「…………

よくよく自分のベッドを見ると、何故か膨らんでいる

それはそつと、朝起きた時も毛布に魔力を染み込ませた覚えはない
し、風系の魔法を使った覚えもない

……大体の、いやほほ絶対と言つてもいい程予想はついてるけどね

「……」

ブックライトに手をかける

力チツ

本を読む為のライトだからそんなに明るくはないが、何があるかを
知るために十分すぎる

やつぱりな

「寝ぼけすきだら……Hレス」

小声で囁く

「…………ん? ゼレカがいる? まだ……夢かな」

「もうだよ。まだ夢の中だよ」

「まだ夢? ジヤあ起きたらゼレカいる?」

「ちひひ。でも、もう少し夢の中こよひ」

「うそ」

そのままHレスを正面から見える位置に移動する。その体勢が押し倒したような格好になつてゐるけど、まあこれは『夢』だから

「…………クチュ…………ジユル…………」

「ん…………あ…………あふう」

「…………は…………Hレス、いつもと違ひにしてみていい?」

「こつもつていうか、起きてる時でしょ?」

「そうだったね」

「痛くない」とだつたらいいよ

「そんなことはほんこせ」

と言つてHレスの服を前だけあける

ああ、心配なく。見えてる部分はないから

「ん、ゼレカ――」

「ペロッ」

「ひあつ――」

鎌骨にて舌を這わせる

「ん…………は…………あ――」

「ペロペロ」

「恥ずかしい。」

「う、うなじられて恥ずかしくな ragazzo」

「やれやれだね」

「むら、現実でも夢でも意地悪して」

「ふふふ、ネローン」

「（クッ）ん。」

「まひ、あなたが覚めてもここ

「じやあ……あなた起きてるぞ」

「うそ、やあ

「おやみじやないで……おやみだい……」

「やうだったわ

そのまま寝つけたみたい

「ふー」

「俺まで……なつて……された

「…………おやみ」

「ん」

「おまめい、Hレス」

「ゼレカ、おはよう。今日は夢にゼレカができたらよ」

「君の夢に?」

「うん。…………ちょっと積極的だつたけど——」

「くえ、夢でも君に会つてたんだ。どんなことしてたの?」

「……鎖骨……——」

「鎖骨?」

「な、なんでもないよ——」

「ふふふ、もう覚めてこ——」

「……ゼレカ」

「まつせは、じやあ俺はりまつと出かけるか?」

「ちよつ、ゼレカーあれ夢じやなかつたの?」

「まつせは、」

夢の中？（後書き）

「はは、ちょっとした事情があつてゼレカとエレスさんはいません。ということでバルチスの紹介だけします」

バルチス

いろいろあつてゼレカに捕まつた中級悪魔。

茶色の髪で緑の瞳。

身長はゼレカより少し小さい。

性別は男。

「えーと、バルチスです。一応ゼレカさんの部下です」

出合二～メフィスト～（前書き）

そろそろ田標の五十話です。

そういえばたまたまみたら、ゴニークが7777でした。

出会い～メフィスト～

「魔王様、人間達が攻めて来ました！！」

「第四、第五部隊で対処にあたらせて」

「民の救助は如何致しましょう！？」

「第一部隊を救助、不死部隊を囮にして、ぎりぎりまで持ちこたえて」

「うわああ！…毒された魔物だ！！」

「くつ

ザシユ

「今之内に浄化をすませて、早く！」

「はい！医療部隊、急げ！」

『ははあ…』

くつ、圧倒的に後手にまわったわ

大部分の部隊がいない時にここまで攻められるなんてまさか知っていた！？

でも人間がこっちの情報を得られる筈ないし……

「浄化完了しました！」

「救助完了しました！」

「よし、第三部隊は民の避難にあたつて。残りは人間達を追い返して、できるだけ殺生は避けてね！」

『はい！』

「全部隊突撃！」

『わあーーー！』

「これで一先ずは安心だわ

「魔王様、後ろ！！」

「えつ？」

後ろを振り返ると誰かが斬りかかってきた

ガチン

「くつ」

「…………ふーん、大した洞察力、判断力、瞬発力だ。流石は『ゲノ
ムルーツ』の魔王だ」

「……なんて重い一撃！？咄嗟に魔力で腕を覆わなければ確実に腕が
折れてた

「あ、貴方は？」

「名乗る程の者でもないですよ。ただ、貴女の敵ではないので御安心を」

「いきなり斬りかかってきて敵じゃないって言われて信じると？」

「それもそうですね。ではあの人間達を元の世界に帰しますよ」

「そう言つと、ロングポートを風に靡かせてる男は戦場の方に向いた

「転々とする鳥、かの者達を歸るべき場所に歸し給え。『強制転移』ストロングポート」

「

パチン

ショワ！！

「！？」

男が指を鳴らしたら人間達はいなくなつてた

「何したの？」

「安心して、殺したわけじゃない。自分達の世界に帰しだけだか

「ひ

「……『強制転移』。貴方も何処かの世界の魔王？」

「俺自体は魔王じゃない。ちょっと主の指示でこの世界に来ただけだ

れ」

「主ひて？」

『『』』の前の書類の返事はまだ?』 つて言つてましたね

「あつ!…そうこう」と

確かエレスナーグにそんな事を言われてたわ

「それじゃあ伝言も伝えたし、貴女の力も理解したし帰りますね」

「うん、助かったわ」

「いえ」

そう言つたと思ったら、もう何処かに消えていた

「あつ、名前聞いてなかつた」

出金レーメンファイスト（後書き）

街の民に聞いてみた

「ゼレカさん？強くて、謎めいてる不思議な方です」

「魔王様をいじめるのが好きな、ちょっと危ないひとですね」

「全身真っ黒の怪しいひと」

『「こんな結果だった」

ゼ「そう思われていたのか……」

幻惑・困惑・疑惑（前書き）

そろそろ番外編をやりたいです

幻惑・困惑・疑惑

「セヒト」

エレスを部屋に置いてさつわとでてきたけど、何しようかなー
さつきのエレスの真っ赤な顔、可愛かつたなー

「ん?」

おかしい……

この廊下のデザインも構造も全部同じだが、さつきから全く前に
すすんでないようだ

「……『眞実の瞳』」

『夢幻の瞳』を使う

するとビ絨毯に瞳が反応した

「…………分かってるんだぜ、ヴォルケノ」
なにもない筈の絨毯に声をかける

「流石ですねゼレカさん」

絨毯から赤い煙りが立ち上る

「あの程度の幻術では欺けませんか」

「ふつ、生憎と俺は脳や精神に作用する術や技は効かないからな」

煙りがひとの形を形成していく

「そうなのですか。なら私は貴方には勝てないです」

「よく言ひせ。お前の最も恐ろしい能力は…」

「すとつぶーそれ以上言わなくていいです。あの姿は好きじゃない
んですよ」

小さなロリ少女が言うと真実がますぜ

「それよりもアシコラにはいきなり斬りかかったのに、私には斬り
かからないんですね」

「俺はアシコラやアジラ、『あいつ』には恨みがあるがお前には
無いからな」

「あら……意外と冷静なんですね」

「種族で差別する、なんてことは好きじやないからな。悪魔にだつ
て下衆な奴もいるし、天使にだつて優しい奴もいるからな。もちろん
人間にだつて」

「…………強いんですね」俺に聞こえるか聞こえないかの声で言った

もちろん聞こえたけど

「強いわけじやないや。ただ、それぞれの個性をみてるだけだ」

「それぞれの、個性？」

「ああ。力の強い天使や魔力の無い悪魔がいても不思議じゃないさ」

「……」

「おつと、『めん』『めん』
「謝る必要は無いですよ。…………私は」

何かを云えよつとしている

でも躊躇っている田だ

そして意を決したように見つめてくる

「……私は『天使』なんですから」

「うふ、知っているよ」

「…………う、だね」

何処か寂しげに返事をしてくる

「じゃあ私ももう帰りますね」

「…………あ。またな」

「はい、また……必ず！」

そう言つて消えてしまった

「……………やつは似てるんだよな。あこひ」

幻惑・困惑・疑惑（後書き）

街の人聞いてみた

「葉月さんの息子さんは毎日毎日怪しげな事をしてますね」

「零花？はつ、きにいいらねえ奴だ」

「最近変な物音がして何やつているやう……。この間も異臭騒ぎを
おこしてたし……」

ゼ「つて、人間の時の評価も今と変わってねえ！！」
デ「実際は料理とか発明とかしてるだけなのにな」

懸戯書 機関の口論（複数形）

かうじゆこくわんをあらわしたいです

悪戯夢 撲れた口笛

「はあ……はあ……」

行かなきや

「はあ……くつ……」

行かなきや、監が

「はあ……はあ……」

早く、早く！

「あれ？ 皆帰んないのか」

「あつ零花。今日はそれやらなきやいけない事があるから」

「華かなえ姫以外はな」

「華姫衣に変な事しないようにね」

「しなじって。全ぐ、相も変わらず梨絵は心配性だな」

「親友として心配なだけよ」

「わうかよ

「わういえ、多矩夜は何処に行つたんだ？」

「…………ヒント、お前が渡した物

「ああ……」

「じや、またな」

「おひ、また明日」

華姫衣を迎えて教室に行く

「…………また、『明日』か

「…………英司」

「あひ零花」

「悪い、待つた?」

「ひひん、今来たと」

「ならよかつた」

「何だひつ?」

「何か胸騒ぎがする

「ねえ、零花

「なに?」

「ちよっと、話があるの」
そつまご机の上に座る

「話して？」

「…………もし、もしidaよ。もし……私が……零花のことが好きって
言つたら……どうする?..」

「どうするも何も、今まで気付いて無いと思ってた?..」

「え?..」

「どうか、英司にも梨絵にも多矩夜にも全員に気付かれてたよ」

「ええー!..」

「ふふ、俺も君が好きだよ。君と出合った時から、ずっと」

「何言つてんだ、俺

この空気に押されて本音がでちゃつたな

俺を呼ぶその声に照れと……悲しみの表情があるのはなんで
だ?

「…………零花ーーー」

「…………ありがと。零花、零花」

華姫衣の両手から涙がとまらなく流れ落ちる

「おこおこ、泣くなよ」

「零花、ありがと。……幸せ……生きて」

「?何言つて……」

バタン!

「…………」めんね零花、…………わよなり

「ハツ!」

華姫衣は何処に?

……胸騒ぎがする

「ぐつー!」

急いで走る

何処にいるか分からぬけど、とにかく走る

「華姫衣……英司……梨絵……多矩夜」

何処に行こうとしているのか自分でも分からぬ

だけど、足が勝手に進む

「はあ……はあ……」

『…………ラスト一日』

悪戯夢 壊れる日常（後書き）

城の使い魔に聞いてみた

「エレスナーグ様？魔王様はとても優しい方ですよ」

「民にも私達にも誰でも分け隔て無く接して頂けますし

「御側にいらっしゃれて幸せです」

「デ」「お前とは真逆の評価だな」

「ゼ」「当たり前だ」

出合い～アスター&モ・ベルゼブ～（前書き）

今回の話は視点を決めてないので地の文がないですよ

出金い／＼アスタート&アモ・ベルゼブ／＼

「姫様、次の謁見です」

「レイレイ、確かに私『困つてゐる民のお願いを直接聞く……』と言つたけど、『んなに多いなんて聞いてないよ』

「明日までですから頑張つてトセイ。それより次の謁見ですよ」

「むう～」

カツカツ

「どうも。お初にお目にかかります、ゼレカ・スタイルと申します。我が主より託された書状をお持ちしました」

「主つて？」

「我が主は《二ンブルケティック》の魔王です」

「ああ～Hレスの」

「はい。今回の同盟締結に賛成するとの事です」

「姫様、いつの間にそんな約束を?」

「ちょっと前に『敵対してゐわけじゃないし、同盟結ぶじゃね』って約束した」

「…………ですか」

「えっと、ゼレカだけ。書状を見せてくれる?」

「はい」

「では、私が受け取ります」

「いや、私が読むからいい」

「ですが…」

「私が読む~」

「…………わかりました」

「…………うんうん、…………よくわかった。じゃあ私がサインして同盟締結だね」

「よろしいので?ベルゼブ様に報告しなくても」

「魔王は私だよ」

「そうですね……」

「じゃあこれで同盟…」

「……待て、アスタノト」

「……ベルゼブ様……」

「うむ~どうしたの」

「…………同盟なんか結ばなくとも大丈夫だ」

「でもござつて時に……」

「……強いのか弱いのかも分からぬのに『いや』って時どうなるか分からぬだろ」

「……」

「……ふう、あんまし他の世界の事情に首突つ込みたくないけど、同盟を認めてもらえないか『幻想の大魔王』ベルゼブ」

「……俺を知つてゐるのか」

「そりや普段は表にでなくとも、『大魔王』なら魔力で分かるぞ」

「……お前誰だ?」

「俺はゼレカ・スタイル。『夢幻』のゼレカって言えば分かるかな」

「『夢幻』ー?あの男がー?」

「へえ~」

「それで、話を戻すけどさつたら認めてくれるんだ?」

「……そつか、『夢幻』か。……バハムートを殺つた……なら話しあ簡単だ。俺と鬪え」

「なつ、ベルゼブ様何おつしゃつて!?」

「ほお、分かりやすいな」

「……いくぞ」

出会い～アスタノト&・ベルゼブ～（後書き）

城の使い魔に聞いてみた

「とても冷静で忠実に主にお仕えする姿が、正に私達の鏡です」

「頼まれた事は最善・最速で処理する能力の高さ

「主様に負けず劣らず信頼が高いです」

ゼ「……」

デ「凄いな、ソルの人気」
ゼ「俺、何かした？」

デ「さあ？」

水浴び（前書き）

初めて原稿書いて投稿してみました

水浴び

「……暑」

「あついね」

「何だつてこんな暑いんだ？」

「今日は年になんかいかの『熱砂の流動』だから、地表のおんどが急激にじょうしょうするんだよ」

「年に何回かって、こんなのが何回もあるのか……」「そうだよ」

「……じゃあその度に今みたいになるってことか？」

「うん」

……『熱砂の流動』の度に一緒に水浴び、か

俺の理性&平常心がどこまで持つかな……

今日は暑いから露天風呂の隣に穴を創つて魔力（水）を流し込んで水風呂を造つた

エレスに「入れば？」って聞いたら「うん」と言つたから気に入ってくれて良かつた……と思ってたら、服を掴まれて俺も入らせられた

一応タオルをお互いに巻いてるから大丈夫（限度があるナビ）

「今更だけど田隠ししなくていいの？——」

「む～、ほんとビザンカはお風呂とかは照れるよね。部屋ではそんなことないのに」

「わつこつ君は俺とは逆だよね」

「つまり、ここならあなたを弄り放題 ついてじだよね」

「…………は？」

ガシツ

「つーかまーえた」

「ちょつ／＼／＼レス！？／＼／＼

いきなり肩を掴まれてエレスの方に向き直される

「ゼレカ、私のタオルはだけさせていい？」

「ま、ままあまあ待った、いつたたたいなな何を！？」

「ふふつ、やめた方がいい？」

何かを企んでいるだけ、やめさせないわけにはいかない

「もうひひひ」

「じゃあ、キスして

「え？」

格好が格好だから緊張する

「……はーはー／＼／＼

やつと口づけをする

「……部屋戻つたら酔わせてやる

聞こえるか聞こえないかの声で言った

「ん？」

「何でもないから楽しみにしてな

「うん？」

水浴び（後書き）

デ「いい加減評価祭も飽きてきたので、いつも通りの後書きに戻します」

ゼ「……俺限定でいろいろえぐられたけどな」

デ「まあ、基本初めてお前のこと見たらどうか鬼畜かにしか見えないもんな」

ゼ「それとここれは別問題じゃね？」

デ「『面接は始まって十秒で決まる』っていつじやん。それと同じで第一印象で大体決まるって事なんだよ」

ゼ「……そんなもんか？」

デ「そんなもんぞ」

祝五十話
（前書き）

仕返し

水風呂から上がりつて部屋に戻る

「氷解、凍結、凍てつかせり。『氷の嵐』ダイヤモンドダスト

「詠唱を変えるだけでここまで威力がさがるんだね」

「俺が独自に創った詠唱だからな」

「はあ～涼しい」

……ニタア

「Hレス、口開けて」

「？」

不思議がりながらも口を開けてくれた

ポイッ

「…………あまい。これっ……」

目がとろんとなつてゐる

「気分はどう、Hレス？」

「えー、あ、あのゼレカさん」

前に作ったチヨコレートを食べさせたから、今酔つてゐるね

「あ、あの、ち近いんですけど……」

גַּם־כֵּן אָמַר מִתְּנִינָה עֲלֵיכֶם

「ノルマニシス」

ギュウツノ

「ひあつ！？な、何して…」

「何って、抱きしめてるだけだよ？」

「やつをせまるとごど裸で抱きしめたのに、これで恥ずかしいみたいだね」

「...お、へへへへ」

顔が真っ赤になつて今にも倒れそう

「…………ねえエレス。最近よく夢を見るんだ、昔の事の」

「昔、ですか？」

「うん。」Jの世界に来る前の事。なんでだと思ひ？」

「私は夢についてはあまり詳しく無いので分からないですけど、夢は願望や思い出等を寝ている時に見るらしいですよ」

「……願望か。確かに当たつてる」抱きしめてる体勢から横になる

「でも、俺は後悔しなこよひにせんかねて言つたから。……君を守るつて、誓つたからね」

「ゼレカさん……」

「と、まあ嘘の夢の話は置ことこで」

「嘘だつたんですか！？」

「Hレス、今がどういう状況か分かって？」

俺がエレスを押し倒してのような格好

「……／＼」

「とつても可愛いや ものな様な潤んだ瞳」

「ゼ、ゼレカさん。何か怒つてません？」

「わつも風呂場で攻められた事なんて氣にもしてないよ」

「えつと、すいません」

「謝りなくても怒つてないつて。でもせつかくだし、このまま朝までいりじりよつよ」

「朝まで…？」

「ねやあみ」…………「あ、ねやあみなれ――――」

仕返し（後書き）

ゼ「もう、何も失いたくない。何もしてないのに、ただ在るだけなのに消える運命なんて！」

ア「主……」

ゼ「力を得ても、力が無くても、結局は同じなんて！でも俺は、力が無くても助けてみせる。俺がたすけるんだ！」

ア「主よ。嫌いな物があるからと言つて捨てては駄目だぞ」

悪戯夢 終焉と始まり（前書き）

悪戯夢編終わりです

悪戯夢 終焉と始まり

「はあ……はあ……」

走りながら考える

これは夢だと

でも、本当にあった『葉月零花』の思い出。『葉月零花』の……最後

「はあ……あそこだ！」

身体は自由がきかない

俺の身体じゃないみたいだ

「華姫衣！」

角を曲がって路地に入る

俺の目に飛び込んできたのは赤い水溜まりだった

「！？」

「あん？ 誰だお前」

「まあ誰であつても見逃すわけにはいかないけど」

白い服に身を包んだ男が三人いた

「華娜衣！英司！梨絵！多矩夜！」

皆の身体は紅く染まつてゐる

「なら、さつたと始末するか」

「待てよアシユラ。俺にやらせらる」

「止め給えヴァジラ、アシユラ」

「お前等！いつたいみん……な……」

ザクッ！

斬られた

アシユラでもヴァジラでもないもう一人の男……いや『天使』に

ドサッ

「どうだい？胸を斬られた感覺は」

「はあ……んつ……か」

「はつ、ぜまあねえな！威勢のよれぱぢりしたへ。
「滑稽だね」

「て……めえ……ひ……みんなこ……何…しゃがつ……た」

「ほつ、まだ喋る力があるか」

「でも駄目ですよ//カエル様。」んなのすぐ亡くなりますよ」

「散り際の気力でしょ」

ミカエルは少しだけ口元を上げる

「おもしろい。最後の気力とやらを見てみたいな」

「はあ…………はあ…………」

ミカエルは華姫衣を俺の前に連れてきた

「彼女を助けたいか?」

「華姫……衣」

「今ならぎりぎり間に合つ。早く治療し給え」

.....

「まだ…………生きて」

「ああ、まだ生きりれるとも。今治療すればね」

「くつ……」

全身に力を込める

無理矢理立ち上る

「はあ……はあ……」

自分の胸からも出血してゐる。関係無い

「華姫衣……今……病院に……」

ドスツ

「がはつー。」

華姫衣」と俺を貫く

そのまま力無く倒れる

「て……てめ……え……」

「おや失礼

「相変わらず酷い趣味で」

「ミカエル様、他の奴ら全員止め刺しといていっすか?」

「構わないよ」

「や……やめ……！」

ドスツ

ザクツ

グチャ

「！」

「ひつひつひ、どんな気分だ？」

「み……んな……」

「そろそろその彼女とお別れだよ、葉月零花くん」

「なん……で……俺の……名前……知って」

「だつて、君が彼女達の友達だから」

アシュラが憐れむような目で見下す

「君が彼女達と一緒にいなかつたから、私達は『今』彼女達を楽に消す事ができた。私達にとつては恩人のこと。その恩人の名前を知らないわけないじゃないか」

「……！」

「私からも礼を言う。君が今、彼女達といたらあと十年は消すチャンスが無かつたからね」

「つまりはお前がこいつらを殺したんだよ」

「……俺が……殺した……」

「でもお前は運が良い。その罪を償つのに『天使三人』に償わせて貰えるんだからな！」

「……」

ミカエルが剣を振り上げる

「さらばだ、罪人よ」

……この時、俺は絶望した
世界の全てに

自分自身に……

悪戯夢 終焉と始まり（後書き）

そして始まりの会話へと続く……

対話（前書き）

この話まで書けたので、もう何時でも先に進められます

対話

『…………おい』

ん?誰か俺を呼んでる

『俺だよ、俺』

「マムーーー、か」

『やれやれ。起きるのこれだけ時間かかってるんだ?』

「起きたても、寝てるんだがな」

『そりゃそりだ』

「で、俺を喚んだからには何かあるんだろう?」

『……強い魔力を感じる。誰の魔力か分からないが、相当な力だ』

「……大天使の誰かだと?」

『分からぬ。でも、それが誰であっても一つだけ忠告しておく

「何だよ。何時に無く真面目だな」

『…………自分に、呑まれるなよ』

「…………ああ

自分に、か

『まあそれだけ気になつたから云えておく』

「とりあえず魔力が何なのか調べてみるよ」

『そりしろそりしろ。お前に死なれると、せつかく黄泉帰らせたのに全でがパアだからな』

『ん? 何か言つ事でもあつたか』

「何もねえよ。じゃあな」

パアッ

『……本当に、呑まれるなよゼレカ』

「『カウント終』ー』……つてか?』

『ハハツ、氣ヅいてたノか。よく惑わサレなかつタジヤねえか』

「……俺はもう決めたからな。『俺』として生きるって

『生意氣ナコト吐かスな。ダケドナ、決めたカラ何だつてンダ? 何があつてモ動じないつもりか?』

「やう言つたる」

『フフシ。なあゼレカ。オマエ……………イヤ、止めといふ。後テオモイ知らせても』

「お前こそ、精々俺を揺らす方法でも考えてな

『スグニ後悔するぜ』

「言つてゐ

対話（後書き）

エ「ティンさん、何かないんですか？」

デ「んー、ゼレカは使えないし（夢にいるから）戦闘もなあ……」

ソ「でしたら、エレスと私の職務を紹介すればいいんじゃないですか？」

エ「ソル！ 良い考えだね。それに決めましょ！」

デ「確かに、何時もはゼレカが入ってくるから新しいな。よし、それにしておき

ソ「とにかくですので、ストーリーはまだ先に進めませんよ」

番外編『七夕』（前書き）

即興です

番外編『七夕』

「これはむかーしむかーしの話

ある所にHレスナーグといふ姫様がいた

「あつちに逃げたぞー。」

「追え、追えーーー。」

「 もへ、じつこなー。」

Hレスナーグはお付きのソルーティアの日を盗んで街に出掛ける度に、身代金目通りの悪党に追われます

「あつ……ー。」

「はまはーやつと追い詰めたぞ。」

「おひなしく捕まつてもうおひ。なに、抵抗しなけりや 亂暴はしな
これ」

「だつたら……」

悪党が姫を追い詰めた、その時

「ギヤアアアアア……」

『一・づ』

「何! ?」

魔物の大群が顯れました

「ひ、ひい！」

「あああー。」

悪党達は逃げ出しました

「へへ……逃げなきや」

しかし、魔物達は悪党以外は追いかけません

「何で……？」

「それは俺が命令したからや」

そこに現れたのは魔物飼のゼレカでした

「大丈夫だつた？ エレスナーグ」

「は、はい」

「外はひとりじゅ危ないよ。ちゃんと護衛を付けなきゃ」

「外にでるときぐりいは、『姫』だと忘れないから……」

「……そうか。でも、護衛じゅなくともだれかと一緒にいた方がいい」

「……」

「……分かった。そんなに護衛をつけるのが嫌なら、俺が付き合つてあげるよ」

「え？」

「君がよければ、だけど」

「いいんですか？」

「ああ」

「ありがとうございますー。知つてゐると思ひますけど、私はエレスナーグです」

「俺はゼレカ。それと敬語は使わなくていいよ」

「じゃあ、私のこともエレスカで呼んで」

「はーはー」

「……ふたりは毎日出で、毎日楽しく過ごします

しかし、それを知ったソルーティアは別の国の王様に頼んでゼレカを『空の平原』に飛ばしました

「ゼレカさん、レスとふたりきりなんて羨まし過ぎます。ひとつ誤でベルゼブさん、ゼレカを『空の平原』に飛ばしてトモ」「

「……いきなりとんでもない頼み」とだな

「ベル兄ちゃんには恋する乙女の気持ちが分からぬからね」

「……？」

「――アスターントさん、余計な事は言わなくていいんです」

「……」

「アラちゃん、転移法陣の準備しといて」

「オッケー」

「……よくわからん」

「あつ、わうだ。メフィストお姉ちゃんが『約束が楽しみ』って言つてたよ」

「…………」

ゼレカは他の国の王様の力(?)で『空の平原』に飛ばされてしましました

しかしそれからのお姫様は毎日部屋に閉じこもり、食事もろくにとらなくなりました

その姿をみかねてソルは言いました

「Hレス、星の力が溜まる口にだけはゼレカと会つていいですよ」

その言葉を聞いてから、Hレスは次に星の力が溜まる口を待っていました

そして星の力が満ちる日、七月七日にHレスはゼレカに会ってに行きました

「ゼレカ！」

「やあ、Hレス。ちょっと待ってね」

ゼレカは星の力を使い、魔力で橋を掛けました

「星で出来た川、『天の川』ってとこかな」

「ゼレカ！」

「久しぶりエレス。と書つてもまだ一日も経つてないけどね」

「でも、たえられなかつた。ゼレカと会えないから、毎日苦しかつた」

「ふふふ、ありがと」

と言つて、ゼレカはエレスの肩に手をまわした

「俺の魔力でずっと橋を掛けてるから。何でも出来るね」

「えー?」

そのまま押し倒した

「ちょ、ゼ、ゼレカ!?」

「大丈夫大丈夫、怖くないから」

そして、そのまま……

「……あれ?」

「おはよう、エレス」

「ん……おはよう」

「随分と楽しそうだつたけど、何かおもしろい夢でもみてたの？」

「……夢……だつたんだ。……あんまりさのいつと変わらなかつたけど」

「？」

番外編『七夕』（後書き）

デ「随分とお久しぶりです」

ゼ「サボりやがって」

デ「サボってた訳じゃないぜ。試験勉強で忙しくて時間もそれなかつたから、全く更新できなかつただけさ」

ゼ「そうかいそうかい」

デ「今週で試験終わるんで、来週からまた更新しますね」

予兆（前書き）

今回から誰視点か記載します

予兆

エレスナーグ vi sion

「突然だけビゼレカ、ちょっと行つてほしーといふがあるんだけどいい?」

「もちろん。それで何処に行けばいいの?」

「ん……『紅月の荒野』にいつたきり調査隊から通信がないから…」

「あー、確かに何も連絡きてなかつたな」

「同行者は好きに連れて行つていよ」

「珍しいね。一緒に行くつて言わないなんて」

「今日は城の用事でいっしょに行かないんだ」

「そうか……。じゃあできるだけ早く帰るから、それまで待つてね」

「うそ、きをつけて」

「…………もし何かあったら、俺を呼んでね」

「?」

「そう言つたゼレカの顔には不安があつた

「寂しくなつたり、なんとなく呼んでみたいと思つただけでもいいから」

「ふふひ、じゅあわひかへせひりひ」

「じゅあ行つて来るから」

「気をつけたね」

「わらわらん」

……その時のぜしかの不安を私が知るのまゝ、もつ少し後だった

予兆（後書き）

「いやあ～、楽しみだなゼレカ」

「何がだよ」

「この後の展開が」

「全く、思わせぶりな事をチラチラと。伏線を散りばめやがつて」

「回収するのが楽しみだ」

「回収できなかつたらどうするんだよ」

「構成は既に考へてるから万事OKだ」

「試験中にな」

「それを言つな」

出発（前書き）

続き物に突入する

ゼレカ vision

「アルフォート」

「呼んだか? 主よ」

「お前もショイドがやつたみたいに、ひと形になれるか?」

「むちうるんだ。といつよりも、普段からひと形に近いが」

「それはそうだけど、ショイドはぱっと見では魔獣って分からなかつたからな。あいつの弟なら似たような事が出来るかなーって思つてさ

「その程度なら普段からしてやれる」

そつとアルフォートの体が光つた

「…………これでよいか?」

「あー…………本当に普段とあんま変わらないな」
確かに、普段も魔獣だつて全然分かんないけどさ

予想と違つたな

「まあいいか」

「と」ろで主。何故我にひと形になれと?」

「もうひとり連れて行きたい奴がいるから」

「モルヒーニング」

「ヒント、俺の直属の部下

「ああ。あやつか」

フラワー・ハウス

「あ、ゼレカさん、おせむりやめなさい」

「おはようさん。で、バルチス。今日は魔物の管理しなくていいぞ」

「本当にですか！？」

「だから今すぐ遠征の準備をしろ」

- 1 -

『紅月の荒野』に行くから、大体二・三日用意な

ええ——！——！」

出発（後書き）

デ「相互紹介やつていきます」

ゼレカ エレス

ゼ「特別な恩人であり俺の主で大切なひと」

エ「大好きなひと」

ちよつと休憩？（前書き）

暑い…

ちょっと休憩？

バルチスvision

どうも、バルチスです

突然ゼレカさんに「遠征の準備をしろ」と言われ、無理矢理連行されました

「どうしたバルチス？ 独り言が多いぞ」

「……何でもないですよ」

「そうか？」

「主、右方向に数匹の生存反応だ」

「え？」

「オーケー、じゃちょっとバルチスと一緒にいてくれ」

「承知」

「そういう訳だからアルフォートと待ってる」

「あつゼレカさん」

……行っちゃった

「主なら大丈夫だ」

「え、あつあの……」

「申し遅れた、我はアルフォート。主のけいや……部下だ」

「あつぢつむ。フラーハウスの管理者のバルチスです」

な、何か気迫がすごいひとだなあ……

「どうした？ 気軽に接してくれればよいぞ」

「やう？」

「……本当に気軽だな」

「あ、うる「メン」……」

「いや、それぐらいで構わないぞ。むしろ主と同じ様に我に接してくれた方がいい」

よ、よかつた

怒られるかと思つたよ

怖いひとじゃないみたい

なら、もつと僕を知つてもらおつ

そうだ

「じゃあ、僕にも普通に喋つていいいよ」

「これでどうだ

「折角の提案だが、私はこの話しが普通なのだ。主が話す様な話し方は逆に難しい」

「や、そりなんだ……」

「まずかつたかな……」

「ふつ。でも、良い提案だと思つた」

「そうだつた?」

「ああ」

何か、話してみると優しいひとだなあ

「主」

「よう」

「どのような戦果だつた?」

「魔物つづーか機械人形マリオネットが何体かだつた」

「機械人形? 神殿防衛人形じやなかつたか」

「神殿防衛人形で……『コーレム』って言えよ」

「ふむ、今はそういうのか……」

お話しにひいていけません……

「どうだつたバルチス?」

「どうせ……」

「アルフォートと話してたんだろ。ここつは初対面の奴には警戒を怠らないから、喋るのも一苦労だつたろ」

「いえ、そんな事はないですよ」

「…………」

「ほーい。珍しいなお前が気迫を出さなかつたなんて」

「…………別段出す必要が無かつただけだ」

「ふーん」

「そつそれより、マリオネットなんて倒したんですか!-?」

「あんなの一撃だぞ」

「…………」

前々から思つてましたけど、ゼレカさんつて化け物クラスですよね

……

「そんな讃めるな

」へ、口に出してました?」

「読心術だ

「勝手に読まなこだへだされこよー」

「はーはー、わっかと行へそ

「御意

」ひょ、速こですつて!—」

ちょっと休憩？（後書き）

エレスナーグ ソルーティア

工「頼れるお姉ちゃん」

ソ「可愛い妹」

實業団体（前書き）

バルチス君の秘密公開

「……」

あと丸一日いや、半日もあれば紅円の荒野にたどり着くな
れつたと終わらせて城に戻りたいんだよな……

『強い魔力を感じる。誰のかは分からないが、相当な力だ』

「……」

……マムートに言われた事が変に気になる

「……さん」

やつぱり、早く戻らなことな

「ゼレカさん！聞いてます？」

「何も聞いて無かった」

「聞いてくださいよ！」

「はーはー。で、何？」

「少し、休憩しましょうよって言つたんです」

「構わないけど……」

「はあー、疲れました」

「此処は一部で『マリオネットの処刑場』って言われるほどマリオネットが出て来るから危ないぜ?」

「それを先に言つてくださいよー」

あれ? 言つて無かつたっけ?

「聞かれなかつたから答えなかつた」

「それなら先を急ぎますよ」

「おう」

「……」

「どした?」

「いや、あの者は随分と魔物に気に入られてるなと思つたのでな」

「バルチスだろ? あいつ、魔力も大して無いし身体能力も高く無いけど、魔物に好かれる能力だけはあるんだよ」

「本来ならこの辺りなら機械人形がわんさか出て来る筈だからな。ここまで遭遇しないのは初めてだ」

「あいつ自身自分の潜在能力に気付いてるか知らないけど、その力を使いこなせるようになつたら『準魔王』クラスの力は出せるぜ」

「おもしろい者を部下にしたものだな」

「だろ?」

「ゼレカさん、アルフォート。早く行きましょうよー。」

「おつといけないいけない。じゃバルチス、先行ってるわ」

「速過ぎですよーー。わざわざまで結構後ろになりましたよねー。」

「せつせつせー」

「はあー」

バルチスを置いて先に宿屋に来た

まあアルフォートと一緒にだから、山賊に襲われても平氣だらう

あいつ強いし

ガチャ

「はあ、はあ、疲れました」

「遅かつたなバルチス」

「それは、そうですよ。速過ぎ、です……」「…

「テレポートを使わなかつただけましだ」「…

「そつこえ、何でテレポート、使わないんですか?」

「何の為に紅月の荒野に行いくか知つてるか?」「…

「調査隊の確認ですよね?」

「何で確認しに行つてる?」「…

「え……通信がないから……あつー!」

「通信がない、すなわち妨害されてるからだ。妨害されると跳べないんだよ」

「そんな欠点があつたんですね」

「万能な魔法なんてないからな。ところで、アルフォートは?」

「宿屋までは一緒だつたんですよ」

「呼んだか、主?」「…

「おい……何だその格好……」

「何でローブなんだ?」「…

「シャワーを浴びてきたのだ」「ですね」

「バルチスも入るといい。汗をかいただろう」

「もうするよ。じゃあ入ってきますね」

テクテク

バルチスが部屋から出ていった

「…………アルフォート、お前結構寬いでるな」

「我はいつもこうだが?」

「もうですか…………」

寛ぎまじょう（後書き）
(あたまじょう)

ソルーティア アルフォート

ソ「頼れる方です」

ア「信頼に足る方だ」

齋された眞実（前書き）

シリアルス全開！

糖度が足りない……

ゼレカ vision

「ふう、やつと着いたか」

と言つても、予定よりかなり早く着いたけど

「バルチス、調査隊の手掛かりになるものを探すぞ」

「分かりました……けど、少し休ませてください」

「まあ、あの山越えは厳しかつただろ? からな。ビロに腰を下ろして、周りを確認してくれればいい」

「ありがとうございます……」

さすがに疲れがみえるな

しかしまあ、バルチスがいてくれたおかげで余計な魔物と戦わなくてすんだぜ

「主、我は上から見てくる」

「ああ、任せる」

「御意」

「さてと、俺も探すか」

……『紅月の荒野』

……『相当な力のようだ』
なんでその一つが引っ掛かるんだ……

「ゼレカさん」

「ん？」

「変なナイフが落ちてたんですけど」

ナイフ？

「何でナイフなん……か……」

このナイフ、まさか

「『聖堂の短剣』……」

そうか、だからあの時アシユラに『暗黒の楽園』が効かなかつたのか……

「何ですか？」

「天使の武器の一つや。」
「デモンキラー」
の武器だ

「デ、デモンキラーって神の法具ですよね？」

「ああ」

……ひつ、連合会議の時に刺されてたか

「じゃああいつが……」

「どうしたんですか？」

「ん、ああ。いや、ただ今回の黒幕が分かつただけさ」

「黒幕って、人為的な事だつたんですね……」

「多分そつだらうつな」

「こりゃあ思つたよりもやばいな……」

「主、やばいぞ。調査隊が神殿防衛人形に追われてたぞ」

「『ゴーレム』……ああ、そういうばあいからは身体から電磁波がでてたなあ。じゃあさつむと倒して帰りうぜ」

「一応は殲滅しておいたぞ」

「おつと」

……アルフォートの一言に転倒しちこなつた

「せつこつ」とは先に言えよ。ずつじかないとひだつたぞ

「それは見てみたかったな」

「あははは……」

バルチス、お前の笑いがやけにグサツとくるんだが

「まあいいや。バルチス、アルフォートと調査隊のところに行つて
る」

「はい」

「御意」

……ふたりとも行つたか

「はあー、全く……」剣を創造する

ガキンつ

「嫌な予感が的中したぜ、アシュラー。」

「そうかい？」

振り向むだまに斬り掛かつたが、アシュラの剣に止められた

「ああ、あの時お前が紅月の荒野（この場所）にいたわけもなあ！」

そのまま斬り上げる

アシュラは吹き飛ばされながら体勢を戻し、空中で止まる

「ふつ、本当にか？」

「ああ？」

「本当に全て理解したのかと聞いてるんだよ」

「……………」「何だ？」

「君が全て理解しているなら、君は僕に斬り掛からなかつた。なぜだか分かるかい？」

「知らねえよ！」

焦るな、気持ちを落ち着けろ

怒りのままに行動したら『あいつ』の思うつぼだ

「くづくづく……、そろそろ教えてあげるよ。そのわけを」

[REDACTED]

「おやうへ、僕が此処に居た理由は合つてゐると思ひや」

「お前が、会議にいた何処かの魔王と手を組んで俺をおびき寄せる
為だろ?」

「正解さ

「……その魔王は俺達の中の誰かを狙つてた。違つか？」

「ほーう、そこまで予測してくるとは思わなかつたよ

「それと……」

『聖堂の短剣』をみせる

「俺の魔術が効かなかつたのはこれのせいだ

「あー、そこにあつたんだそれ。あいつ、回収しておけつて言つたのに」

「これでもまだ理解してないつて言つのか？」

「ああ、もちろん。肝心の事が理解出来てないみたいだ

何時から掛けてたか知らないが、眼鏡の位置を直す

「肝心の事？」

「もし、君がそれを知つてたら僕に斬り掛かつてこなかつたつてやつさ」

「…………」

「今、こつして僕と話してゐる事があいつの狙いなのさ」

「ヴァジカの？」

アシュラの眼光が鋭くなつた

そして……

「ふふ、あいつが君の主を殺すまでの時間稼ぎ。それが僕の役目さ」

「なん……だと……」

「それじゃあサヨナラ。ゼレカ」

ふわつ

「……くつー」

だから……

「アルフォート！」

「何だ？」

「バルチスと調査隊連れて戻つてこい。ゆっくりで構わない！俺は先に行く！」

「承知」

テレポートで城に跳ぶ

「……エレス、無事で居てくれーー！」

齋された眞実（後書き）

アルフォート・バルチス

ア「おもしろい男だ」

バ「怖そうだけど優しい」

番外編『狼と七人(?)の子山羊』（前書き）

ユニーク10000突破記念です

番外編『狼と七人(?)の子山羊』

「昔むかーし、あるとこで一人の親山羊（悪魔）と七人の子山羊（悪魔）がいました。山羊なのに一人?って疑問はスルーでお願いします」

ソ「じゃあみんな、私はお買い物に行ってくるからお留守番をよろしくお願ひします」

エ「はーい」

アス「きをつけたね」

ソ「はい」

メ「私も行こうか?」

ソ「私一人で大丈夫ですよ。でもありがとう、メフィスト。それと、最近はこの辺りに狂暴な狼ができるから気をつけてください」

アル「凶暴ではなく、狂暴なのか?」

アラ「なんかおもしろいわね」

ソ「私以外の人に扉を開けてはいけませんよ。それでは」

ガチャ

アス「狼か。恐いね」

メ「恐がつてないよね」アル「鍵を掛けなくてはな

アラ「どんな狼だらうね」

ベ「……興味は無い」

ゼ「……」

エ「どうしたの?」

ゼ「誰が狼役だらうって考えてた」

エ「たしかにそうだね。後出てないのは……」

コンコン

扉を叩く音がします

アス「はー」

メ「アスターント、あけちゃ駄目つて言われたでしょー?」

アス「おもしろいから開けてみよつと思つたの」

アラ「それはそうね」

アル「と壇ごつつ開けよつとあるのせひのかと思つが」

するとエレスナーグが聞きました

エ「誰ですか？」

アシ「世界一美しい狼です」

ゼ「…………お前か！」

アシ「わあ、子山羊達。僕の畠袋を満たす為にこの扉を開けてくれ
給え」

ベ「…………偽るどいが正体丸だしできたな」

ゼ「基本バカだからや」

アシ「聞き捨てならないね。なら、待つてなよ」

タツタツタ

アス「帰つちやつたね」

ゼ「まだいると思つ

アラ「私達を狙つてるみたいね」

メ「ど、どうしよう..」

ベ「…………恐いのか？」

メ「恐くない、つい言つたら嘘になる」

ベ「……」

ギュウ

ベ「……だったら、俺の傍に居る。……俺が守つてやる」

メ「ベルゼブ……」

アス・アラ「……」

バンフ

アシ「お楽しみ中失礼する」

ベ・メ「ー……／／／

アル「なにー？」アス「わあー、狼が入ってきた」

アシ「鍵が開いてたから失礼させてもらつたよ」

ベ「……どうする？」

アル「ある……」

ゼ「エレスが恐がつてゐみたいだからさつさと追い出す」

とゼレカが剣と銃を手にしていました

アラ「よいしょ、つと」

アシ「ん? なに……を……」

アラクネが扉を開けたらゼレカが狼と一緒に外に行ってしまいました

エ「あつ……」

バゴン!

ガギン!

パンパーン!

アル「派手にやつてるな」

アス「何してるんだろ」

アラ「見なくとも分かるけど」

ビチビチビチ、バスーン!

ベ「……」

メ「ベルゼブ、どこに行くの?」

ベ「……手伝ってくれる」

ガチャ

ガタン

パンパンパン！

ドキヤーン！

外の音は更に激しさを増しています

エ「ゼレカ……」

ガチャ

ゼ「はあ……はあ……助かつたぜ、ベルゼブ」

ベ「ふう……ふう……と言つてももう終わりかけだった」

エ「狼は？」

ゼ「ボロボロにしてやった」

家の外

アシ「わよ、今日のところは負けを認めますよ」

と言つて帰つていった

家の中

エ「ゼレカ、怪我していない？」

ゼ「大丈夫だよ。心配かけてゴメンね」

H「よかったです……」

こうして、七人の子山羊達は狼を倒しましたとや
そして帰ってきた親山羊と幸せに暮らしましたとや

テ「ふう、疲れた」

番外編『狼と七人(?)の子山羊』（後書き）

「ゼレカ視点からエレス視点へ、という時に解析してみたらゴーネクが10000突破しました！」

「またつい具合に区切りがよかつたな」

「ホントですね。本編はドシリアスなのに、そんなのお構いなしでふわけてたからギャップあります」

「直前まで真面目だった奴をふわけて出したしな」

「ホントはあの役ヴァジラにやらせようかと思つたんだけど、流石にそれはなあーって事でアショラにしたんだ」

「…………それはまずいよな」

「それでは」

・・・・・ありがとうございます！――』

緊張？無いですよ（前書き）

シリアルスマート突入！……しませんよ

緊張？無いです

Hレスナーグ Vision
ゼレカがフランハウスにいる時

「はあ～、行っちゃった」

「もう出発したの？」

「あ～、ソル。いつのまに」

「こまきたといひよ

「せんせん気がつかなかつた」

「これでも私、気配を感じるからはなつこいつあるのにな……」

「ゼレカは部下をひとつ連れて行くって」

「部下……ああ、彼のこと」

「知ってるの？」

「知らな～よ」

「あはは……」

「それよりも、貴女宛の手紙がきてたわよ

「手紙？だれからだ？」

ソルにわたされた手紙を開けてみる

「えへっと……」

シャクガからだ

「……………？」

ガクンつ

私はそのまま床にすわりこんだ

「どうしたの、Hレス！」

「……………シャクガ……………からの手紙……………だつた」

「シャクガ……………妖精族の友達の？」

「うん……………」

手紙の内容が…………私にしそうげきをあたえた

「なんて書かれてたの？」

……………眞おうかどりがまよつてた

でも、これがほんとうなら言わないわけにはいかない……………

「ソル。私……」

「大丈夫よエレス。落ち着いて」

「私……」

決心してソルに言つ

「私、シャクガに胸のおおきさで負けた！…！」

「！…エレス……」

妖精族のシャクガに負けるなんて……

「胸の大きさなんて些細な事よ。特に、ゼレカは全く気にしてない
でしょ？」

「そうかな……」

その頃

「はつくしょん！」

「風邪か、主よ？」

「体調管理にはきをつかってるんだけどな」

「でも、ゼレカが胸にきょうみが無いのは知ってるけど…………」

「あつ、そういうえば胸を大きくする方法つてあるわよ」

「えつー…そんな方法があるのー?」

「ええ 昔から言われてる方法だけど結構効果があると思つわ」

「どうやるの?」

「胸を揉むのよ」

……なんだろ?!

ソルの笑顔がこわい……

「それじゃあ早速試してみましょ」

「じ、自分でするからいいいや」

……とつあえずにげた方がいい気がする

「自分でじゃ効果が少ないと思つわ」

「だいじゅうぶん……。それより今日の仕事は…」

「今日の仕事はありません」

「いつもあんなにあるのに…？」

「ありませんよ」

にぎょうとしたのに、いつの間にか背中にまで手をまわされてる

「久しぶりですね。いつも？」

「ソ、ソル。待つ…」

「大丈夫ですよ」

「だいじょ「ふじやないよ~」

緊張？無いですよ（後書き）

バルチス アラクネ

バ「どうか見つかりませんよつこ」……」

ア「見覚えが？」

スケルム（前書き）

更新ペースがばらばらです

「あはははーそれは大変だったね」

「笑い事じゃないよアスターント」

私とアスターントはバルコニーでお茶をしている

「確かに昔からエレスって身体は成長してないよね」

「そ、そんな事ないよーそれは背も大して伸びてないし胸だってそうだけどさ~」

「でも心は成長した。それは絶対だよ」

「やつ、かな?」

自分がいや あんまり分からないけど

「やつだよ。だって昔は他人を信じるなんて滅多にしなかったもん。今じゃ考えられないよ」

「確かに……」

「それって、やつぱりゼレカさんの影響でしょ?」

「やつだと思ひ。ゼレカと一緒にて安心はあつたね」

「安心…………そつだ、Hレスに聞ひついで思つた事があるんだけど」

「ん?」

紅茶をすする

「ゼレカさんとビリまで進んだの?」

「…ケホッ、ケホッ、いきなり何聞くの…」

「だつてかれこれ三ヶ用ぐらいたつたでしょ、それに世話係つて役なんだからそりこいつ事も…」

「そ、そんな事……してないよ…」

アスターントは満足したように笑う

「へえ~、まさかそんなとこまでしたんだ」

顔が真っ赤になつてるのが分かる

「な、何もしてないつて…そ、それよりあなたはビリなの?」

「私?私は毎日無理矢理兄ちやんを拉致して…」

「やつぱり…言わなくていい…」

あのまま話してたらどんなことかこいつだから止めておく

パソコン

「失礼します。アスター様、謁見の時間です」

「もうそんな時間?早いな~」

「じゃあ私は帰るね。仕事みたいだから」

「あつ送つて行こうか?」

「ううん大丈夫。またね

「うん、またね」

時間を見ると、結構たつていた

早く帰らないと

安らぎ（後書き）

アラクネ メフィスト

ア「頼れる親友」

メ「しつかり者の親友」

魔神の姿・始まり（前書き）

シリオアスあんビダーグ

魔神の姿・始まり

ソルーティア Vision

「……」

「……結界ですね

この城と城下街の分離結界ですか

分離結界の用途は周りに見付からず特定の人物のみを閉じ込める

おそらく、狙いはエレスですね

しかし、今エレスはリリードネメスに行つてるので好都合です

「……そろそろ出て来てはいかがですか？」

「ほう、俺に気付くとはな」

バルコニーの上から光と共に声が聞こえてきた

その背中からは白い翼が羽えている

「天使！？」

「ふん、そんなことはどうでもいい。赤血の魔王は何処だ？」

やはり狙いはエレスでしたか……

「何処だと聞いてるんだ！あいつがゼレカを引き付けてる間に始末
しちまいたいんだよ！！」
ゼレカさんを引き付ける？

「……此処にはいませんよ」

なら、少しでも時間を稼いがなくては

「エレスは今別の魔界に居ます。しばらく帰つてきませんよ。」

「……ちつ、なら仕方ねえ」

殺氣が消えた

「とつあえずはお前に消えてもらひつか」

……わけではないようですね

エレスナーグ vision

……ちよつと遅くなっちゃったかな？

リリードネメスから二ンブルケティックまで戻るのはすぐだつたけ
ど、城下街まで戻るのが時間がかかつちゃつた

「……あれ？」

誰もいない……

いつもこの時間ならひとがたくさんいるのに……

「……」『……もし、何かあつたら俺を呼んでね』

ゼレカの言葉を思い出す

「……早く帰るわ」

急いで城にもどる

ソルーティアvision

「はあ……はあ……」

「はつははー！中々楽しかったぞ女ー！」

強い……

魔王……いや、大魔王並の力ですね

「くつ……」

出血が止まらない

私の足元は黒い水溜まつのようになつてこむ

「あと一息で潰れるな」

「わづですね……」

「魔王を始末しに来たのに、またか！」今まで楽ししめる奴がいるとは思ひもしなかつたぜー！」

「そうですか……それは光榮ですね……」

……痛みで氣絶しそうですよ

でも、今は少しでも時間を……

「そりいえば……貴方の……名前を……聞いて……ませんでしたね……。教えて……頂けません？」

「はつー良いだろつー俺は天使ヴァジラー！」

そういうて羽を散らせる

……Hレス

無事で居て

魔神の姿・始まり（後書き）

メフィスト ベルゼブ

メ「愛してゐよ」

ベ「……お前は俺がずっと守つてやる」

魔神の姿・帰還（前書き）

……民い

魔神の姿・帰還

エレスナーグ vision

「…………着いた！」

謁見の間が見えてきた

もつ少し！

ガチャ

扉を開けた

……そこには血まみれのソルと白い羽を散らせている天使がいた

「…………ソル？」

「エレス！？」

「ふん、やつと來たか」

「エレス、逃げて！」

「…………あなたがソルを傷つけたの？」

「だつたら何だ？」

「……許さない。許さない……よくも私の家族を…」

「……レス」

「『魔王化』…」

魔力を解き放つ

私の体が黒い煙りのよくなものに包まれる

パシュー！

「ふん、『魔王化』か……おもしろいじゃねえかよー。」

「くつ……」

またあの天使の魔力が強くなつた

でも、今の私には魔力の強さなんて無視できる

「全てを包み込む闇の力、在るべきところに在るものをして正し、理を示せ。『リフレクトシールド』」

この魔法を使えば少しは時間がとれる

「なんだよ、詠唱したから攻撃してくると思ったのによ。つまりねえな！碎け『ブラストファング』…」

「……短縮詠唱」

でも、今の私には効かない

バシュ

「 なに!?

「これが私の魔法『リフレクトシールド』の能力。相手の一切の魔法を受け付けない

もちろん、弱点もあるけどね

「一切の魔法を受け付けない、か…………ふ、はは、ふははは……い
いぜ、気に入った!なら、魔術だけでぶちやぶつてやるぜーーー!」

「結果は見えてるけどね

『リフレクトシールド』が破れるって、結果が

でも、もう少しで完成するから……

? ? ? V i s i o n

「……ちつ、結界か

直接城まで跳んだのによ

「…………無事で戻ってくれよHレス、ソル」

城を目指して全力で走る

HレスナーグVi sion

「はあ……はあ……」

「ふん、未だ破れないか。だけど、お前の魔力が持ちそこないな。
せっかく楽しかったのによ」

「やつぱり……破れなかつたみたい……だね」

でも、もう終わり

「わうじゅねえ、破る方法が解つただけだよ

「どうやつて?」「教えてやるよ。走れ、奪え!』ライティングフ
レア』……

「……やつぱりばれたか」

「確かにその魔法は強力だけどな、弾けるのは属性が単体の場合の
みだ。属性が複数なら弾けないだろ?」

「……その通り。でもね

『リフレクトシールド』が炎と雷を飲み込んで消滅する

その魔力が私に流れ
る

「なつ……」

「弱点はわかつてゐから、改良したの。消える時にその魔法を魔力
に変換して私に流れよう!」

「だが、それでどうする? さつきの魔法はもつ効かない」

「だからあなたを終わりにする」

ゼレカ、力を貸して……

「汚れし魂、その術を奪う力を行使したまえ。『冥界の振り籠』!」

天使の周りから紫色の煙りが立ち上る

「こんな魔法を喰らうかよ!」

天使が上に飛んだ

「それを待つてたの。弾け飛べ『アルテ・エーテン』!」

「その魔法は!…」

黒い球体が天使を包む

「ぐああああ!…」

パン

……ありがとう、ゼレカ

「ふう、倒した」

ペタン

「あれ？ 体に力が入らないや」

「エレス、大丈夫？」

「私は大丈夫だけど、ソルの方こそ危ないよ」

「少しずつ回復させてるから平気。 それよりいつの間にあんな魔法覚えたの？」

「覚えたってゆうよりも『勘』かな。 詠唱もあつてたし」

「勘？」

「だろうな……」

「前にゼレカが使つてるのを見て、とつそにやつてみたの」

『一・?』

煙りの中から声が聞こえてきた

「まだ……倒れなかつたの！？」

「あれが……完全詠唱で……魔力を……もつと込めてれば、跡形もな
く……消えてたぜ」

「そんな……」

「くわ」

体も動かない……

魔力も尽きた……

「今度こそ…………終わりだ……』エクスキューショナー』……」

びひじょひ……

「Hレス、逃げて！」

「動けない」

どうじょう……

「はあ……はあ……始末完了」

びひじょひ……

『もし、何かあつたら俺を呼んでね』

ゼレカ……

「ゼレカー！」

パスつ

「！？」

「お呼びですか？姫様」

そこには、黒いコートを着た、見慣れた、ひとがいた

「ゼレカ？ゼレカ！」

魔神の姿・帰還（後書き）

「やあー、お決まりパーティーンでしたね」

「そうだろうよ」

「とこかお久しぶりです」

「そっか、リレーやってもんな」

「思い付きてやつてみたリレーだったけど、結構長いね」

「お前が楽だからだろ」

「痛いお言葉です」

魔神の姿・カクセイ（前書き）

ダーク指数が！

魔神の姿・カクセイ

ゼレカ vision

「間一髪だつたね」

紫色の光を斬り裂いた

「ゼレカ……来てくれるって、信じてたよ!」

「もちろん。約束だからね」

「ゼ、ゼレカさん……」

ソルが無理に身体を起したうとしてよろめく

「おつと、大丈夫?」

大丈夫なわけないけど

……みたところ外傷と出血が原因か

「癒しの力よ。『ファーストヒール 応急処置』」

「す、すみません」

「あんまり喋らない方がいいよ。結構重傷みたいだからね」

「 もう、 ですね……」

「 うん……。エレス、 ソルの傍にいて」

「 わかった」

少し強めに魔力を込めた結界を張る

「 さて、 と」

後ろを向く

「 久しぶりだな、 ヴァジラ」

「 ちつ、 面倒な奴が来たぜ。 足止めも満足にできやしねえのか、 あ
いつはよ」

「 アシュラなら俺に全てぱりして、 すぐ帰ったぜ。 おかげですぐ駆
け付けられたしな」

「 たつぐ、 何のつもりだよ

「 それはそうと」

剣を構える

「 去る気は無いのか ？」

「 ねえな。 赤血の魔王を殺しに来たつもりだが、 お前を殺しても変
わらねえしよ！」

カキイン！

互いに剣をぶつける

俺の剣はさつきアシュラに会った時に造った『夢現』

この剣には風の魔力を込めてあるから、振る度に空氣を支配できる

「何だ、それ？ 気流でも生み出してんのか？」

「氣流じゃない、『風』だ」

ヴァジラを取り巻くようにして風が生まれる

「祖は永久の罪人。その犯し罪を洗う術は、四方八天淨火のみ。燃え尽きろ『バーニングストリーム』！」

中級の炎だが、回りを取り囲む風と交わって爆発的な炎になる

「……っ、こんなもん喰らうかよ！..」

ヴァジラが水でつくった巨大な剣を振るつ

水と炎がぶつかり、蒸気が生まれる

かかつた！

これで奴の視界はゼロ

蒸気田掛けて走る

「ちっ、ぢにだ……！」

「遅い、『ランサー・ソロ』」

グサッ

槍を象つた魔力を心臓に突き刺す

「……終わりだ」

「…………てめえがな……！」

「！？」

首を掴まれた

「な……ん……だと？」

確かにランサー・ソロで心臓を貫いたの

「何も蒸氣で視界が奪われたのは俺だけじゃねえんだぜ」

「くつ……まさか…外した……のか」

「左手を代償にな。だが、お前を仕留めるのに左手一本で済めば安いものだよー！」

၁၇၁

「消し飛べ！－！『炎衝撃』－！」

かはつ

何か起きた？

首を掴まれて投げられただけだぞ？

三

俺の体は鍛え音をたてて床に叩きこむされた……気がする

「俺の最強の技には、二つあるんだ。」

ほんとうにしたことがないよ。

「ちつ、やつぱり片腕であれつぽつちの魔力じやその程度か。
それでも充分過ぎるみてえだがな」

……
んだ、あれ？

あんなもんまともに喰らつたら木つ端みじんじやねえか

「まあまあ」

グサツ

「！？」

あいつの剣が俺の左手を深々と貫いた

「これで動けねえだろ？ 待つてな、先に魔王から手付けるか！」

ガチャン

「待て……ふたつに手を出すな……！」

「安心じい、お前もすぐ元気を追わせてやる。もう二度『あいつとも会えるじやねえか』『ひ

「あっこ……？」

ドクン

ひめせ

「お前を殺す前に殺したやつら。良かったな、全員一緒に

ドクン

ひめせ

「『吸血魔王』『あくま』」

ドクン

「ヤメる……！」

憎
い

みんなを殺したあいつらが

憎
い

ふたりを傷つこようとしているあいつが

憎
い

誰も守れない、俺が

ねえ、誰かを守りたいと思うのは、弱さの証なのか？

みんなを傷つけさせたくない、その為の力は無力？

どんな力も、弱い心のまえでは意味を為さないの？

ねえ、誰か、答えてよ……

『あア、オマエの言つてオコセ』

『守りたい、ナンテ考エは弱さのアカシ』

弱さ……

『傷つけない、スナワチ無力ダ』

無力……

『支えきれない心、ムイミだゼ?』

無意味……

君は何でも知ってるね

じゃあ、力を手に入れる為には、どうすればいい?

『簡単サ。復讐、憎しみ、嫉妬、怒り、悲しみ、喪失、狂氣。そして絶望ダ』

『オレにはそのスペチが宿つていル。全てを破壊シ、無に帰す力がホシイダロ?』

欲しい

どんな力でもいいよ

俺の望みが叶うなら

『なら、オレに手をノバセ。オレの力をカシテやるよ』

力

手を、のばす……

！

『ヒヒッ。サア、絶望を味わわせてヤロウぜ、アイボウ？』

ふふつ、力だ

力が溢れてくる！

そうだな、絶望をくれてやるか、『零花』？

「…………ヒヒッ」

魔神の姿・カクセイ（後書き）

闇は素晴らしい

どんな者も等しく受け入れる

優しく包み込む

安心感を与える

それゆえに、全ての者は簡単に墮ちる

『自分』とこの闇に……

魔神の姿・狂氣

s a d

k i n g (前書き)

番外編企画中

魔神の姿・狂氣 sad king

エレスナーグ vision

力キン！

「ゼレカ……」

ゼレカは今、天使ときりあつて
いるなにを話しているのかはわからない

ボワア！

「……」

突然、大きな炎が燃え上がった

多分ゼレカの魔法だと思う

シユウツ

今度は白い煙りがでてきた

煙り、じゃなくて蒸氣かな？

「あつ……」

あれ『ランサー・ソロ』だ

じゃあゼレカが勝つたってこと?

そんな私の考えをあざむくように手がのびる

ガン!

「え?」

ゼレカが吹き飛ばされた

ガシッ

「あつ!」

結界が消える

何が起きたのか意識がついていけない

だめ……

冷静にならなきゃ……

ゼレカが負けるわけない……

うん……

大丈夫……

落ち着いたみたい

でも、落ち着きを取り戻した私の前には光が射していた

「…………っ」

驚きで言葉がでない

逃げる「」とはできない

間に合づわけがない

「ん…………」

咄嗟に手をとじた

「…………ヒヒッ」

…………

…………？

あれ？

何もおこらない

ねわぬねわぬ皿をあけてみる

「フフッ」

ゼレ……力？

！…？

あの姿…！

「ゼレ…」

「アア、心配すんなエレス。すぐ片付けてやるからよ」

「あつ……」

「こっちを見たゼレカの田…」

『紅』かつた……

いつも田じやない……

血に飢えた吸血魔（私達）みたいな、田…

「久しぶりだなア、ヴァジラ！」

「ああ？ 何言つてんだ」

「オマエと会つのは『あの時』以来だろ。オマエラが俺達を殺した時、な」

「……狂つたのか？」

「アハハ、25点の回答だ。残りは『怒り・憎しみ・絶望』。それ

ではれて100点だよな?」

「…………」

「マタイイサ、話しが戻そつ。マトから聞きたいと思つてたことが
あるんだテンシサマ」

「聞きてぇことだ?」

「俺のムネを貫いた感触、どうだつた?どんな氣分だつた?」「ハ
ハツ! そうか、『怒り・憎しみ』だつたか! なり答えてやるよ! と
つても気持ち良かつたぞ?」

「だよなー。ヤツパリそりだよなー。いやー、よかつた。俺と同じ考え
みたいで」

「はあ?」

ガシッ

「俺にこせじせじせみ。心臓^{ムネ}を貫く感触、考えたださう心躍るが、

……違つ

……」んなの

……ゼレカじゃない

「つー」

「サヨナラだ、ヴァジリー。」

「ゼレカ、やめて……。」

パリン

「あ…………」

剣が、折れてる？

「やれやれ、全く君は手がかかるね」

「お前が余計なことしたからだろ…………」

「おや？ 隙み付く氣力も無いのかい？」

「…………くわい」

さつきまで、ゼレカが刺そうとしていた天使の他に、もうひとり天使
がいた

「やあゼレカ。『その姿』になつたんだね」

魔神の姿・狂氣 sad king(後書き)

「やあみなさん。しばらく本編で出番がないので集まつてもうこ
ました」

メ「そりなの?」

アラ「まだ出番がないのね」

アス「それより、あの後のゼレカさんとエレスが気になるります~」

ベ「……俺も気になる」

「はつはつは。見事意見が分かれましたね。といつよりもリリー
ド兄妹は自分の出番そっちのけで本編が気になるなんてどうなんだ
?」

アス「別に心配なんとしてませんよ?」

ベ「……俺が視点の過去話があるからな」

「おおっと、爆弾発言。なら話題を変えて、本編の時間はみなさ
んは何してました?」

アラ「せつきの話を詳しく聞きたいけれど、私は自分の魔界で人
探しをしてたわよ」

メ「私は魔王の仕事をしてたわ」

ア「お兄ちゃんと遊んでた！」

ベ「……アスタノトと遊んでた」

デ「わあー、性格がですね。あとソリード兄妹はもう少し魔王といつ自覚を持つてくださいね」

ベ「……あいつらだつて似たようなもんだろ」

魔神の姿・狂氣 negative moodemon (前書き)

次回からは零花が魔界トリップしてきた話が始まります

魔神の姿・狂氣 negative god demon

ゼレカ vision

なんだ……

この気持ち……

この力……

フフツ、ハハツ、アハハ！

そつか

懐かしい『魔神』^{オレ}の力じやないか！

「フフツ」

ヴァジラの放つた魔力がゴミのようだ

速度だつて亀が歩いてるみたい

弱い……

それでも、いまのエレスとソルが喰らつたら間違いなく死ぬ

マモラナキヤな、ふたりを。ククツそのための力だからな

バキン

こんな剣一本折れなかつたのか、さつきの俺は

アハハ！ヤツパ守りたいなんて思つのは弱いな

さあーて

脚に魔力を纏わせて歩く

一瞬でふたりの後ろに来た

その後ふたりを抱えて横にずれる

フフッ、エレス。怖くて目をつぶっちゃつてるよ

アア、可愛いな

目の前に俺がいたらどんな顔するだろ？

おっ、皿をあけたな

「ゼレ…」

「アア、心配すんなエレス。すぐ片付けてやるからよ

全く、怯えてる君をみていろととても興奮する

ママ俺は『ヤサシイ』からな

そんなことはしない

もつひとつの楽しみもあるし

「久しぶりだなア、ヴァジル」

マズハあこやつから、これは常識だ

「ああ？ 何言つてんだ」

「オマエと余りのは『あの時』以来だる。オマエラが俺達を殺した時、な」

フフッ

「……狂つたのか？」

惜しい！

一つは正解だ

「アハハ、25点の回答だ。残りは『怒り・憎しみ・絶望』。それではれて100点だよお？」

「……」

アレ？ 難しかったか

「マニアイイサ、話を戻そ。マエから聞きたいと思つてたことがあるんだテンシサマ」

「聞きてぇ」とだと?」

そり、オレが聞きたかったこと

なんて答えてくれるかな?

「俺のムネを貫いた感触、どうだった? どんな気分だった?」

「ハハッ! そりが、『怒り・憎しみ』だつたかーなら答えてやるよー! とっても気持ち良かつたぞ?」

ヒヒッ、オレの予想通り

「だよな! ヤツパリそうだよなーいやー、よかつた。俺と同じ考えみたいで」

「はあ?」

剣を新しく四本創った

ガシッ

ヴァジンの両手両足に刺した

左手は動かないって言つてたけど、この方が確実だからね

「俺にもやりせりよ。心臓を貫く感触、考えただけで心躍るぜ」

楽しみだなあ

「ひー。」

「サヨナラだ、ヴァジラー。」

元から持つてた剣をヴァジラの心臓に掛けて突き刺す

「ゼレカ、やめてーー。」

「ひーーー？」

エレス、俺を呼んだ？

オマエじゃない。オレだ

いや、俺だよ。何かあつたら呼んでって言つたから
ママビツチだつていいだろ？ オレには関係無い

お前には無くても、俺にはある。『やめて』って言われたから

！？何言つてんだ。アイツを殺したいって言つただろ！？

言つてない。俺は言つてない。俺は『守りたい』って言つたんだ

……チツ。思つたより早かつたな。ん？

パリン

折れてんな

「あ…………」

「やれやれ、全く君は手がかかるね」

「お前が余計なことしたからだろ…………」

「おや? 騒み付く氣力も無いのかい?」

「…………くわい」

「やあゼレカ。『その姿』になつたんだね」

「フフシ、やうだなアシユウ。『忠告感謝しなきやなア?』

「別に忠告したつもりはないこれ。ただ君のその姿に興味があるだけだよ」

「ナラ、試してみるか? 今なら消滅への特急キップもやるぜ。片道
限定の」

「それは興味があるね。でも、生憎と今日は帰らなきや行けないん
だ」

「オレから逃げ切れる……と」

もういい……

何言ってんだ！アイツラをぶつ瀆しちまえよー。

エレスが言つただろ？やめてって。だから、逃げるなら見逃す

オマエは…自分の目的を忘れたのか！

忘れない。だけど、今の俺は『ゼレカ・ハヅキ』。お前が言つて
る目的は『葉月零花』の目的だ。俺じゃない

だからオレが出て来たんだろ！？

エレスの前では『ゼレカ・ハヅキ』で居たい。もう彼女に『葉月零
花（あんな俺）』を見せたくないんだよ

このバカヤロー！！

シユウカー

「……見逃してやるよ」

「あれ？ 戻つちゃったのかい？」

「だつた、ううした？」

「アシコラ、俺は帰るとは言つて……」

「『あの方』からの御命令だ」

「……わかつたよ」

「いや、何でもない。では、これにて失礼」

アシコラとアジラは光に包まれ、消えた

「ゼレカ、戻つた？」

弱々しい声で聞いてくる

「うん、戻つたよ」

エレスの頭を撫でる

「だから……安心……して……」

「サツ

そのまま力なく床に倒れる

「ゼレカ！？」

意識が飛ぶ前にエレスの声が聞こえた

魔神の姿・狂氣 negative god demon (後書き)

誰かが呼んでる

今の俺の知ってるひと

今の俺の大切なひと

今の俺の……

m y b o r d e r l i n e

始まりの時

my borderline (漫畫)

番外編エンドセリフかな……

あれ？

俺、どうなつたんだ？

『やつと目が覚めたか』

- ۲۷ -

久しぶりに会ったような気がするな

『そつだな。それより、せつかく封じ込めてたのに何でつかつたん
だ?』

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

「ふたりを守るのうと思つたら声が聞こえてきたんだ。そしたら、その声に導かれるように意識が同調した、それだけさ

『わかつてゐるか?』

「何がだ？」

『その意識が誰の意識か』

「その事か。もちろんわかっている」

『そ、うか』

「あれは俺の……いや、ちよつと前の俺だ。そりだらう。」

『その通り。お前が今と昔を決別するために隠した、『まいづる』ともお前自身だ』

「…………隠した」

『お前のあの時の氣持ちや』

「…………」

みんなを殺された時（あの時）、か

『その思いを忘れる、とは言わない。生物には、頭で理解出来ても体ではわからない事だつてある』

「せうか。珍しく神ひじい事言つたな」

『これが本業だからな』

「…………なあ、マムート。『魔神化』をもう一度制御する方法を教えてくれ

『…………ふつ』

「何だ？」

『なにを言つてるんだお前は。一度は制御出来たんだ、教えるもなにも答はお前の中だる』

「俺の……中に……」

『もうひとりのお前に頼らずに魔神化をつかう決心はついたか?』

「ああ」

『よし。なら行つていい。そして思い出せ。』

フワ

my borderline (後書き)

アスター・ゼレカ

ア「お兄ちゃんに似てますね」

ゼ「エレスを無邪気にした感じだね」

goe a of destiny 出会い・始まり（前書き）

糖度不足につき、番外編銳意製作中です

gea of destiny 出会い・始まり

「これは何時の記憶だ？」

とても懐かしい

でも、そんな昔の記憶じゃない

そうだ……

「これは、俺が初めてニンブルケティック（この世界）に来た時の記憶だ

age of destiny ～運命の歯車～

……ここか

片膝をついて下に向いている

「召喚成功です」

顔を上げる

周りには見知らぬ服装をしたひとが数人程いた

その中でひとりだけ違った服装をしたひとが近付いてきた

「よつこそ、異界の方。私はソルーティア、そしてここは魔界です」

「……ああ」

「貴方をお呼びした理由ですか？」

いや、その辺の説明は要らない

どうせ俺の目的は一つだけだ

「そうですか。それなら……」

ソルーティアと名乗った女性の後ろから聞こえた

「エレスナーグ様。いらっしゃったのですか？」

なんかぎこちないな

「どうあれ、ようじさん。私はこの城の主のエレスナーグ・クルスト・ホール・ニンブルケティック。あなた、名前は？」

「……ゼレカだ」

「そう……ゼレカね。一応はせつめこしておくれ。あなたを召喚したのはこの世界を救つてもらひたためよ」

あつきたりだな……

「具体的に何をすればいいかは私が指示するから、それをこなして。それとあなたに相手」

「わかった」

「……そう」拒みなんかしない

『アイシーフ』をぶつ瀆せるなら

「それなら明日から働いても、いつから今日は休みみなさい」

「……ああ

「それでは、お部屋まで案内しますね」

ソルーティアについていく

「リレーも一段落ついたところで、新しい事でも始めよ!」

ゼ「本当は?」

「このままだとシリアル過多でほのぼの不足です」

ゼ「そうかよ」

エ「具体的には何をすることですか?」

「ゼレカとエレスさんと今日は居ないけどソルーティアさんでの頃の感想を」

ゼ「……あの頃って……俺はやせぐれまくつたから今とは別人みたいだぞ?」

エ「ん~、私も悩んでたから、今とは別人みたいだと思つ」

「それが今は『ぶらぶら』……」

g o e a o f D e s t i n y 神話（前書き）

前書きのネタが……

「…………お部屋をおつかこなれ」

「ああ」

「それと明日の朝になつたひ、先程の『儀式の間』の隣にある『玉座の間』にこらじて下をこ」

「…………わかつた」

「あと、わからぬ」とがあれば……」

「それなら明日でわづへよ」

「承知しました。それでは、『ゆづり

バタン

「…………」

随分と普通の部屋だな

立つ物がベツドしかない

「…………まあ、どうでもここナビ」

そのままベツド横になつて田を綴じる

……何処だここ
…………

『お前の意識の中だ』

……ああ、自称『神』か

『自称言つな。俺は本物の神様だ』

……それで、何だ？

『いろいろ話しおれただことがあるからな』 そうか、そりゃまだ
具体的に俺の力について話してもらつて無かつたな

『他にも伝えることがあるけど、先ずはお前の能力説明をするぞ。
まず一つ目、お前の身体能力を上げた。これは基本的な運動能力を
この世界に合わせて強化したんだ、この世界で言う魔王クラスまで
な』

運動能力の強化
……

『一つ目、魔力を付与した。この世界では魔力がつかえるからな。
お前の本々の魔力を数十倍にしておいた。それだけの魔力なら誰が

相手でもボロ負けつついとはないだろ』

魔力、か

『そして三つ目、物質を創造する力。お前の魔力をつかい、物質を想像して創造する能力だ。ただし、生物は創れないからな』

……分かつた

『お前の能力説明はこのぐらいだる。次は魔力の説明だ。一応お前には全ての属性を扱えるようにしておいた。全ての属性を扱えるなんて滅多にいないんだぜ?』

……属性っていうと『炎』や『水』のことだろ

『属性は火・水・風・地の基本属性と、光・闇の特殊属性、時・空の次元属性がある』

……『氷』や『雷』なんかはないのか?

『氷は水と光が闇、雷は風と地を複合してつかうことができる。いわゆる複合属性つてやつだな』

……成る程な

『魔法に関しては自分で試してみ。お前の得意な属性を見付けたりしてな。後はなんかあるか?』

……俺やみんなを殺したあいつらは誰なんだ?

『…………』

「どうか、神にもわからないことがあるのか

『天使だ。それも普通の天使じゃない、大天使』

……大……天使……

『とは言つても、今のお前じや勝てない。絶対にな』

……どうすれば勝てる

『まずはお前の力を理解しろ。そしてその力を操れ。その為に、今はこの世界に慣れろ』

……ああ

『よし。これで伝えることは全部伝えたぜ』

……一応礼は言つとく

『お？…どんな心境の変化だ？』

……ありがとな、自称神

『おい！…いけどよ、別に』

……ふん

『…………頼んだぞ』

.....

?

「はーい、それじゃあゼレカとソルーティアちゃん、あの頃はどうな第一印象でした?」

「俺は前言った通りやさぐれたから『城のメイド』ぐらこそしか思ってなかつたぞ!」

「いや、あの頃は本氣で周りに興味なかつたからさ」

「……まあいこですナビ。私は面白くなつないひとだと思つましたよ」

「あの俺を見て?」

「ええ。そう思いましたよ?」

「そうなのか……」

「今では本当に面白うですナビね」

「面白いか……確かに『あれ』で半殺しだされた覚えはないよ」

「ゼレカさん、ちょっと血の池地獄で遊泳してみますか?」

「遠慮しておきますよ……」

g o e a o f d e s t i n y 準備中（前書き）

今日の天候の変わりやすいこと……

「…………」

まだ薄暗い……

「…………『想像創造』でも試してみるか」

柄の青い剣を想像する

刃、鞘、形、色、重さ、必要な情報を想像して意識を集中させる

「…………できた」

想像した通りの剣が創造されていた

「…………便利な力だ」

他にも武器を造つておこつ

そして次に先端の黒い槍を想像する

必要な情報を想像した後、先端の方に水のイメージを付け加えてみた

「…………水の魔力が宿つた槍か」

後は消耗品として剣を五本程造つておこつ

如何にも普通の剣を造った

「次は魔法を試すか……」

手に力を入れる

……何も起きない

「詠唱でもいるのか?」

そんなもん知らないぜ……

「……魔法は後回しにして、もっと武器を造るか

……で、これ何処にしまうか?

間に合わせで剣が五本、槍が一本、短剣が十本、銃が四丁

魔力を込めて造ったのが闇の剣、水の槍、炎の短剣、風の銃

普段つかう予定の青い剣、刃を増やした短剣、少し長めの紅い短剣、
黒い杖

「……こんなに持ち運べないぞ?」

ん、そういえば『空』って空間のことだよな

魔法はつかえなくても杖に『空』を付くすればいいんじゃない?

黒い杖に異空間をイメージする

「……できた」

振つてみると空間が割れた

その中に普通の短剣をいれてみる

もつ一度杖を振る

空間が消えた

違う場所でまた杖を振る

割れた空間の中に手を入れる

すると短剣があつた

「これは便利だな」

その中に普段つかう武器以外を入れる

杖を振る

「……服もこいつの世界っぽいのにしておこう」

今の俺は制服のままだ

死んでから着替えるあれも無かつたからな

確か、周りのやつらはローブを着てたからそんなかんじの服がいいのか

俺は羽織るタイプの黒いロングコートと青いトップス、黒いボトムスを想像する

ある程度の衝撃は和らげるよつに属性を指定しないで魔力を込める

「いんなもんだろ」

今着ている服は異空間に入れて、創造した服を着た

腰に剣を差してコートの内側に一本の短剣を入れ、ボトムスの足の部分に杖をしまう

「……そろそろ行つてみるか

「お前しかでねえ」

「そうだな」

「このまま語らせると一人で喋る危ない子になるから……」

「誰が危ない子だ！」

「とは言ってお前これみよがしに部屋で一人喋つてたよね？」

「……」

age a of destiny ものの問題（前書き）

早くこのじゅうこつもの日常編に戻したいです

sea of destiny #の問題

「…………昨日の部屋の隣だったよな」

「俺に『えられた部屋から昨日の部屋に向かう

「…………『玉座の間』、ここが

扉を叩こうとする

……ん?

「もつ一度言つてみなさい……。」

「だから、『赤の宝心』をとつて来たら女を下さって言つたんですよ。それともお姫様、あんたが相手をしてくれるか?」

「マローー様、誰に口を聞いて……」

「俺は魔界連合軍結集組織『空襲部隊』隊長だぞ? そいつが誰に口を聞いてるか分かつてるか?」

「へへ」

「いい、ソル」

「わかりました……」

「アローラ、一応あなた達は私の部下。それだけは覚えておくれ」と

「くつ、はいよ」

「報酬の件も考えておくわ」

「おひ、期待してもいいってことか?」

「それは働き次第」

「ならわいつわと『赤の宝心』をとつてくねむ。といつわけで行くぜ」

扉が開く

「ん? 誰だお前?」

「……」

「ああ、お前が例の『救世主』か。くつ、弱そうな奴だぜ」

「……失礼する」

扉を閉める

「ああ、こりつしゃいましたね」

「一応はようひや」

「……どいつも。それで、俺はどいつもばい?」

「話しが早いのね。まあいいわ、とりあえずあなたには『赤の宝心』

をとつてきてもらいたいの

「それは何処で手に入るんだ？」

「『レジドファング』という魔物の体内にあるわ

「わかった

さつきの奴と同じ仕事か

後ろを向いて扉に向かう

「待つて」

「…………何か？」

「あなたは報酬をよこせとは言つてこないのね

「…………興味ないからな」

「そう

扉を開ける

「…………な」と

「？」

扉の向こうでエレスナーグが何か言っていた気がした

そりこえれば『レッドファング』というのは何処にいるんだ?

血室まで来て思つた

まあいいか……

外に出よつ

……外はどつちだ?

「あのー……」

誰かに後ろから声をかけられた

「……何か?」

「もしかしてお密さんですか?」

「……そんなところかな」

「あつ、やつぱりーはじめまして、私クレアと言つます!わからな
い」とや不便があつたら何でもお申しつけ下せ!」

……声が大きい

まあ、ここに聞いておくか

「……なら、『レッドファング』は何処に行けばあえる?」

「レ、『レッドフラング』！？何しに行くんですかー…？」

「…………『赤の宝心』をとっこ」

「『赤の宝心』つひ」とは姫様の頼みですか。それならこの城の裏口から出たといふの荒野を真っ直ぐ行った森にいますよ」

「…………やうか。後もう一つ、裏口つて何処だ？」

「裏口はそここの階段から下の階に行つて右側に進んだといふにあります」

「…………ああ、助かつた」

「いえいえ、これが私のお仕事ですから」

クレアと名乗った女性とわかれて階段を下り、裏口に向かった

ゼ「あはは、全く今と雰囲^{ムカイ}気違つ……」

エ「お互^{シマツ}い暗いね」

ソ「一、三ヶ月前の出来事ですよ？」

ゼ「そうか、まだそんな……と言つても魔界マジイと下界アッカじゃ四面シラベ八方ハヂハ」
時間の進み具合が違うから俺の感覚で一年は経つたかな

ソ「一年ですか……人間の体感速度は早いですね」

ゼ「悪魔（魔神）になつても体感速度は変わんないけど」

エ「あつ、そつか。この頃のゼレカはまだ人間ヒトジンだつたんだよね？」

ゼ「そうだよ。『あの時』から魔神になつたんだから」

エ「『あの時』か。客観的に見てみたいな~」

g o e a o f d e s t i n y 共通(前書き)

今日は少し長めです

「……………」

城を出てからどのくらい経つた?

走っていないから確かに遅いと思うが結構経つたぞ

「……………ん?」

視界の端に縁がちらついた

「……………着いたか」

真っ直ぐ歩いてたつもりが少しずれたな

「……………あーー、狩るか」

剣を抜いて森に入る

ところどころの木に爪の跡や尻尾らしきものがぶつかった跡がある

「……………せういえば『レッヂファング』つてどんなやつだ?」

わらわのメイドにそれを聞くのを忘れた

「グルルル」

「……………」

目の前に赤いトカゲみたいなのが現れた

「…………わあーお」

別に驚く事でもないけど……

「グワアア！」

「…………おつと」

噛み付いてきた牙を剣で押さえ……

スパッ

簡単に切断できた

「…………脆い」

「グアアアアーー！」

レッドファングが痛みで尻尾をぶつけてきた

「…………くつ」

まともに脇腹に喰らうそのまま左に飛ばされた

「…………ん？」

そんなに痛みが無い

これが『身体強化』……

魔法……そつか

「アアアア！」

「……奔流、激流、全てを洗い流す水。『スプラッシュアウト』！」

レッドファングの周りから水の壁が出て、レッドファングを飲み込む

「……すげえな」

シュー

水が引いたらレッドファングは倒れてた

「…………」じつの体内にあるのか

剣を真心突き立てた

グチュ

真っ黒の液体が飛び出る

「…………ん」

心臓ら辺に紅い宝石があつた

「……これが『紅の宝心』か

拳より少し大きい澄んだ紅い色の完全な球体が採れた

「……他には

試してみたら爪や牙、尻尾の中にも宝石があった、けど色も濁った赤だった

「…………一通りは持つて帰るか」

丈夫な硬度の袋を想像する

その中に宝石を入れる

「……後何体か狩るか」

「…………ふう」

十数体程狩つたな

魔法も少しだけつかえるようになつたし、いい訓練になつた

「……帰るか。……速度、流れ、突き抜ける風。『リードフロウ』

さつき覚えた風の魔法

これを足に纏えば三倍の速度で歩ける

「…………」

「…………あつという間だつたな」

走つてみたらあつさり城の裏口に着いた

ガチャ

扉を開けて中に入り階段を上がる

「…………そうだ」

杖を取り出して振る

重いから異空間に預けておいたんだつた

「…………重い」

拳より少し大きいぐらいのが数十個と小さな石ころのカケラみたい
なのがどつぶりつまつた袋を引きずる

ズルズル

玉座の間に着いた

「どうですか姫様？『紅の宝石』をたくさん集めできましたよ？」

「私が頼んだのは『紅の宝心』のはずよ?」

「冗談言わないでトセコ。あんな物妄言の代物ですか?」

「……まあいいわ。宝石の方でも数十個でそれなりの物になるから」

「数十個?五個集めてただけで大したものだり?このカケラ一個
だって集めるのに此処の一個小隊何チーム遣うと思つてんだ」

「それもそうね……」

「Hレス…」

「あんたなんかに頼まなきやいけない程、今は衰退してるわ

「言ひなー、姫様。で、報酬は?」

「はあー。しばらぐ分のお金を…」

「それよつよ、『あれ』くれよ『あれ』

「……何?」

「王家に伝わる秘宝『黒け…』

ダン!

「あなたは一体どれだけ私を馬鹿にすれば気が済むの?」

「マロー様、姫様に対しての宣戦布告ひとつても?」

「はっ！」この俺にそんな事言つて大丈夫か？今だつて命懸けで姫様の頼みを真っ当してるんだ。俺が聞かなきゃ誰が聞くんだ？」

…………むかつく

話しを聞いて確信したが、――いつはむかつく……

エレスナーグを馬鹿にして……あれ？

むかつく？

俺がむかついてたのはみんなを、俺を殺した天使だ

他の誰かの為にむかつく必要はない

でも、なんとなくむかつく

だから、助けてやりたい

そう思うのはなんでだ？

ガチャ

「……失礼する」

気が付いたら扉を開けてた

「あつ？」

「……つべ。ゼレカ、何の用」

エレスナーグの座っている机に近づく

重たい袋をひきびつて

ドサッ

袋を机の上に置く

「…頼まれた物だ。この紅い球でよかつたか?」

「えー?」

「はあー?」

「…………『紅の宝心』。こんな、こんなにたくさん…………」

「これで間違いないか?」

「…………うん。確かに、あつてるよ

「…………そつか」

「おい、まてーお前あれを何処で…

「…………狩ったんだよ、『レッドファング』を

「狩つたって、俺も狩つたぞー?」

「……お前は牙や尻尾を斬つてびびりながら集めてたんだろ。その証拠に転んだ跡や牙が少しだけ折れたレッドファングもいたからな。お前はびびってた、それだけだ」

「なんだとこいの…」

「……それでゼレカ。報酬は何がいいか言つてみなさい」

「……別にいじよ。強いて言えればこの世界について教えてくれればいいや。それじゃあ」

後ろに向いて扉に近づく

「じゃあ後でこの部屋に来て。この世界について教えてあげる」

「…ああ」

ガチャ

「……それで？」

「……わかった。金でいい」

「やつ……」

……とつあえずすつきつした

……誰かの為に怒る、か

ゼ「なつかしいなあー」

H「Jの時はホントにおどろいたよ」

ソ「まさかあんな量を持つてきて』…………別に『…ですもんね」

H「あはは、そっく～」

ゼ「俺が聞いてもそっく～だと思つた……」

H「Jの後つて、ふたりで話すといひだよね?」

ソ「Hレスが私に『少しふたりで話しがしたい』って言つから私は
できませんよ」

ゼ「へえー。あの時から俺に興味がわいたと」

H「……ん、ん／＼」

ソ「図星ですもんね」

PV100000突破記念『特別対談』（前書き）

「1000000……励みになります！」

デ「やあー、暗いーとこうじとで番外編でー…」

コジン！

デ「痛い」

ゼ「バカヤロー、何本編シリアスの真つ最中なのに雰囲気がぶち壊してやがるんだ」

デ「だからだろ？連続してあんな」とやつてると気分が沈むしよ

ゼ「はあ。まあいいか、とりあえずは一段落着いたからな」

デ「今回の番外編は何にしようか迷ったんだけど、とりあえずシリアルモードになる前みたいにほのぼの・あまあま・ロメティーロ線で進行しようと思つ

エ「ホントに最近は少なかつたですもんね~」

デ「書いてるのも『糖度たりねーーー』と何度も思つたことが

ゼ「あー、まあいいんじゃねえか

デ「ところが、この話は普段の話の何倍かの長さを予定してます

「…」
「あと、まあ前置きも終わつたところで何する?」

ゼ「それを考へとけよ」

エ「後書きでやつてたリレーを本人の前で書つとかおもひつけじやないですか?」

デ「いや、それだとひとりだけネタバレするから」

ゼ「書い相手をワンドームにすればいいだろ?」

デ「ああ、それもそつか」

デ「それじゃあ参加者はこんな感じで」

ゼレカ・Hレス・ソル・アルフォート・メフィスト・ベルゼブ・ア
スタノト・アラクネ・バルチス・ショイド・マリーナ

デ「ショイドとマコーナが新しく加わったね」

ゼ「それはいいが、あのふたりと会つたのつて俺だけじゃね?」

デ「気にしない気にしない」

エ「どうやって決めるんです?」

「……」
「『くじで決めよ』と黙つ

H「完全にランダムですね」

「……」
「そこがおもろいくなるといいわよ」

「……」
「誰がそのくじをひくんだ？」

「俺が……とこたいといふだけだ、絶対仕組んでると黙われそうだからHレスさんにはもうおつと黙もつ」
「うつむけたまはりおつと黙もつ」

E「私がですか？」

「それなら安心だな」

「ああ、それではひこちやつてくださいーーー。」

H「んへつと、よつと」

「誰だつた？」

H「フードだよ」

「……？」

「アルフォートがそつ呼んでいこつて」

「あいつが……ほお……」

アル「我か」

デ「じゃ、その部屋で待機しててください」

アル「ふむ」

H「それじゃあフートの相手は……。」

ゼ「おつ」

デ「へえ」

対談部屋

シ「おつと、お前かアル」

アル「ご無沙汰でしたな兄上」

シ「堅苦しいな。昔みたいに話せよ」

アル「そつか?なら、そつか?」

シ「変わり身早いな」

アル「そもそもしが兄さん。こんな長話していくいいのか?」

シ「ああ。別にゆづくつでいいってゼレカに言われた」

アル「……せらじこや」

シ「とは言つても、あんま時間かけんのも悪いか」

アル「そうだな」

シ「何を言つんだっけ?」

アル「相手に対しても思つてること」

シ「やうだつたやうだつた」

シ「お前は、立派に誇れる弟だよ」

アル「…………そんな」と改まつて言われると照れる

シ「ふつ、お前の番だぞ」

アル「……兄さんは、とても弟想いの兄さんだ」

シ「……ほんと、照れるな」

アル「やうだよな」

スタジオ?

デ「いきなり兄弟の感動の再会でしたね」

エ「ホント感動的でした」

ゼ「アルフォート……俺はお前がわからないぞ」

デ「それでは次、いってみましょ~」

エ「次は~、つと」

デ「あはは」

ゼ「まあ妥当だろ」

デ「面白みは無いけど」

対談部屋

マ「あら?」

シ「マリーナ?」

マ「貴方でしたの」

シ「まあお前相手なら言ひ」とは決まつてゐるけど

マ「私もよ」

シ「俺の

『大切なひと』マ「私の

スタジオ

デ「短い会話になつたけど」

エ「お互ひの信頼が伝わつてきますね」

ゼ「……これを公開していいのか?俺もこれをやると悪いと憂鬱なん
んだが……」

デ「公開しなきやわからないだろ?誰が誰に何を言つのか」

ゼ「…………悪趣味」

デ「それじゃあ次いつてみよつ」

エ「えい、あれ?」

ゼ「おい、接点あるのか?」

デ「どうでしょ?」

対談部屋

アス「やつほ~、久しづりマリリン」

マ「アスちゃん!わあ一本本当に久しづり」

アス「まだ放浪してるの?」

マ「ええ。でも今は家に帰つてるわ」

アス「そつか、確かに二ンブルケティックにお家があつたんだっけ」
マ「またすぐに旅にでるから、その時にリリードネメシスに遊びに行くね」

アス「うん！楽しみに待ってるよ！」

マ「私の初めてのお友達」

アス「命の恩人さん」

スタジオ

デ「知り合いだった、というね」

ゼ「（そういうえば遊びに行くって言つてまだ行つてなかつたな）知
らなかつた」

デ「お前結局遊びに行つてないし」

ゼ「……お前、マムートの親戚か友達？」

デ「いや」

ゼ「そうか」

デ「あーーー……」

ゼ「おいディン。エレスは？」

デ「ん」

ゼ「ん?」

対談部屋

アス「あはつ 私、友達に恵まれてる」

H「そうだね 私も同じ」

アス「お互い魔王になってから昔みたいに会えなくなっちゃったけど、今でも約束忘れてない?」

H「もひちるん。『ずっとずっと友達で、親友でいよ』」

アス「親友で、幼なじみで、同僚で、ずっと昔から一緒にいたね」

H「これからも一緒にいよ」

アス「何があつても」

スタジオ

ゼ「えつと……ベルゼブ、お前どう思つ?」

ベ「……皿合」

ゼ「そりじゃなくて、なんで同性同士なのに今まで一番うまいの

か……つて相合だから?」

ベ「……ゼレカ、一つ置いておぐが」の世界は女性同士と重婚は可能だからな

ゼ「それは知ってる、というかお前に名前で呼ばれたのってすげー久しふり」

ベ「……今は隊長じゃないだろ」

ゼ「そうだけど」

デ「投げました」

ゼ「いてつ、何しやがる」

デ「ふつふつふ、見るがいい」

ゼ「何を見ひつて……」

デ「まはは」

ゼ「…………消せよ? カメラ」

ベ「…………わざと行ひついこ」

アス「ゼレカさん、楽しみに見てますから」

ゼ「…………」

ゼ「カメラが廻つてると思つて憂鬱だ……」

H「まあいいじゃない。だつてみんな条件おなじなんだしさ」

ゼ「…………何だから」へ楽しそうに見えるけど、

H「そう? なんでだか?」

ゼ「…………周りにひつぬけの状態で言えと……」へ思つてるか」

H「もしかる」

ゼ「（完璧のモード入つてるな）…………ホントに俺が恥ずかしいと思つ時はひだよねエレスつて

H「そうちかな? 私は困つた顔を見るのが好きなだけなんだけど」

ゼ「そのわりには一緒に寝てる時とかは皿をあわせないよね」

H「だつて、恥ずかしいから」

ゼ「まさか今その気持ち…………あつ」

H「えりしたの?」

ゼ「（…………）の会話外につつぬけだつたんだ）…………ふう、忘れてた。Hレス、俺の大切で主で助けてくれた俺のお姫様」 チュツ

エ「ふふふ。だったら、貴方は私を籠から出して世界を教えてくれた大好きなひとだよゼレカ」

スタジオ

アス「ゼレカさんて結構大胆な事するんだ」

ベ「……ヘタレではないな」

アス「それはお兄ちゃんでしょ」

ベ「言わなくていい」

エ「ただいま~」

アス「エレス、結構誘つてたね」

エ「そうだった?いつもとあんまり変わんないよ

アス「そつなの!?.いつもあんな感じ!?.」

エ「あ、でもお風呂の時よりはそつでもないかな」

アス「お風呂?」

エ「みんなで入れるシャワーみたいなもの」

アス「~~~~~!-/~/~~~~~」

プシュー

H 「あれ? アスターント?」

ベ 「……ははつ」

デ 「果てしなく面白いけど、次始まつたらよ?」

対談部屋

ゼ「つてことかな」

ソ「そうだったんですか。私の予想とは違つてました」

ゼ「大体は間違つてなかつたけどね」

ソ「いえ、おおまかな部分は合つても基本概念の違いは決定的ですから」

ゼ「ははは……。頗る貴女らしくや」

ソ「…………ゼレカさん。私、一応は貴方より年下ですよ?」

ゼ「そうだけど……雰囲氣的にさ」

ソ「私に限らず女性は実年齢より高い年齢だと思われるのをよしと
はしません」

ソ「呼び捨て……ですか？」

ゼ「エレスといふ時の雰囲氣なら十分年下に思えるからさ」

ゼ「よく出来ました」

ソーヘ、変じやなかつたですか？／＼／＼

ゼ「大丈夫だよ。君とエレスつて本当の姉妹みたいだよね。いつも
することが恥ずかしいなんて」

ソ「ゼレカ……さん、貴方にだけお話ししておきますね」

ゼ「何を?」

ソ「実は……」

スタジオ

デ「ストップ！！」

「どう、どうしたんですか！？」

デ「あははは……次、いつてみようか？」

エ「え、でもゼレカまだ戻つて来てませんけど？」

デ「それは大丈夫、次の相手はメフィストだから先に対談してもらえばいいじゃ」

エ「じゃあメフィストの相手を選びますね」

デ「（びっくりしたぜ）」

エ「よつと、うん。ピッタリ」

デ「面白い結果になりました」

対談部屋2へ続く廊下

ベ「……メフィスト？」

メ「あら、ベルゼブ。貴方もその部屋に呼ばれたのね」

ベ「（……まさか対談じゃないよな。ふたり同時に呼ばれたし）…
…ああ」

ガチャ

ベ「……」

メ「誰も居ない？もしかして、対談？」

ベ「……多分そうだろ？（……ゼレカ、すまんお前の気持ちがよ

くわかった)」

メ「はははーよかつた。ベルゼブが私をどう思つてゐるのか聞けて」

ベ「……言わなきや駄目なのか?」

メ「私が先に言おつか?」

ベ「……笑うなよ。……お前は俺が生涯を通して守つてやる。……
だから、お前を好きでいていいか?」

メ「もちろんよ。……嬉しい。貴方に、私の運命の王子様に言
われるなんて」

ベ「……／＼／王子つて、俺は大魔王だ」

メ「照れてる」

ベ「……／＼／否定はしない」

スタジオ

デ「ラブラブだなー」

エ「大人な関係ですね。いいなあ～……」

ゼ「結構進展してたんだ」

エ「あれ、ゼレカいつの間に帰ってきたの?」

ゼ「結構早い段階で帰つてたよ」

エ「そうだった?」

デ「カメラだけきつてもう少し待てばよかつた」

ゼ「そういうえば次は誰だ?」

デ「一応ベルゼブとアラクネ何だけど……」

ゼ「だけど?」

デ「カメラみてみ

ゼ「?」

対談部屋2

メ「あははは、ベルゼブ~」

ベ「……カメラ廻つてるんだぞ? // /」

メ「別にいいじゃない。それよりも…」

スタジオ

デ「終わる気配が一切無い」

ゼ「……だな」

エ「アラクネの相手も一応決めたけど……」

ゼ「……残つてゐるのつてたしか……」

対談部屋3

バ「……」

ア「ねえ」

バ「は、はい！」

ア「貴方つて、どこかで私と会つたことある？」

バ「い、いえ、今日が初対面です」

ア「そう……。貴方によく似た人が知り合いにいたものだから、ごめんなさいね」

バ「いえ……」

ア「何処に行つたのかなあ……」

バ「……その人つてどんな人なんですか？」

ア「……あの人は私を人としても、悪魔としても理解してくれた、たつた一人の大切な人。『私と同じひとは何処にも居ない！』って

言つた時も『この世界にお前と同じひとが沢山いたら、俺は誰を愛せばいいかわからなくなるだろ?だから、お前はひとり。俺が愛するお前はひとつ』って

バ「……そうなんですか。ありがとうございます、話してくれて」

ア「うふふ、何か貴方になら話してもいいかなーって思ったの」

バ(ボソッ)「……悪いなアラクネ、もう少し待つてくれ」

ア「ん?」

バ「何でもないです」

スタジオ

エ「ばれなかつたね」

ゼ「ちよつと本性でてたけど

デ「ああーで、いよいよ大詰めになつてきた。それと、全員終わつたらどうせきつしかけるから」

ゼ「……どうきつしかけるって言つていいのか?」

バ「はあー」

対談部屋3

アル「どうした？」

バ「のろけ話を聞いてた」

アル「ふつ、それは災難だったな」

バ「いやあ、ただののろけならいいんだけど、内容がね……」

アル「過激だつたと？」

バ「それなら恥ずかしいで済むから全然大丈夫。ただ、その相手が
ね……」

アル「……苦労してるんだな」

バ「ホント、助かるよアルフォートが居てくれて」

ア「ふつ、お前は面白いからな、特別だ」

スタジオ

ゼ「……なんか今まで一番スマーズかつ清々しく進んだな

エ「友情みたいなのが伝わってきます」

デ「さて、一通り終わつたかな

ゼ「どうきりか？」

H「どんな遊びがあるんですか?」

デ「ふつふつふ。それは……」

ゼ・H『それは?』

デ「それは……」

ゼ「びっくりしたわ！後書きまでひつぱるなー。」

H「もしかしてこれがどつきですか？」

デ「まさか。びっくりのまゝのPVの番外編について」

ゼ「番外編？」

デ「この番外編って実は本編が暗いからって理由じゃないんだぜ？途中まではそれが理由だったけど」

ゼ「どうだよ……」

H「じゃあ何かの記念なんですね」

デ「大正解ーPV100000記念だぜ！」

ゼ「おおー、それはあつがたい」

H「読者の皆さん、ありがとつ！」それこそわー

デ「それではー」

夏が……終わる……だと！？

「よくきたわね」

「……一応来いと言われたからな」

「とりあえず座って」

促されるまま椅子に座る

「さつさはありがと」

「……別に、なんかむかついたから」

「……それで、『』の世界の事を教えてほしかったのよね?」

「……ああ。全く別の世界に来たわけだから」

「『』の世界は魔界『ニンブルケティック』。あなたが元々何処の世界にいたのかは知らないけど、ここには悪魔しか住んでないわ」

「……悪魔って一すべりにしてもどのぐらいの種族が住んでる?」

「種族のことは知ってるのね」

「……自称イタい奴に知らされてたからな

「ま、私やソルをはじめとした『吸血悪魔』」

「この娘吸血鬼だつたんだ……」

「次に、好戦的のが多い武闘悪魔とも呼ばれる『不死悪魔』。でも不死と言われてても死ぬけどね」

「…………不死なのに死ぬのか?」

「不死と呼ばれるゆえんが回復速度だから。回復速度を上回る力で攻撃されれば、あっけなく死ぬわ」

「…………ふーん…………」

「そして一番多い種族が城下街で暮らしてゐる『吸收悪魔』。空気中の魔力を吸収して魔力を補充してゐるから、戦闘能力はほとんどない

「…………なるほど、種族について大体分かつた」

「後は…………それぞれの在り方かしらね。さつき言つたように『吸收悪魔』は空気中の魔力を吸収して生きてゐる。『不死悪魔』は体内の魔力を回復させつつ外部からも魔力を補給できるわ」

「…………吸血悪魔は?」

「その名の通り血をすつて魔力を得てゐるの。血は魔力の塊みたいなものだから。でも、中には『赤血』の持ち主もいる」

「…………『赤血』?」

「血が赤い悪魔のことよ。普通の悪魔は血が黒いわ。だから、赤血の悪魔は昔から狙われ続けてきた。同じ赤血の悪魔からも、普通の

悪魔からも

「話しが逸れたわね。『吸血悪魔』で『赤血』っていうのが一番厄介なの。赤血の場合は赤血をすわなければ力が衰えてくし、普通の血をすつても魔力が大して得られないから」

「……………そなうなのか。それで、君は一体どこのへりうい血を吸つてないんだ?」

「えつー!?」

「赤血…………なんだろ?君は

「…………よく分かつたわね。私が赤血だつて」

「話している君の顔が怯えてたからだ」

「……………インブルケティック家は代々赤血なんだ。だから王でいたれた、あいつが来るまでは……」

「…………?」

最後の方はわざと小さな声で言つたらしい

「そんな感じかな。他には?」

「…………魔法について聞きたいかな」

「魔法？いいけど、つかうのは難しいよ」

「…………構わないぞ」

それで『あいつら』を倒せるなら……

「魔法……魔術とも呼ばれてるけど、呼び方が違うだけでほんしつに変わりはないわ。それで、魔法の発動には詠唱と魔力が必要になる。これが魔法の基本概念よ」

「…………詠唱はどうやって知ればいい？」

「すでに完成された魔法にはあらかじめ創られた詠唱がある。それは魔術書なんかに載ってる」

「…………なら、完成されてない魔法の詠唱は？」

「それは普通の魔法がつかえてから考えればいい。…………そうね、『中級以上の魔法』がつかえるようになつたら教えてあげるわ」

「…………どうか。中級つてやうのがどの程度かは知らないが、漆黒、迷走……」

「…………？」

「鎮された道を探す愚者に安寧なる眠りを込めて。『深闇の羽衣』^{デルトビューラ}」

辺りに真っ黒な膜ができる、この部屋を包む

「…………大した魔力も込めないで殺傷能力もゼロにしておいたから心

配は無い

「うそ…………」れつて……」

「これは中級以上なのか？」

「……上級魔術。それも大昔につかわれた『対大型魔物用捕獲魔術』何処でこれを？」

「……部屋にあつた本に書いてあつた」

「……それが魔術書よ。その本に別の魔法も書いてある」

「……そつか」

「それなら、さっそく教えてあげる。新しい魔法の創り方」

「……」それで、少しは勝利に近づいたのか

「ボッシューンやつてみよ!」
テ

「……何を法えてるんだ?」
ゼ

「……何が?」
エ

「……やうか、これだけは言つておくれ。俺は君と敵対するつもりはない」
ゼ

「信用できない、って言つたが?」
エ

「……俺には目的がある。その目的の為に、俺は力がほしい」
ゼ

「……わかつた。新しいまじつを教えてあげる。……歯んじやつた」
エ

「聞こくへいもんな」
ゼ

「……まあこんな真似どりいつかなつて思いました」
テ

「ホントに歯んじやつたと思つた」
エ

「やうこえればあえて魔術じゃなくて魔法つて言つたね」
ゼ

area of destiny イケイヒ(龍書き)

学校があつたので停滞しました

「……つていうこと。わかった？」

「ああ。教えてくれてありがとうございます」

「手柄をたてた者にはそれそういうおうの報酬をあげるのが王族のつとめだから」

「そうか。それじゃあな」

「あつ、言い忘れてたけど陽があちたらまたさつきのところに来て」

「……わかった」

力チャ

…………魔術も覚えた

「これで勝てる……はずだ

確証がないのが不思議だ

なぜ？

「これだけ力があれば勝てる、そう思つたのに

『絶対に勝てない』そう思つ……

ああ、そうか……

理解した

誰も俺を信じてないからか

俺を信じてるのは俺だけ

だから確証が無いんだ

此処にいるやつらも俺を救世主なんて思ってない

昨日の夜に聞いたあの会話……

「Hレス、今度の救世主は頼れそりじやない？」

「別に、どうせ頼る気もないしどうでもいい」

「……ねえ、それなら『あいつ』『ひいてみた』の世界から這い出す事を考えた方がいいわ」

「それが出来たらくろいにならによ。いちこさ『イケニエ』を召喚したりしない」
（……）

「『イケニエ』か……。でも、これじゃあ何時まで経っても『あいつ』の支配下

「……私には、どうする事も出来ないもん。ただ、あいつに従つて機嫌をとるだけ」

「Hレス、私以外のひとに頼ることも大切よ。だから、今回は仕事を彼に任せてみたら?」

「……あの『イケーハ』に?」

「貴女の為にも、誰かに頼ることは必要。それが私の気持ち」

「ソルがそこまで言つんだつたらそうしてみる」

扉の向こうから聞こえてきた会話。それが異様に耳に残った

イケーハか……

そんなもんだと思つたさ。俺の扱いなんて

それでも、誰からも信じてもられないよりはマシだ……

だから、俺は逃げない

何処にいる?

話していると周りを笑顔にしてくれた君は

照れて優しさを見せないけど、本当に優しい貴女は

掴み所が無く、フワフワと浮いてるようだ誰とでも打ち解ける君は

そして、俺が必要と、信頼して、愛してくれた貴女は

一体、何処?

g o e a o f d e s t i n y 新たな決意（前書き）

前話のゼレカとギャップがありますが、まだ夢から覚めてません

俺は今湖にいる

城から少し、いや結構離れた赤く濁った湖だ

「……ぐえ」

みているだけで気持ち悪くなりそうな色だったの、早いところ用事を済ませる

まず適当な石ころを投げ入れ水面下に振動を伝わらせる。その後革袋（異空間から取り出した）の中から何かの生肉を沈める

「……気付いたか」

その直後湖の中に黒い影が現れる

その影は徐々に大きくなり、そして水面から出て来た
「ぎや……」

「悪いな、説明するのが面倒なんだ」

水面から出て来た青い魚の様な生き物を槍で仕留める

魚は優に20メートルを越えるぐらいの大きさだったが、魚の急所であるエラ（？）に相当する部分を狙つたから大きさ関係無く、一たまりもないだろう

「 セーと……」

魚を地面に引つ張り出して口の中に入る

……真つ暗だ。わかつてはいたけど

そのまま勘で進んで肝（？）に到着した

途中槍で無理矢理道を作ったが、気にする程でもないだろ

左手で持っていたペンライトを着けて周りを確認する

「これが『秘薬の肝』か

リックハート

ただの肝にしか見えないけど……

早速その肝を無傷のまま取り出す。一応ダミーと変えながら

この肝が無くてもこいつは死なないらしい。だからダミーとすり替えて、治療してやれば元通りってわけだ

「…………こいつも肝のダミーの色がなぜに真つ青っ。」

普通肝つて言ひたらピンクっぽいイメージだけどなあ……

なんてことを思いつつ『秘薬の肝』を丁寧に紙（もちりん頑丈なよう）に造つて（で包んで異空間ボックスに入れる

「 ああ、戻るか」

来た道を引き返して外に出る

……息が苦しい

びつやう治癒する前に田を覚ましたらしへ再び水中に戻ったようだ

随分タフなんだな

「へ、感心してる場合じやねえ」

急いで地上に戻る。が、

「あれ？ 息出でてる？」

水中なのに普通に喋れるし苦しきもない

ま、いつか。分からぬ事があればまた聞いてみよう

「ふうー、結構深く潜つてやがったな」「

水面から上がり服を乾かす。その間に魚もどきの体内で見つけた物を見ている

「……よくわからん。とくに事で全て土産にして渡すか

革袋を取り出してその中に……

「……随分と肉が余つてゐるな」

確かにこの生肉は持ち帰つてこなくていいって言つてたな

「といつ訳で残りはこの湖に投げ入れていくか」

余っていた全ての生肉を放り込む

「じゃ、帰りましようか…」

「ギュルルルル」

「ん?」

何かの鳴き声が背後から聞こえてきた

「あれ? まさか怒ってる?」

『いえ、怒っていませんよ』

……はい?

「もしかして言葉通じてる?」

『もちろん』

うん、まあ生き返つり異世界に来たり魔法が使えたりしてるのはだから、今更誰と言葉が通じようが驚かないさ

「えーっと、怒っていないなら何用で?」

『お礼に参りました』

「お礼?」

『貴方のおかげで仲間の『秘薬の肝』が摘出された事と食糧を『えてもらつた事にです』

まさか肝を摘出して感謝されるとは思つてもいなかつた

『一般に『秘薬の肝』と呼ばれる物は、私達の身体に良い影響を与えません。ですので、私達の群れにいる肝を持つ仲間の肝を摘出してもらい、本当に助かりました』

「そうなのか」

『ええ。それも命を奪うわけでもなく肝のみを摘出するなんて、普通の悪魔では考えられない行動です』

だつて俺人間だもん。悪魔では無いから

「別にいいってことさ。じゃあ、俺は帰るんで」

『わかりました。ではこれを』

そう言って小さな青い笛が田の前に浮いていた

『この笛をこの湖で吹いていただければ、おもてなしをさせていただきますか』

「どうも。また来る事があればそいつをさせてもらひよ」

空中に浮いていた笛を受け取り礼を言った

「後はいつも通り（とこつても）『回田だが』『リーダフロウ』を使い速さを上げて城に向かう

「はあー。どうせ戻つてHレスナーグに渡しに行つたら、あいつがいるんだろうな。まあ、すぐに黙らせてやるけどさ。なんか険悪な感じだし。そういうばソルーティアもあんまし好意的な態度ではなかつたな、あいつに対して。いよーっし、今回はフレンドリーな感じで話すか。なんて独り言つてゐる間に到着」

裏口から入る

……そういうば何で俺は毎回裏口から入つてゐるんだ？まあ裏口と言つても城下街の裏門を通して入つてゐるわけだが

おかげで街のひととは一回も会つたことがない

次からは正門から入る……

「とかなんとか考へてると玉座の間に続く廊下まで來たわけだ」

扉を開けず聞き耳をたてる

「随分小さいやね
「今度はちやんと『秘薬の肝』を探つてきましたよ？」

「そんなことはないですよ。それだけあれば不治の病だつて完治できるはず」

「色が灰色なのは？」

「もとからそんな色でした」

「…………はー。偽物ね、これ」

「言ひ掛かりはこまりますよ、姫様」

やつぱりな。まーたあいつがでかい顔してゐ

「『秘薬の肝』の色は灰色じゃないわ。それに、といふといふ傷ついてる。これがもし本物だとしても、価値はない」

「はつ、何言つてんだ? なら自分で採つてくればいいだろ。仮にも魔王なんだからよ」

そろそろ準備しておくか。どんな反応するかな

「まあ、仕方ないか。所詮形だけの姫じや、空襲部隊(俺達)に頼るしかないよな?」

「……Hレス、始末してもいい?」

確かに怒氣がこもった声が聞こえた。多分あいつには聞こえてないだろ

「ダメ。それはダメだよ
「だけど…………！」

「それで、姫様よう。“あれ”はいつになつたら貰えるんだ?」

「渡す氣なんてない。特に貴方には」

「へえ、そういうやうか。なら、少しは痛い目を見てもう……」

「しつつれーい」

勢いよく扉を開けた

「ひづ」

「どうしたの?」

「いやあ、頼まれた物を持つてきましたよ」

異空間に手を突っ込んで紙包を取り出す

「よつ、と」

大体樹齢二百年の木の切り株程の大きさ

「もしかしなくともそれって……」

『『Hリクハート』だけど?』

「やつぱり?」

その会話を聞くなりマローニとかいう奴の顔が青くなる

「ちやんと無傷で手に入ってきたから」

「ふふ、『苦勞様』褒美は何がいい?」

「とりあえず何もない。まあ思いついたらでいいや」「わ、わかったわ。それじゃあ後でまた呼ぶから」

「了解」

なんてやり取りをしてる内に隣にいたあいつがいなくなつてた

「じゃあ」

「ええ」

部屋から出る

「おー」

そのまま自分の部屋に向かう途中呼び止められた

「…………何だ?」

わらわの奴が話し掛けてきた

「お前、自分が何の為にこの世界に呼ばれたか知ってるか?」

「こからなら玉座の間まで声が届かないだろ?」

「別に、興味ない」

「教えてやるよ。お前は……」

「『イケニエの為』だろ？ 知つてると」

鳩が豆鉄砲を喰らった様な顔になつてゐ

「……なつ、なら何で……！」

「居場所があるから。それだけだ」

自室に向かう

「誰かが俺を必要としてくれるなり、どんな目的でもいい。たとえイケニエでも、復讐に駆りられて全てに絶望してゐるよ」

「……ちつ、駄目だったか。ない……」

微かにそんな声が後ろから聞こえた

ゼ「漸く俺らしくなつてきた場面だな」

エ「正直私も依頼を頼んで、ゼレカが帰つて来た時に別人かと思つた」

ゼ「いやあー、誰かに必要とされるつていいね」

ソ「……一応あの場に私も居ましたよ？」

g o e a o f d e s t i n y 門(前書き)

スランプ気味になつてしまひました

ベッドの上に腰掛ける

「…………ふう」

…………やつぱり、『居場所』があるだけで落ち着く

どんな必要のされたでも、ただがむしゃらに突っ走って自信を無くして無力を噛み締めるより全然居心地がいいや

「…………目的を忘れるつもりはないけど」

それは俺が黄泉がえつた意味だから。必ず果たす目的だから……

胸に掛かっているペンダントを握りしめる

「ン」「ン

「ゼレカ、居る?」

「ああ、居るよ」

力チャ

「何か用事?」

「うん、まあ」

イスに座る様にレスナーグにつながす

「アハ～ええばれつかに比べてずごぶんと明るくなつたね」

「んー、まあイロイロと決めたか?」、「ふーん……。話しへ戻すけど城下街つて行つてみた?」

「全くと書つてこに程行つてない」

「やつぱつ。なら、ちよつと私と行つてみない?」

「おおーこれほいわゆる『ナード』つてやつですかな

「…………褒美としてね」

あつせり舌定されぢやこました

「たしかにどんな所かわからないうからお願ひしようかな」

「じゃあ早く準備して。場所は正門で」

やつぱつ ひといひ部屋を出て行つた

「…………正門へどりだ?」

そういえば裏口からしか入つたことないから、正門がどこなのかわからん。それに『正門』なのに『裏口』っておかしくないか?普通『裏門』だろ?それとも俺が勝手に裏口と呼んでるだけであつて実は裏門なのか?でも昨日のメイドは『裏口』つて言つてたぞ?

「ん？『さつあ』？」

たしか今エレスナーグは『さつきと比べて』って言つて無かつたか？

そして俺は一つの答に行き着いた

「…………時間の流れが違うのか」

そつ考えれば納得できる

俺が居た世界、『人間界』と『魔界』とでは時間の流れが違う。そういうことにしておいつ

……まあ後で聞いてみるか

「今はとつあえず準備して正門をみつけるか」

とこつわけで鏡を造る。一からではなく創造で

「……？」

鏡を見て気付いた

「左目が緑色になつてる……」

多分自分を神だと言つてる奴が変えたんだろう

「それにしても気付かなかつたな」

他にも身体に何かされてないか調べたいが、エレスナーグを待たせ

るわけにはいかないからやめる

「む、胸に穴があいてる……」

とかだつたらかつによかつたのにな……

部屋を出て一階まで降りる

おそれく、裏口とは真逆の方向に進めば正門につかると思ったからだ

「えつと、こちが裏口だからあっちに行けばいいのかな?」

そのまま進むと思つたとおり正門ひしき場所に着いた

「なるほど、こじが正門か。たしかに堂々としてこむな

門が高くそびえ立つている

軽く50メートル以上はあるんじゃね?いや、確実にそれ以上ある
よこれ……

「……いつたい誰が入るんだ?この城の半分の高さもあるだろ?」

門に心を奪われた俺は漸くこじに来た理由を思へ出し、レスナー
グを待つ

女の子だから準備が長いんだろうな……

ゼ「あー、そういうえばこの時鏡見て初めて左目が緑になつてゐて
気付いたんだつた」

H「そりやうなの？てっきり初めから氣付いてるとはばかり思つてた

ゼ「……そつか、その事については話さずにいたんだつた。つって
も、瞳の色なんか気にしてな……くは無かつたけど初対面から緑だ
つたから、話さなくともいいかなつて」

H「いまはもう知つてるからいいけど、あの時に話してほしかつた
な」

ゼ「ふふふ、そつか」

デ「最近出番がないぜ」

「はつはつは、お久しぶりです、ちよっとわざわざこました」

「わざわざだーー。」

「まあまあそんな怒らないで」

「毎日毎日睡眠時間削ってゲームばっかやりやがってよーあげくに学校までわざわざ始末、やりすげだー！」

「もうプレイ時間80時間越えたからもうわり続きを書いていつと題つてな」

「発売してから十日ちょっとで80越えかよ……」

「基本全作そんなかんじだ」

「……黙田作者」

長い！あれから何時間経つた？どう考へても忘れてるとか思えないんだが！さつさと準備をしろって言つたわりには俺がいつも十分の一定程度の速さで行動してもまだ時間が余ってるぐらいだぞ？

「早かつたわね」

なんてことを考へていたら後ろから声が聞こえてきた

「そうだった？」

「こいつき来たところだ、と言わないのは俺なりの抵抗

「それより、早く街を案内してあげるわ

「ああ、頼むよ」

エレスナーグが門番に門を開けるように叫び
「…………へえー

門から城の外に出る

そこには如何にもRPGでてくるような街だった

空の色は灰色で、太陽が陰も形もみえないことを除けば

「…………何つーか、思つてたより普通だな

「ナリなの?」

「俺の想像では、ゴシ、ゴシした街に家を創つて、その街のひとつへんからマグマが流れつてイメージだったから

「ふふ、何そのイメージ?」

「意外と普通の街だったな

「悪魔に対するイメージ、かわった?」

「うん

「うひ、まあまあいい」

屋根にとけつもなくでかい牙が乗つかつてる建物に来た

「…………

「早くせこむよ

「あ、ああ

建物の中にはいると酒場のような場所だった

「よつこい!『悪魔達の眼』アーバンズアイ
へ。あら、新人さん?」

「どうせ……

「此処はギルドよ」

「ギルドか……」

依頼人の依頼を請けて盗賊や魔物を倒したり、道具や武器なんかを納めたりするのか？

「私はメトリア。悪魔達の眼の受付をしてるわ」

「はづく…………ゼレカです」

あぶねえ…………本名名乗るといだつた

「ゼレカ君、ね。貴方、どじかのギルドに所属してる？」

「いえ、無所属ですけど…………」

「だつたら、悪魔達の眼に所属しなよ」

…………人間が入ってもいいのだろうか？

「あれっ？」

俺が入つても大丈夫かエレスナーグに聞こいつと思つたら姿が見えない……

「どうしたの？」

後ろから声が聞こえる

「なんでもないよ」

『君を探してた』なんて言えないわ……

「ど」「行つてたんだ?」

「いりこりあるの」

「もうですか。それより……」

「入らないの?」

「ギルド?」

「入つておいて困る」ともないし、むしろ入つて損をするってことはないわ

「やうなのか」

後ろを向いていたからもう一度後ろを向く

「入る?」

「はい」

「わかつたわ。……はいっ、後はそのギルドカードに名前を書いて

「……隨分簡単な手続きだな」

ゲームと同じくらい早いやつ。

「書きました」

「じゃあそのカードが貴方の証明書だから」

「はい」

「登録はおわった? じゃあ次行くわよ」

『デビルズアイ』から出る

「どうだった?」

「んー、まあ普通にギルドだった」

「ギルドだもん」

「わつといえば聞いてなかつたけど『デビルズアイ』は何のギルドなの?..」

「基本『何でも屋』。特にこれと書いたかたよりはないわ」

「便利屋つてことか

「ナウヒーヒーヒーとな。次は」

「武具屋?」

……俺に武器も防具も必要ないんだけどなあ

「セウコニアは貴方、武器や防具など持つてゐるの？」

「…………造つてゐる」

「何のつて、鍛冶屋だったの？」

「こや…………想像で」

「…………」

「…………」

絶対病んでゐるつて思われてゐる。少なく俺だったりがつね

「…………本当だよっ。」

「…………セウなの？」

「じやあ今から造のから見てて」

何を造のつか……

あんまし弱い武器だと『造れても使えない』と思われたくないしな

刀身が蒼く発光して、水の属性を付与した刀……

「…………うと、ほら」

「ほ、ホントだ。どからか取り出したわけでもないし、ホントに

「造ったんだ……」

「一応属性も付けたし、魔力もまあまあ込めたからそれなりの性能だと思つたぞ?」

「へえ……」

そんなに驚かなかつたな……。もつと驚くと思つたんだが

「それなら武具は必要ないわね。後は装飾屋でも……」

その時、激しい轟音と吹き飛ばされそつた風が吹いてきた

「あやつ!?

「ぐつー!」

……収まつた、みたいだ

「なんだ今の?」

「闘技場のほうから……まさか……」

「あつ、おい

彼女に何か心当たりがあるみたいだったから後を追つ

H「そういう『えほん』の時が初めての『データ』だったね」

ゼ「そうだな。そして初めて弄られたのが顔合わせた直後だったつけ」

H「そうだった?」

ゼ「俺と田代が会つたら『眼中になんかあります』みたいな田をしてたぞ」

H「あははは……」

ゼ「あの時から『』の娘どうかもしれない』……』って思つてたけど、ドではなかつたな」

H「そういってじめるのが好きだけだ」

ゼ「……（アルゴールを摂取したら一切そんなそぶりは見せないけどなどな）ボソッ」

H「?」

g o e a o f d e s t i n y 黒い血の刀（前書き）

このままこゝと後二、四話ぐらいで『運命の歯車』が終わり、それから一、三話（気分で増えますが）で日常にもどります

g o e a o f d e s t i n y 黒い血の刀

「…………くつ！」

思つたより早いな……

風の魔術でも使つてんか？

「Hレスナーグ、この先に何があるんだ？」

「闘技場。そこそこ……」

「？」

「…………つ」

「エレ……」

「ウオオオオアー！！」

「！？」

「何だ、今の！？」

「まざいっ……」

ガチャン！！

闘技場の扉を蹴り開ける

「うわー！」

「ああー！」

階段を駆け上がり観客席についた

「くつー！」

「……」

……酷い有様だ

観客席から下を見るとそこいら中に猫の様な薄赤色の『何か』が転がっていた。それには所々鎧の様な物や青い布がついている

「まさか……」

「ええ、これみんな此処の兵士よ」

やつぱり……だけど血が壁や床にすら付着していないっていってのはどうこうことだ？悪魔の血液は一部のやつを除いては黒いって言ってたから、あの赤色は血液ではないはず

「…………」の感じ

「これって……」

確かに、空撃部隊の隊長とか言つてた奴の魔力

「アハハハ！－『レーテオレハサイキヨウダ！－』

「あれは…？」「

「どうしたんだ？」

「あいつの持ってる『刀』……」

「『刀』？」「

この世界にも刀があるんだな

「あれはこの国の王に代々受け継がれてきた『黒血刀』」

「ヒヤッヒヤヒヤヒヤ－！」

「その刀はとてもない力を秘めているけど、資格が無いものや赤血じゃないものが手になると刀に自我を支配されてしまうの

「なるほど、だからこの国の王に代々受け継がれてきたわけか

「ううなると破壊衝動のむくままに破壊を繰り返すわ。だから、その前に刀と本体を引き離す」

「わかった。なら、俺がやるよ」

わざと造った剣を構える

「刀を離せばいいんだろ？」

「ええ」

「じゃあ、此処で見てて。よつと」

観客席から飛び降りる

「ハハハハ、オマエモシヌカ?」

「悪いが一度死んだ身なんでね、また死ぬわけにはいかないんだ」

次元から短剣を一本取り出し、詠唱にはいる

「顯れる焰。『ファイヤーボール』」

小さな火の玉をマローネに放つ

「ナンダ?コレ

すると、刀を振り上げてその風圧で火の玉を掻き消した

「.....顯れる焰。『ファイヤーボール』」

もう一度火の玉をつくり、放つ

「 NANDAYATTOMOONNAJIDA!」

再び刀を振り上げて火を消しにかかった

「引っ掛けたな」

「ナニ?」

火の玉の中から、さつき俺がだした短剣が出てきた

「アタラナイ」

「どうかな」

風の魔術をつかい後ろに周りこんだ

そのまま剣で刀を持つている左手を斬る……が

「ヒツカカツタノハドツチダ?」

グニュ

まるでスライムを斬った感触、つまり手応えが無かつた

「偽物!?」

「ゼレカ、後ろ!」

「オソイ」

「ふつ」

振り下ろされた刀が弾かれる

「セーフっと」

さつき火の玉と一緒に投げた短剣が当たって、弾いた

その短剣に風の魔力を流し込む

「チイツ！アアアアア！」

一気に間合いを詰めて斬り掛かってくる

それをかわしながら新しい短剣を三本取り出し、それぞれ火・水・土の魔力を流す

「これで準備完了！」

四本の短剣を空中掛けて投げる

「そおらよつ！」

振り下ろされる刀を下から力一杯斬り上げる

「クツ、ウオオオオア！！」

「なんだ？」

……確かにさつきの爆発の時の掛け声

「キエローーーーー！『ダークネスマスト』！…」

辺りから黒い霧が立ち込める

「これは……………そうか！伏せろ、エレスナーグ！」

「ル」

「ヰニニニニニ！」

次の瞬間、さつきと同じ爆発が起つた

「ハハハハ！シンダカ」

誰がだ?

「風の魔力をつかつて跳躍していたのさ」

あいつは無事みたいだな

「我、元素の加護を受け、世界の理を使役する。破壊と創造を行使し、守護する力をほつする」

空中で四本の短剣を持ち、マローネを囲むかうて投げる

ナラバモウイチドリ

アブソリュートエレメンタル』！！』

短剣からそれぞの魔力を解き放ち包囲する

「自分のしたこと悔い」

そして、火に焼かれ岩に刺さり風に刻まれ水に流された

「ギィヤアアアアーー！」

カラソカラソ

完全に刀と本体に分かれた

「やれやれ、結構魔力消費したな」

足元に落ちた刀を拾う

「ゼレカ！？それに触つたら貴方も…」

「ん？やばかった？」

「え……？」

赤血なら大丈夫って言つてたから試しに持つてみたけど、ホントに
強い力を感じる

もしかしてこれがあれば……

「おつと、何考えてんだ俺は」

さつさと観客席に戻らなきやな

近くの扉から出て階段で上に上がる

「ゼレカ、大丈夫？」

階段の途中でエレスナーグが心配そうに言つ

「大丈夫大丈夫、はいっ」

黒血刀を渡す

「これでとりあえずは安心だな

「ありがとう」

「あいつ、どうするんだ?」

「後で話しを聞いておくけど、今は動けないだろ? から」のまま

「わかった。それなら城に戻つた方がいいんじゃないかな?」

「そうね、貴方も疲れただろうからゆっくり休んで」

「そうさせてもうひつ

さつきの魔術で魔力つかいすぎた……

「それじゃあ戻るわよ」

「ああ」

ゼ「…………」

H「どうしたのゼレカ？」

ゼ「やうこえぱこの頃のエレスはあんまり俺を名前で呼ばないと思つて」

H「そりゃー」

ゼ「今はほとんど名前だけだ、この頃は『貴方』とか『ねえ』とかで呼んでたまに名前を言つてくれるじゃん」

H「それを言つならゼレカだって、『エレスナーグ』とか『お姫様』あつ、それは今でも呼んでるつけ。とにかく、エレスとは呼んでなかつたよ?」

ゼ「ふつ、それもやうだね」

H「ゼレカ」

ゼ「エレス」

g o e a o f d e s t i n y 過去の虚像と天使の少女（前書き）

テ「久しぶりの更新で、多少雰囲気が違ってるかもです」

……
……
……

なあ、カナ。『ひつじ名前』……って書つても漢字だけだナビ変えた
んだ?

んー、氣分の問題?

氣分つて……

やあ、本当の理由は別にあるんだけどね

どんな……つて聞くのは野暮だから聞かないけど、なんかヤバイ事
にでも関わったのか?

事件絡みじやないから安心して。ホントにちよつとしたことだから

そつか。それなら安心だ

そういうついでって全面的に名前変えたじゃん

全面的の使い方間違つてる。……まあ、『靈花』から『零花』にな
つたわけだけど

パツと見ると変わつてないよつて見える

そもそも男にレイカはないだろ。普通女の名前だし

そう? 私は好きだけど

俺もお前の名前は『華姫』より『叶』の方が好きさ

ふふふ。じゃあこれからは一人きりのときだけこの名前で呼ぼう?

ああ、そうだな

レイ

力ナ

.....
.....
.....

「.....夢.....か」

.....隨分懐かしい夢だったな

あれは今から.....どのくらい前だっけな

少なくとも、まだレイって呼ばれてたから英司達に会つ以前か.....

「.....やついえば俺はどうしたんだっけ?」

「お皿覚めになつましたよ」

声は（「）が俺の翻つてられた部屋なり）扉のまづから聞こえてきた

「あ、ああ。えっと、ソルーティアさんでしたけ」

「はい。今前を覚えていただい光榮です。それと、ソルーティアで構わないですよ」

「そうですか。それで俺はビリなつたのですか？」

「覚えておられないのも無理ないと思ひます。昨日姫様と戻つて来た際に突然倒れられたので」

「あははは……」

……ぶつ倒れたのか。やっぱ魔力を考えなしに使つとそつなるのか

「なので今日は一皿皿に過ごして回復に当たるよ」と

「わかれました。それじゃあ今日はもうくつと過ごせてもいいまますね」

「それでは……あ、もう一言こ忘れました」

「はい？」

「そんなにかしきらないで、ぐだけた話し方でいいですよ」

パタン

言つことを伝えてでていつてしまつた

「んー、何するかな……」

今日一日つてことは俺の体感時間で約四日つてことだろ。とりあえずはもつと魔術の訓練をしてすぐばてなによ、後は……

「大天使の情報でも集めるか……」

知つてる奴がいればだけど……

空間をイメージして足に魔力を込める。行き先は昨日みた山

そのまま跳躍する

「よつ、と」

「よつ、と」

……成功みたいだな

俗こいつテレポートやワープってやつか

「……ふう」

先ずは魔術の方から克服しないとな

……そういえば克服するつて言つたけど魔術を使いまくつてればいいのか？まあ、それでいいだろ

۱۹۸۷

詠唱破棄というものを使って、炎を槍状に形成した

「おおり、できた。すごい申しあげたばかりができるもんなんだ」

「ウォーリン！！」

ん?
」

上の崖からだ

「あなたはどこで見るか……」

崖つて程でもないか

۱۸۷

崖をよじ登つたら、そこには馬程の大きさの狼らしき生物が一、二
……六匹いる。どう考へてもさつきの叫び声の元だらう

そんな事より気になるのは…

「『あの娘』を追つてゐるのか？」

狼らしき生物（以下狼）が集団で追つかけてるのは確実だろ。ち
ょつと魔力の扱い方を練習するところだつたし、

「倒しちまつてもいいよな」

剣を取り出し狼の群れの前へ飛び出す

「頭上に!! 注意、無駄に終わる。『ライトニングデッカー』」

狼が密集しているビ真ん中に雷を落とす

『ギャウウウウ…?』

「ちつ、一匹しか仕留められなかつたか」

剣を上段に構えて次の術に入る

『ギュアアア…!』

カキンシ！

構えた剣で狼の爪を受け止める

「伝導しろ、炎。『トーテムインフェルノ』」

受け止めた剣から炎を伝わせ対峙していた狼を焼き飛ばす

『……ア』

断末魔すらあげず黒焦げになる

「あと四匹」

一番近くにいた狼の下に滑り込み、思いつ切り切断する

『グルルル！？』

『ギャアアー！』

大量の黒い液体をぶちまけながら、次の狼を仕留める詠唱にはいる

「斬り刻め。跡形も残さず！」。『ストームカッター』『』

俺を中心に暴風を起しきせ、三匹まとめて刻む

「ラスト一匹……っ！？」

やつば……残りの奴が女の子の方に向かってる。短剣を三本出して
闇を込めてふん投げる

「間に合えー！」

一番殺傷能力の高い闇を限界まで込めた短剣だけど、不安が残る……

そつ思つた時にせよ飛び出していた。無意識に速さまで加速させて
「……全く、何やつてんだ、俺は

剣を構える

「はあああつ！」

ザショッ

瞬時に近寄つて後ろ右足をぶつた斬る。そのまま体勢をくずした狼の爪を剣で受け止める

バリツ

一九四〇年

剣が耐え切れず真っ二つに折れた……けど、

「後ろから空き、残念だったな」

さつき投げた短剣が狼に刺さった

断末魔をあげて倒れる。……結構危なかつた

「ふう……、大丈夫？ 怪我はなかつ……！？」

助けてくれてありがとう。さっきの魔物に進撃させていたんだ」

……振り返つて女の子の方を向いた。まだあどけなさの残る顔に相應の背丈、深紅の髪を無造作に、だけれどだらしなさはなく神々し

く降りしている。その髪よりも深い紅の瞳

そして……その背中から生える、真っ白な一対の『翼』……

「……君、名前は？」

どう考へてもこの娘は天使ないし大天使だ。一番手っ取り早いのは無理矢理『あいつら』の居場所を聞きだしそこに行つて殺すことだ

でも、それじゃあ『あいつら』とやつてる事は変わらない

だから……

「私？私はヴォルケノ。みてのとおり天使だよ

「俺はゼレカ。一応人間だ」

「人間？悪魔じゃないの」

「いろいろ込み入った事情があるけど、人間だ」

「ふうん」

……だから

「この辺は危ないから、早く帰った方がいいよ

「うん、わかった。またね、ゼレカ」

「ああ」

……俺なりのやり方で復讐する

そう心の中で呟く前に彼女は靈のように消えた

デ「ネタバレしない程度に、伏線を説明しよう」

ゼ「ああ、アウト」

デ「なんでだ？」

ゼ「伏線の説明＝ネタバレになるからだ」

デ「今の発言がどう影響するか、期待が膨らむな。あつ、そういう
ばゲストで『今の』ウォルケノさんを招いているから」

ゼ「……は？」

ヴ「ジーも、こんちは。天使のウォルケノです」

ゼ「……おいでイン、お前は何がしたいんだ？」

デ「だつて、シリアス続きなんだから後書きぐらいギャグでこいつ
や」

ヴ「あの～？」

ゼ「ウォルケノ、こいつは無視していいからな

ヴ「そうなの？」

デ「おいおい、何いってんだ。そもそもせつかくお呼びしたんだか

ら伏線の説明を…」

ゼ「ヴォル、こいつ燃やしていいぞ」

ヴ「はい」

デ「何物騒な事言つて、熱つ！？」

sea of destiny 血(前書き)

テ「『運命の歯車編』クライマックスです」

ゼ「いよいよ俺とエレスの出でこの全貌が明らかに」

H「それではどうぞ」

area of destiny 血

「…………やれやれ」

ヴォルケノに会った後にまた魔術の訓練してへとへとになつて帰つて来たつていうのに、自分がどのくらい強くなつたかわからない

「やっぱー田代ーこれらの訓練じゃ意味ないか」

……初めてこっちに来た時よりは冷静になつたかな

後は……

□□□

「はい」

ガチャ

「ゼレカ……」

「どうした?」

死なないようにイケーハになる方法、か

「…………」

俺はこの居場所を放さたくない。こんど自分に不信を持つたら、立

ち直るかどうかわからない

「……るから」

「ん？」

「私がー私が守るから。安心して」

「…………え？」

エレスナーグに何を言われたか、しばらく理解できなかつた。最初は俺の境遇の事がばれたんだと思つてた

「あはは、『めん、変な事言つたね。……本当に』『めん』

その言葉を聞いて、その意味がイケーホがどうじうだと気が付いた

「そんな謝る事じゃないよ。ふふつ、君も年相応などじうがあるんだね」

「むう～、私もうー4歳だよ！」

「俺は16。それに14つてやっぱり相応じやん」

「えー…ゼレカつて私より年上だつたのー?」

ありや、そつちに興味いつちやつたか

「わづだよ」

「異界から来たつていつても一六歳でそこまで世間知らずだつたんだ……」

「お、おい、随分失礼なこと言つてゐるぞ？それに、人間界と魔界じゃおそらく年齢の数え方が違うだらう」

「ああ……それは記憶喪失って事で納得しここで」

「記憶喪失なの？」

「全然」

「じゃあ納得できない」

「そりだな……むつ少ししたら話すよ」

「そり……」

「？」

やけに寂しそうな雰囲気をかもしだしてゐ

「まあそんな」とゆり、今日は一日休日にしてあげたんだからゆつくり休んでよ」

「有り難く休ませてもいいつな」

「じゃあ……ね

「ああ」

ガチャ

「……」

今のエレスナーグ、あの時の華姫衣にそつくりだった

「多分、俺に言わず片付けるつもりだろ」

「……今度は、失うわけにはいかない

同じ失敗を繰り返すことはしない

『それがお前の望みか?』

突如、頭の中に声が響いた

「……あんたか」

『ああ。みんなの神様マムートだ』

「（自称）が抜けているぞ」

『だから自称じゃないって』

「そんなことはどうでもいい。それより、さつきの言葉はどういう意味だ?』

『ん?ああ。そのままの意味だ。お前は大天使を殺すんだろう?それなのに危険を侵してまであの娘を助ける必要があるか?』

「あるさ。今までの俺はもう死んだんだ。だからこの場所は今の俺の唯一の居場所。それを守りたい、されだけだ」

『もしお前が死んだらどうする？お前の最愛の者を殺した大天使への復讐は、遂げられないままだ』

「……なあマムート。お前、大天使に恨みでもあるのか？」

『つー？』

「図星か」

『……私は……』

「いやいいや。お前が何をしてても、俺をこの世界に生き返らしてくれたんだ。だからあんたは俺の恩人だよ」

『……恩神だ』

「……だわるな……」

『ははっ。そっか、お前は俺の想像以上に面白い奴だ』

「それはどうも」

『もつ一度だけ聞いていいか？』

「構わない」

『あの娘を助ける必要はあるのか?』

「！」の際だ、居場所^{云々}無しにして言つ。俺を助けると言つて自分の命を懸ける少女を、命を懸けて助けたいだけだ

『……そつか。お前でよかつた』

「何がだ？」

『いや、なんでもない』

マムートが合わせた両手から光が溢れる。そして両手を限界まで離す

そこには一本の紅い剣があった

「これば?」

『《煉帝剣》…………』

剣

『とこいつのは嘘だ』

「おこひー。」

『はつせつめ。しかし、死んで天国にも地獄にもいけず蘇生という
煉獄で皇帝の様に願いを叶えようとするとお前が使う剣の名前にして
は上出来だろ?』

「……ああ

『これをお前に託す。お前の願いを叶える為に』

「わかった。有り難く使わせてもらひ

受け取つた煉帝剣を腰に差す

『まあ、お前自信の意思に従えばこいつ。お前の覚悟もわかつたし、俺から言つことはなにもない』

それからマーテの声が聞こえなかつた

武器の確認をして装備を整える

「わへ、と。行くか

この辺りで一番強い魔力がある場所へ跳ぶ

闘技場

「ここって……闘技場か」

入口に着いたので中に入る

おそれりくもつ戦闘状態であると思つておいたほうがいいだろ。アニメやゲームでも奇襲の威力は激しいし、最初から覚悟して行く

「あの扉だ！」

走った勢いのまま扉を蹴り開ける

「！？」

その光景は予想以上に酷かつた。周りには兵士がごろごろ倒れ込み、黒の液体をぶちまけ、壁は崩壊し、煙りをあげて火が燃えている。昨日の奴が斬つたときよりももつと酷い有様……

「はあ……はあ……くつーゼレカさん」

呆然と見ていると右側の壁に誰かもたれ掛かってる

「ソルーティア！大丈夫か！」

外傷が多く、服が真っ黒に染まっている箇所がある程度だ

「はあ……私の事より、エレスを……」

「エレスナーグは何処に……」

『終わりだ！』

闘技場を振り返る

「！？」

闘技場の半分程の大きさの橙色のドラゴンが腕を振り上げエレスナーグを潰そうとしていた

反射的に身体が動く

「間に合へー！」

詠唱を破棄した風の魔術で限界まで速度を高めて跳んだ

よしつ！

彼女を抱えて後方に跳ぶ

バキッ

『むっ』

「つーレスナーグ、おいー！」

その姿を見て戦慄する

彼女の小さい身体から大量の『紅』が流れてる……

「……んつ……ゼ……レカ？」

「意識はあるな。待つてろ、すぐ止血するから」

「な……ん……で……今田……は……休んで……てつて……」

「喋るな、もう少しだから。よし」

『誰だ、お前は？』

橙色のドーリアソンが俺に気付いた

「ゼレカ…逃げて……あいつは……バハムート。大魔王だから勝てな……」

「関係ねえよ、そんなの」

「…………え?…………」

「お前は命懸けで俺を守ろうとしてくれた。勝てないってわかつているのに。それと同じだよ」

エレスナーグをおろしてバハムートに向かう

「俺はゼレカ。この世界の救世主だ！」

『はつ、救世主だと? 笑わせてくれるわ!』

腕を振り上げて俺目掛けて叩きつけてくる

力キンッ!

それを空間から取り出した剣で受け止める

『ほう?俺の一撃を止めるか』

『天光降り注ぐ裁きの雷、彼の者に終わりを。『雷の乱射^{ボルティジョン}!』

頭上から貫通に特化させた雷が複数墜ちる

『上級魔術か!』

雷がバハムートに全て命中する……だが、氣は抜けない

『なかなかだつたな』

バハムートの右腕は無くなつていたが、他は大したダメージを与えられていないようだ

『死ね!』

爪を突き刺してくる。それを剣で止めるが、剣にひびがはいつた後一回、もつてくれ

「汚れし魂、その罪を償う術行使したまえ。知るべき理は我の言葉。『冥界の搖り籠』!…」

足元から怨念のような結界がバハムートを閉じ込める

そして怨念の煙りが結界の中を浸蝕していく

『ぐつ、だがこの程度、大魔王たる俺には効かん!』

「それは単なる事前準備だ」

この術も上級なんだがな

『準備だ?だからどうし…』

「消し飛べ!!』『暗黒の樂園』アルテエーテン…」

漆黒の小さな球体が結界の中に顕れる。その球体が徐々に大きさを増していく

俺の闇の魔力をありつたけ使つた最上級魔術、禁術とも呼ばれるらしい

『グアアアアアーー!』

バツン!ーー!

冥界の揺り籠」と巻き込んで小規模の爆発を起こした

「……」

『ふ、はっはっはーーー面白い、面白いぞ救世主よ』

全身ボロボロになりあちこちから流血しているのに笑つてやがる……。なにか自信があるのか?不死悪魔なのか?いや、それはないな。『ハデストケージ』も『アルテエテン』も連續した攻撃だから、何度も殺していることになる。じゃあなんなんだ?

「……大魔王の…力」

「エレスナーヴ?」

「私達魔王には……『魔王化』っていうのが……できるの。あいつ……は『大魔王化』をして……同じ大魔王以上じゃないと……死なないようになつたのよ」

「厄介だな……」

「……ゼレカ…お願い…あいつを…倒して…」

目に涙を浮かべて俺に頼む

「あいつは……私の国を……めぢやめぢやにした。そして……みんなを苦しめて、許せない……」

「……ああ。俺があいつを倒すよ。約束だ」

無理だとわかついていても、その願いを受け取る

「私の血を飲めば……あなたも……魔王と同じ力が得られるわ。……あなたなら……大魔王と同じぐらい……強くなれる」

止血した箇所から僅かに血がでてくる

「止血した箇所が！？」

「私は……長い年月血を吸つて……ないもん。これが赤血をもつ者の宿命よ……。自分と……同じ血をもつ者なんていない。そのせい……回復もしない。でも、赤血は……飲めば飲むだけ……力が得られる。だから、私を全て飲んで、ゼレカ……」

「Hレスナーグ……わかつた」

目を閉じて彼女の腕の傷口からでてくる血を飲む

「クン、クン

『何をしていろへ。』

「クン……

「でもな、全ては飲まないぜ。お前はまだ生きなきやいけないんだから」

ドクン

……全身から力を感じる

ドクン

……俺が俺じゃないみたいに

ドクン

瞳が、紅く、紅くなつていて

バサッ

服も変化した。ロングコートではなく漆黒のローブ

そして……真っ黒な『翼』があつた

『なつ、まさか……赤血を取り入れたのか！？』

「……」

『くつ！荒ぶれ！我が眷属達よ！』『ナイトメアカー二バル』――

雷と風と炎が変幻自在に襲い掛かつてくる

それを片手で受け止める

『何だと！？ならば、『ジエネラルバースト』――』

魔力を凝縮した玉を打ち出した

「…………」

それを『腰に差していた剣』で両断する

『愚かな！？それを両断したら大爆は――』

ギュルル

剣が玉の魔力を吸い込んでいく

「この剣は、魔力を吸收する。だから、どんな魔術もこの《煉帝剣》の前には無力だ」

『魔力を吸収する剣！？』

俺の魔力を煉帝剣に吸わせる

『馬鹿な！！俺が、大魔王のバハムートが、こんな奴に負けてたまるかあああーー！！！』

「……終わりだ。虚限煉帝剣！！」

バハムートの腕を真っ二つにして、そのまま体全体を二つに別ける
もう奴は声をあげることもできない

グチャア

闘技場の床に真っ黒い液体がぶちまけられる

足元にいる少女を抱えて観客席まで飛ぶ

「約束は果たしたよ、エレスナーグ」

許し

恋人と仲間の仇を討つ
そんなことを考えてた
俺には何もできなかつた

仇を討つという意志は変わつた

他のひとを殺してしまつた

いたたまれなくなつた

答はでてる

許されなくとも

それでも言いたかつた
ごめん……

The end of memory(前書き)

ゼ「運命の歯車は再び動かすわ……」

テ「過去話アリストです」

The end of memory

エレスナーグは治療室に運びこまれて、治療を受けることになった。止血した意味がないらしく、徐々に傷口が拡がつてゐるらしい。その原因は、さつき彼女から言われた通りなのだろう。

赤血をもつ者の宿命、か

吸血魔である彼女にとって赤血以外を攝取できないといふのは致命的だ

だけど、それは『魔』での常識……

カチャ

エレスナーグはベッドの上で右腕を点滴につながれていた

ソルーティアも医務係のひと達も赤血を探しに治療室からでている

相当エレスナーグの容態が悪いらしく、もつて今日か明日が限界だといつていた

「……ゼレカ?」

「ああ

「バハムートは？」

「約束通り、ちゃんと倒したよ」

「そう……ありがとう」

「いや、俺が勝てたのは君のおかげだ。『魔王化』しなきゃ勝てなかつた」

「そんなことないよ。ゼレカは、私の願いを、約束を叶えてくれた。まるで神様みたいに」

「神じゃなくて魔王じゃないのか」

「ん~でも、ゼレカは魔王じゃないし……そうだ！ゼレカの場合は『魔王』よりも『大魔王』よりも強くて、神様みたいだから『魔神』だよ」

「『魔神』か……カッコイイな」

「でしょ？」

……危険な状態だつていつてたのに、こんなに明るいのは自分がもう永くないってわかっているからなのか？

「エレスナーグ……」

「エレスでいいよ。ゼレカにはエレスって呼んでほしい」

「そりか。じゃあエレス」

「なあに?」

「教えてあげるよ。俺は一度死んだんだ」

「……え?」

「俺は大天使に殺された、ただの人間なんだ」

「人……間……」

「だから、この世界の常識は全く知らなかつた。これが俺の全て」

「俺がこの話をしたのは、君が今から死ぬからじゃない

「……そう、だつたんだ。私と似てるね」

「似てる?」

「うん。私はお父さんとお母さんを大天使に殺されているんだ。それからは周りの大人達の態度が変わつて、みんな私を狙つた。赤血目当てでね。そして私のお兄ちゃんがその大人達を追放した。でもお兄ちゃんも王を継ぐつてときには……」

「『めん……辛い』と思ひださせちゃつて」

「ううん。ゼレカに聞いてもらつてすつきりした。王になつてから、ソル以外の誰にも頼らなかつたから。全部私がどうにかしないと、つて」

……思いもよらなかつた

俺がエレスをほつとけないって思ったのは、華姫に似てるからじ
やない……俺に似てるからなんだ

「……君は俺に似てるな」

「私があなたと?」

「うん。なんでも自分でしょい込むといつも、他人に心が開けない
のも、本当は臆病などとも」

「そつか……」

「俺は君のことが好きになつたよ」

「私も。あなたが大好き」

「それはよかつた。……さて、そろそろ寝たまつがいこよ」

「……怖い」

震えてる手をとる

「大丈夫。起きるまでずっと放さないから」

「……うんー約束、だよ?」

「約束だ。だから、安心しておやすみ」

「おやすみ……」

もう体力の限界だったのだね。……

「それじゃあ……」

俺が握っているのは点滴をしているまつのもだ

その点滴の基の方の管を外し、針をつける

そして……

ブスッ

「ぐつ」

俺の左手首の血管に突き刺した

ドクン

ドクン

俺の血が、管を伝つてエレスの中に注がれる

「お前はまだ生きなきゃいけないんだから

わつきの言葉をもう一度言つ

「はあ……人間の血は赤いんだぜ。だから、君の宿命はもう終わり。

「これで普通に暮らせますわ」

ドクン

ドクン

……………いつの間にか寝てたみたいだ

エレスの顔を見る

「よかつた。顔に生気が戻ってる」

俺とエレスの管を抜き取り、包帯を巻いた

流石に流血が激しく魔術がつかえない

「…………あれ？ 私…………」

「気分はどう？ エレス」

「ゼレカ…………つてことは、私まだ生きてる？」

「当たり前や。ちやんといいこ生きてる」

握っている手を見せる

「手、ずっと握っててくれたんだ」

「約束だからな」

「……」

ポタ

手の上に一粒の液体がこぼれ落ちる

「ゼレカ……グスッ、ありがとつ……」

「そんな大袈裟な事でもないよ」

「グスッ……私、今までソル以外のひとから……グスッ、こんなに優しくしてもらつたことないから」

ぎゅつ

手は放さず、優しく抱いた

「落ち着くまでじっとしてるから」

「ありがとう。もう落ち着たよ

「そりゃ」

手は放さずに解放する

「まだあんまり動かない方がいいよ。他人の血を大量に輸血したんだから」

「他人、つて赤血のひと居たの？」

「ああ」

「でも、まだソルは帰つて来てないみたいだけど？」

自分の人差し指を噛む

じわりと血がでてきた

「それはそうだよ。だって、俺の血を輸血したんだもん」

キヨトンとした顔になつた

「えつ、でも、私赤血じゃなきや輸血なんて……」

人差し指を見せる

「いじつこじつ」と

「えつ……？」

「人間はみんな赤血なんだよ」

「やうだつたんだ……」

じ～っと俺の指を見つめてくる

ああー……

「飲んでもいいよ」

「ふえつ！？い、いや、いいよー！」

「もつ何年も飲んでないんじょ？回復力をあげるって意味でも飲んで損はないと思つよ」

「……そ、それじゃあーーーーー」

なんで赤くなつたんだ？

かぱつ

「ひゃあー」

「二十九歳のひばの（ん？）じついたの」

「いや、なんでもない……」

思いつきりなんでもあるよ

血を吸われる時、めぢやめぢや氣持ち良くなる

やっぱ……クセになりそう

チュウツ チュウツ

「もういいや」

「はあ……はあ……もういいの？」

俺的にはもつと吸ってほしかった

「これ以上飲むと久しづりだから酔いそう」

「酔うんだ……」

人間でいつとここの酒みたいなものだからか？

「ゼレカ……お願いばっかりしてわるいけど、もう一つお願いしていい？」

「ああ、いいさ」

「じゃあ……ずっと一緒にいて」

期待と不安が込められた瞳で見てくる

俺の答は決まってるけどね

「もちろん。ゼレカ（俺）の居場所は此処だけだから」

俺の答に満足したのか満面の笑みを浮かべている

「改めてよろしくね、ゼレカ！」

ገዢርናኩራናኝነት

卷之三

- ४७ -

九
十八

不意に扉が開かれた

エレース?

ソルーティアが帰ってきた

「あニ、ソル、おかえ…」

ガバツ

「よかつた……助かつたのね……」

「...」

こうして見ていると姉妹のようだな……一人つて……

「でも、どうして助かつたの？」

「ゼレカが私に血をくれたの」

「え? だつてゼレカさんは……」

「俺は赤血だよ。流石に身体の半分近くの血をエレスに輸血したから証拠はみせられないけど」

「そうですか……」

ソルーティアがエレスの方を向く

「あつそつだ。ゼレカはこれからここにいてくれるって」

「……そつ……」

「ソルでいいです。エレスが認めた方なのですから」

「あれ? 本当に姉妹なんじゃないのか? ……

「ソルーティア、もう……」

「ソルか? ならソル」「もうエレスも安定してるみたいだから、俺は休ませてもううわ

「はい」

身体の半分程は失血してるからな。そういうえばよく死はないな、俺

「わかりました。ゆづくりお休み下さー」

「じゃあ、またあとでね」

「ああ。といつかHレスも、半分程は俺の血なわけだから慣れるまで安静にしてなよ」

「うん」

ガチャ

.....

.....

「Hige……俺の居場所。とても暖かい……安らぐ場所。復讐に取り付かれた俺を正氣にもどしてくれた」

大天使の事は一回忘れよう

けど、忘れちゃいけない

その時がくるまでは忘れよ

だつて今は……

「ここにも嬉しいから……」

……………。そいつか。そいつにえればそいつだつたな

『ビーヴィだ？ゼレカ。魔神化に必要なことはわかつたか？』

「ああ……。全て、思い出したぜ」

『そいつか』

「街の氣持ちと煉帝剣、この二つだ」

『そいつこねばお前、煉帝剣ずっと使つてなかつたな。ビーヴィしたんだ
？』

「ちやんとあるわ。大切にしまつてある」

『なりばねもビレ。お前の世界』

「ああ……。」

君の笑顔を……（前書き）

「テ「終」」

君の笑顔を……

エレスナーグVision

ニンブルケティック・冥府の丘

「どうして……」

大天使が逃げてからソルもゼレカも意識を失つたまま目を覚まさない
あの時私が大天使を倒せていれば、一人が傷つくこともなかつたの
に……

私にもっと力があれば、そうすれば……

なのにどうして……

「どうして私には力がないの！？」

私はこのニンブルケティックの魔王なのに！

こんな……

こんななんじや……

「力が欲しいかい？」

「！？」

後ろから突然声が聞こえてきた。油断はしてたけど気配に気づけなかつたみたい

「あれ？ あなたは……」

どこかで見た顔……たしか……

「お忘れかな？ 同じ連合軍の『カタンテア』の魔王、スウォーグだ」

ああ…… そういえば

「そうだつたね。それで、さつきの言葉は？」

「聞いたまさ。力が欲しくないかい、とね」

……力

二人を守れる……力

私は……

「欲しい……力が……」

「ふつ……そつか。なら……」

待つて、ソル、ゼレカ。今度は私が守るから！

ゼレカVision

目が覚めたら、ベッドにいた

「エリは……俺の部屋か……つづー！」

腕が、脚が、背中が、体中が痛む。たしかヴァジラに刺されたり吹
つ飛ばされたりしたからな……。

「……そうだ……」「んな」としてる場合じゃねえ！』

急いで扉を蹴り開ける。身体が軋んでるが気にしてる場合じゃない！

「わっ、と。氣をつけて……って、ゼレカさん！？」

「クレアか！エレスがどこか知らないか！？」

「姫様ですか？そついえば御姿が見当たりませんけど」

「くつー！」

「どうしたんですか？そんなに慌てて

「今回の探索隊の事故は事故じゃなかつたんだ！」

「事故じゃないって、じゃあいいたい……」

「人為的に仕組まれた罠だつたんだよーそれにその中に連合軍の奴が絡んでやがる。そいつが裏切つたんだ！」

「う、裏切つた！？だつて、連合軍に入つていれば裏切る必要なんて……」

「ああ。普通はそんな必要ない。だが、そいつがニンブルケティックだけを目標にしたらどう考える？」

「『』の世界だけつて『』と……あつー。」

「まず間違いなくエレスが目的だわ」

「で、でも、『』の魔王が裏切つたか分からなければ捜しよつが……」

「その見当もつこいれる。……」

「カタンテア……ですよね？」

後ろから声が聞こえてきた

「ソル！？」

「駄目ですよソルーティア様！まだ安静にしてないとー。」

「くつ、ザレカさん、間違つてましたか？」

「いや、そうだと思つ。でもなんで分かつたんだ？」

「以前、ヘルヴォートを倒したと……報告された時の事を覚えていましたか？」

「ああ。そういうえばあの時……」

「本来ヘルヴォートはカタンテアだつたのですが、カタンテアは連合軍に加盟するにあたり、表立つて悪事が出来なくなつてしまつた」

「それでヘルヴォートを……」

「はい。元々、カタンテアは世界を支配下に置いていたから、力を欲しているのです」

「…………ありがとうソル。それだけ分かれば大丈夫だ」

「エレスを、助けてあげて下さい」

「言われなくとも助けるさ。クレア、ソルを頼んだ」

「はい。ゼレカさんも氣をつけで」

「ああ」

エレス……俺はもう間違えないから……

カタンテアを思い浮かべ、テレポートを発動して思いつ切り跳ぶ

エレスナーグVision

カタンテア・信仰の塔

「まさかこんなに簡単に引っ掛けられては思わなかつた」

「本当。単純だよね」

「スウオーラ様、『苦勞様です』

「……くつ」

「騙された……まさかカタンテアが裏切つてたなんて。早くこの縄を解いて皆に知らせなくちゃ

「おつと、残念ながらこの縄はノロイの魔法が掛つてるんだ」

「理解。僕の特別の魔法だよ」

「ノロイ。あまり調子に乗つては駄目ですよ」

「まあいいじゃないかレウル。」
「いつは実際強えんだし」

「現実。そ�だぞレウル」

「やれやれ……」

魔法……だったら

「……我が身に刻まれし魔王の力。我が呼びかけに応え、その力解放せよ。『魔王化』！」

これで普通の魔法なら全部無力化できる！

「ほう……それでどうする？」

「しつてるでしょ。魔王化なら普通の魔法を全て……無力に……あれ？」

縄は今だに私の両手を縛っている……なんで？

「たしかに、魔王化は他の悪魔達と区別できるように普通の魔法は効かない。『普通』の魔法なら、な」

「驚愕。僕の力も見せてあげる。我が身の魔王よ、我に応え、解放せよ。『魔王化』！」

「……つえー!? どうして魔王じゃない悪魔が魔王化を……」

その姿は骨を纏ったようで、魔王特有のまがまがしい魔力が滲み出ている

「ふつ。大天使が俺達に力をくれたんだよ

「大天使がつー!？」

そななまさか……

「おかげで俺は魔王も大魔王も越えた存在になつたんだよーー！これで世界を支配できる、だけどその前にもう少し力が欲しいんでね。その為にお前をさらつてきたわけだ」

「……私を……殺すの？」

「そんなもつたいなことするかよ。せつかくの赤血、それも女なんだぜ？」

「……」

ゼレカ……ゼレカ……

『めんね……私が弱いから

守れるようになつていったのに……

我が儘な」と言つて……

「もう一度……あなたの顔が、見たかったな……」

初めて言われたあの言葉……

『俺は君の事が好きになつたよ』

お父さんやお母さんやソルに言われるのとは違ひ嘆葉……

「…………ザレカ」

「バーンフー！」

「ん？」

「不明」

「あれは……」

勢いよく扉が開いた。その主は真っ白なこの部屋には不相応な程黒い格好で、左右の目の色が違かつた

「待たせたね、Hレス」

「ゼレカ…………フー！」

ゼレカVision

「痛つ

着地には成功したのに、全身痛んでやがる。俺が思つてゐる以上にダメージが残つてる。でも……！

「エレスが待つてんだ。俺の身体なんて知つたことか」

田の前の巨大な塔の中に入り、その螺旋階段を上る

「はあ……はあ……」

なんだか見覚えがあるな……今の俺。前にむかひんなふつに疲れ切つて走つてたな

『「ンンビモマニあわナインジャネえか?』

……ーーくそつ、また……

『アアードウスレバいい?マタウシなうのか?一人二なるのか?』

だまれ……

『田の前で口口サれるのか?』

だまれ!!

『アア、口メンよ梨絵、多矩也、英司、かな……』

だま……えつ?

『ドウシタ?』

今、なんて……そつか……

『ナシダ？』

お前は俺だと思ってたけど、お前は俺じゃない！

『ハア？俺は正真正銘葉月零花ダ！』

違うーお前は葉月零花じゃない！お前は『葉月靈花』だ！

『……』

お前は歪んだ俺、人間の時の、ましてや今の俺でもない！

『……チツ』

それつきり声が聞こえなくなつた

…………よかつた、零花（俺）はゼレカ（俺）だつた……

それだけ分かれば、もう怖くない

華姫衣…………いや、叶。零花（俺）は忘れないから、ゼレカ（俺）は他のひとの為に覚悟を決めていいよね？

最上階にであるう、大きな扉を蹴り開けた

バーン！

そこには紅い衣を纏つた少女が、見間違えるはずもない彼女がいた

「待たせたね、エレス」

「ゼレカ……っ！」

「お前は……」

「スウォーク…やつぱりお前がアシュラと…」

「その通りだよ『夢幻の魔神』。あの天使が忠告したのがよくわかつた」

「Hレスは返してもいいだ？」

「それは無理な相談だ。それより……」

「油断。後ろに注意！」

異空間から剣を取り出し、振り返り様に斬り掛かる

「わかつているが、そんなこと」

くつ……

詠唱を破棄して雷を上方に放つ

「上のやつもなー」

「なかなかですね」

「意外。」こつ強いな

それはこっちの台詞だ。いくらダメージがあるからって魔王以外の奴がこんなに強いか？

「ノロイ、レウル、もう少し止めてろ」

「了解」

「はい」

「はあああああ……」

「何だ！？」

ふたりまとめて戦つてもスウオークの方を視認する

「魔王化か」

「ゼレカ、気をつけて！そいつアシュラから力をもらってるの！」

「何！？」

「はっはははーこれで俺は無敵だぜーーー」

骨の様な鎧をつけてその上から士らしきものがかかるてる。あいつの姿から見て、恐らくこのガキも魔王化してやがるな……魔王でもないのに

「厄介極まりないな……」

ただでさえ身体が言つことを聞かないってのに、魔王補佐と魔王ク

ラスと大魔王クラスの奴相手かよ

「レウル、ノロイ、止めろ！」

「作戦。りょーかい」

「わかりました」

魔王補佐の方が突っ込んでくる

「お前ひとりで俺が止められるとでも？」

「そんなつもりはありません、よつー。」

瞬時に雷が放たれた

「詠唱破棄！？まさかこいつも……」

「よそ見してる暇はありませんよ」

次々と炎、雷、土が襲い掛かってくる

「くつー。」

「成功。捕獲完了！」

退いた先に魔法陣が出現した。これが狙いか！

「しまった」

身体が、動かない……

「静聴。僕の魔法は特別でね。拘束に優れてるんだ。スウォーク、早く早く」

「足止めは成功しました」

「さすがだぜ。喰らいな、俺の最大最強魔法！『ギガントックデモリッシュヨン』！」

とても小さい土の球が向かってくる

ちつ、わざわざ時間稼ぎまでした魔術なんだから威力は考えるまでもないだろ。動け、動け、このままじゃ……

パソコン

土の球に当たった……けど何も起きない

ドカーン！！

「ぐうわあああああ……」

「ゼレカ！！」

「この……威力は……ヴァジラに……喰らった技……より強力……だ

「はつははは！いくら魔神でも、この技の前ではただの雑魚！」

「強力。おお！スウォークの魔法前よりも強くなってる」

「だら？」

『あつはははー』

どくどく

血が……流れ……でる。……結団。……負けたのか。やつと自分と決別したのに。」の程度か

「……力」

でも……これで……終われる……何も……かも……

「ゼ……カ」

……呼んでる? 誰だ?

「ゼレカ、ゼレカ! ! !

エレース? 君が……俺を

「やだ、死んじゃやだよーー! !

俺……は……死ぬ……のか? なに……も……しないで……

「お願い……お願いだから……死なないで……」

ぱたつ

温……かい。これ……は涙?誰が……君を泣かせ……ている。
そつか、俺が……

「……エレス?」

「ゼレカ! !

「もう……泣かなくて……いいよ。俺が……君を……笑顔にさせて……
あげるから」

「うん……うん……」

俺の血濡れた右手を握るエレスの手が、とても温かい……

俺は、守りたい。この温かさを、笑顔を……！

「守りたい……！」

パアアツ!

「なに、これ?」

俺の右手から闇が溢れ出る

その闇が俺を包み込む

「傷が……」

身体の痛みが無くなっていく、その代わりにエレスの温かさが身体
に満ちてくる

バサツ

真っ黒なマントを羽織り、右目が紅く輝く
そう、記憶の中でもなり、俺ではない俺もなつた、『魔神化』だ

「ゼレカ……？」

「ありがとう、エレス。俺を呼んでくれて」

「…………うんっ……！」

エレスナーグVision

私はただ、その光景を見ているだけだった

「ぐうわあああああーー！」

「ゼレカーー！」

慌ててゼレカに近寄る

ゼレゼレ

「ああ…………！ こんなに血が……」

結局私は見ているだけだった。多分縛られてなくてもそうだったと思つ

「ゼレカー」

私は何もできない……ただゼレカの名前を呼ぶ」としか

「ゼレカー」

回復してあげることも、守つてあげることもできない……だから、せめて名前を呼ぶ

「ゼレカ、ゼレカー！」

ああ……」そのままじや

「やだ、死んじややだよーー！」

居なく……ならないで！

「お願ひ……お願いだから……死なないで……」

ぱたつ

涙がこぼれ落ちる

「……Hレス？」

私を……呼ぶ声

「ゼレカ……！」

良かった……良かった……

「もう……泣かなくて……いいよ。俺が……君を……笑顔にさせて……あげるから」

「うん……うん……」

ゼレカの右手をござりしめる。放さない為に……！

「守りたい……！」

パアアツ！

「なに、これ？」

ゼレカ右手から闇が溢れ出る

「傷が……」

みるみる塞がっていく

バサッ

いつの間にか真っ黒なマントを羽織つてゼレカが立っていた。そしてその右目が紅く輝いていた

これって……『魔神化』……またやつをと回じ……

「ゼレカ……？」

名前を呼ぶ

「ありがとう、Hレス。俺を呼んでくれて」

その応えが、何より私を安心させる

「…………うんっ！…！」

ゼレカVision

「何！？あの状態から完治したのか！？」

「不明。致命傷だったはずじゃ……」

「大丈夫ですノロイ、スウォーク様。また同じ手筈…ぐはつ」

「遅い」

真っ赤な剣を取り出し詠唱破棄のできる奴を斬る

「ノロイ！」

「心配。ノロイ！くつそー！」

「『冥界の搖り籠』！」

詠唱を破棄してこの魔術を放つ

「残念。びっくりしたけど当たらぬ！」

俺の背後に周りさつきの魔法を掛ける、が

「『アルテ・エデン』！」

俺の魔術の方が早かった。と言つても、今の俺にそんな魔術は効かないけど

「あ……がつ……」

「さて、後ひとりかスウォーク」

「ノロイ、レウル、お前達の想いは無駄にはしない——消えろ——お
『ギガンテックデモリッシュン』！」

「ビーム掛けて放つ！？」

くつ、俺じゃなくてエレスの方向けて放ちやがった

もう用済みだつてことか

「大丈夫、何も怖くないよ？」

「ああ、なんせ俺は『神』だからな」

「ふふふ」

「はませつ」

「何笑ひてやがんだーーー！」

「バーンつー！」

「こんなもんか」

放たれた土の球を蹴り返した

身体が弱つてるとこんなものが強く感じるのか、それとも魔神化の影響で俺が強くなつてゐるのか。まあ、どっちにしても……

「弱い、この程度か」

「ひつ、ひじつーーー！」こんなやつに勝てるわけねえーーー

「あつ、飛んで逃げるつもりだよ。ゼレカ、つかまつ……」

「逃がすか、よつ

バサツ

俺の背中から一対の真つ黒な翼が生えた

「あれ？ 翼…………」

「ぐーぐるなあああつーーー！」

「……お前は俺の大切なひとを傷つけた。これがその報いだ！」虚
限煉帝剣』！」

黒と紅が混じり合つた煉帝剣で両断する

断末魔すら擧げさせない

ぼとつ

無機質な音が鈍く響いた

「これで終わりだ」

剣を仕舞いエレスのところに戻る

「ゼレカ……飛べたんだ」

「ん？ 見たことなかつたっけ？」

「初めてみた」

翼を揺らしてみる

「……ゼレカ、あのね……」

「心配しin」とないや。俺やみんなが居るから

「君が言おうとした」との応えになつてゐるでしょ？」

「えつ？」

「……」

「だからこの話はおしまい。せっかく再会したんだから、もっと楽しけんな」

「ふふっ、もうだね」

『アーリア』

「なんの音?」

「…………やつ過ぎたかな?」

地響きがした後、塔が崩れてきた

…………本氣出しすぎた、反省反省

「逃げるよ」

「うんー!」

ザックリと斬れて外が見えている部分から飛んで下に降りる

「よつ、到着」

「よこしまつ」

俺とエレスが着地した直後に塔が完全崩壊した

「結構危なかつたな」

「やうだつた？魔王化してゐるから無事だつたと思つつけど」

「魔王化してもあの縄は解けなかつたじゃん」

「それを考へるとゼレカの力す」によね。気付いたら解けてたもん

「つて言つても、元々は君の力なんだけど」

「……」

カキンつ

背後から思い切り斬り掛かれた。でも今の俺は魔神化の最中。気付かない方がおかしい

さて、こいつはカタンテアの残党か、天使か。まあ今の俺ならどうともなるか

「……隊長？」

「ん？ ベルゼブ？」

聞いたことのある話し方に俺を隊長と呼ぶつて……

「……何だ。もう片付いたのか」

「塔が壊れてるもんね」

「アスター」

「怪我無かつた?エレス」

「といひで、どうしてふたりはここに?」

「……ソルーティアから頼まれたんだ」

「ゼレカさんとエレスが危ないからつて」

「ソル、あの身体でそんなことを……」

「よっぽどエレスが心配だつたんだな」

「俺も相当ボロボロだつたからなあ……」

「まあ、何にせよ俺もエレスも無事だし、むだ足踏ませちつたな」

「……!/?隊長、その姿」

「いつもと雰囲気が……」

「久しぶりだろ?初めて会つた時以来になつたから」

「……それがあんたの魔神化だつたのか……」

「そゆ」と

「じゃあエレスもゼレカさんも無事だつたし、帰ろつか」

「……そうだな」

「帰つたらどうする?」

「ん~と、血が飲みたい」

「こきなりそれかよ……いいけどや」

「なんか久しぶりにゼレカに会つた気がするんだ」

「実際しばりく会つてなかつたよ」

そんな話をしながらニーンブルケティックへの帰路に着いた

今回の事は危険と隣り合わせが多く、傷ついた

だけど、得る物の方が多いつた

自分と決別して、魔神化も制御して、愛するひとの笑顔を守れること

とができた

「ゼレカ、聞いてる?」

「ん?ああ!」めん。君の笑顔に見取れてた

「むう~、それなら許すけど

「それで何の話しだつけ?」

まあいいか。今は、この時間を楽しもう

君の笑顔を……（後書き）

「いやあー長かった。ストーリー進めるのが長かった！」

「度々更新止まってたからな」

「日常なら思いつく辺り、ストーリーはちゃんと設定に基づいてなきゃいけませんからね」

「まあ向こせよ、重たい話しあは終わつたわけだ」

「とこりわけで、次回からまた日常編再開です」

ハブニング（前書き）

「ちよつぴり甘ぬ」

「私は出番なし……」

ハプニング

ゼレカVision

「…………ん、もう朝か」

何だか久しぶりに自分の部屋で起きた気がするな。確かに探索隊の搜索の日からずっと慌ただしかったけ……。まあ、もう大天使も追い返したし、カタンシアも解体になつて少しほ落ち着けるか

「はあーあ…………もう一眠りするかな…………」

多分工レスもソルもまだ寝てるだる。ベルゼブ達は今回の事件の後処理で忙しくて来れないって言つてたし

「いや、夢の世界へ」

もふつ

…………？毛布を抱き寄せたのに柔らかいものがある。明らかに毛布じゃない、それは確信できる

…………うん、おおよその予想は出来るけど一応確認しておこう

もしこれで予想に反してたらやばい……大丈夫だ、このパターン以外あるか俺？

そうだ、あるはずがないだろ。……多分

予想通りであつて欲しいと願い、ゆっくり毛布をめくる。水色の髪が見えた

「はあ……よかつた……」

想像通り俺のベッドに侵入してきたのはHちゃん

「……………」

スでは無かった……

「……………何でソルが俺のベッドに？確か昨日は……………」

「……………思い出せねえ！…何で思い出すねえんだ！…つーか何もしてないよなー？俺何もしてないよなあー！」

「……………」

お、落ち着け、この際何でソルがここに寝てるのかは置いておいて重要なのは今すぐするがだ

その一、何事も無かつたかのように戻り寝る

その二、部屋の外に出て成り行きに任せせる

その三、テレポートで逃げる

おー結構選択肢あるな。これなら二回、二回もダーツ

まあそのー。これはもう一度起きた時弁解の余地が無くなるかもし
れないから却下。そのー、運悪く誰かが俺の部屋に入つたらアウト。
その二、変な勘違いされたら即終」！

……選択肢消えた！？いや、もう一つ追加

その四、祈る

もつれしかない！マムート、俺はお前を信じてるからなー！だか
らこの状況どうにかしてくれー！

『んな無茶な……』

「……………」

「…………？」

「あれ？…………」

「…………」

さて、ヒーの後どんな罰が待ってるのか楽しみだなあ（涙）

「お兄ちゃんー会いたかったよー」

…………　はい？

お兄ちゃん？

「突然居なくなつちやつたから、私びつくりしたんだよ？」

…………話しが全く見えないんですけど。寝ぼけてるのか？ソルにお兄さんなんて居たつて？エレスには聞たつて聞いたけど。もしかして身体はソルで中身はエレスつてことか？

「もう、なんとか言ひてよ。久しぶりの再開なんだかい？」

「…………ソルーティアさん？」

「何でいきなり他人行儀になるの？ちゃんとソルつて呼んでよ」

…………あれ、何でエレスと話していく時以上にフレンドリーな話しおなんだ？といふかそろそろ起つてないと。ギャップに負けてときめきそだからな……

「ソル、そろそろ起きて」

「何言つて……私は寝てなんか……」

眠そうな顔を擦りだるそつに言葉を紡いでいった

「…………」

「起きた？」

「…………おせむりへ」やこうか、ゼンカさん」

「おはよー。それで起床早々悪いんだけど聞いていい?」

「…………何でしょうか?」

「どうして俺のベッドで寝てた？」

「…………ゼレカさんの？ そういえば私の部屋ではないですね」

「記憶にあるか分からぬけれど、今の事が関係……」

カワイイと思つし

「少し兄の夢を見てただけです。昨夜、ふとその事が気になり起きたような気がするので、その時に部屋を間違えたのでしょうか？」

「お兄さん、いたんだ」

「やうになくなつてしまひへ経がねすたゞね」

「あ……」めん

「いえ、死んで当然の駄目兄さんでしたから」

「その割には随分甘えてたみたいだけど」

「あ、あれは！その……ぐ、偶然です！偶然以外の何物でもないで
すよー／＼／＼

「……」

ギュッ

「あ……」

「貴女……いや、君は俺より年下なんだから、存分に俺を頼つてい
いんだよ？」

「……私は……」

「今まではエレスを守るうと大人な態度をとつてきたんだろうけど、
それでもエレスより一歳違うだけなんだから。俺からみたらふたり
とも年下だよ」

「……」

「だから、こんなふうに甘えなよ。ひとりじゃないんだから」

「……ゼレカも……ゼレカ、ありがとつ……」

「ははっ」

それから少しの間、ソルを抱きしめたままだった

「もう…大丈夫です」

「やつか」

「まだ身体の方が本調子ではないんですね」

「無理もないさ。俺だからこんなに早く回復出来るんであって、普通ならまだ倒れてもおかしくないんだから」

「そうですか。一応私は自然治癒力だけなら負けない自信があつたんですけど……」

「自然治癒力か……あつ

「やついえばソルもエレスと同じだつたつけ

人差し指の先を爪で切る

「同じとは？」

「『吸血魔』だったよねってこと」

「ええ、やつですけどそれがなにか」

「だったら血飲めば多少なりとも回復するよね」

「……やつことですか」

「ちよつと前に俺の血も飲んでみたいって言つてたし、ちよつといや」

「覚えてたんですか……／＼／＼聞こえてないと思つてたんですけど」

「俺の聴力を甘くみるなよ」

「やつですね……それではせつかくですか……かぶつ」

「ひゅつ……ははは……また変な声出た。結構慣れたはずなのに

……」

「はあ……じゅる……んつ……」

Hレスに飲まれてる時とは違った感覚になる。そもそもHレスと同じなら変な声は出なかつたはずだし

「ぐふ……！」ぐん……美味しかつたですよ

「やつ」

「おかげで身体が魔力に満たされできました」

「それはよかつた」

俺は吸われる度に快感が走るよ

「……ゼレカさんにお願いしたい事がいくつかあるんですけど言いますか？」

「もちろん。早速頼つてもうれしく嬉しいよ

「先程の事はエレスには内緒にしておこして下さい」

「ああ」

「そして……あの……」

？」

「時々でいいので、また血を吸わせて下さー／＼／＼

「なんだ、その事か。時々なんて言わば毎日でもいいよ」

これが毎日エレスに飲まれてるんだし

「いえ、時々でいいですー。」

פָּרָשָׁת
בְּנֵי
יִשְׂרָאֵל

「はい！ それでは私は失礼しますね」

「あ、もうこんな時間が

一ゼレカさん

一
何
？

「いのこりとあります」

パタン

それは反則だろ／＼／＼

ハプニング（後書き）

「あー、久しぶりにあれを復活させるが

「またくだらねえもんだろ?」

「人物紹介だ」

「……そういえばそんなのあったな

「やるつて言つてやつて無かつたからな。それでは

ベルゼブ・セクタイト・ネメシス

髪の色 深紅

瞳の色 青

髪形 長髪で左右の前髪の長さが違う。左の方が長い身長 172
cm

通り名 幻影の大魔王

アスターの兄でリリード・ネメシスの大魔王。話す時に一呼吸置いて話す癖がある。重度のシス口…

「おい。最後のはおかしいだろ」

「本当ぢや本当だけどな

「否定はしないが重度つてどうこう事なんだ」

『「『出金』の話の時のおれをみて重複と並わず向と並んで

ベ「……カチャン、ロシアンルーレットは好きか?」

テ「へ?」

ベ「弾は六発中六発だ」

テ「それロシアンルーレットとは言わな……」

ベ「……」

パンパンパン!

テ「おつわあ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0191t/>

吸血魔王と赤血魔神

2011年11月30日21時45分発行